「御飯にしましよう。」
お捨は細い聲で言つた。その聲はおびえるやうに震へ、且つしめつてゐた。
「途中寒いかも知れないし、腹がへると困るからうんと食べて置けや。」
と常造が勢をつけた。鰯の干ぼしと馬鈴薯との煮ころがし、干わかめの味噌汁、溫い飯。これは誰にも御馳走であつた。併し常造にそう言はれれば言はれるほど、みんな、のどに通らなかつた。さうしてさう言ふ常造自身も、默つて箸をおいた。默つて手を差しのべたお捨に、常造は、もう澤山だ、と言つた。
晩飯が終ると、もうみんなの氣持は何者かに追ひ立てられるやうであつた。日はとつぷりと暮れ、夜がこの小屋をおし包んで、原野は沈默のうちにひたつて行つた。小屋の戸口や、壁一重の外や、一枚の屋根の上に身をひそませてゐる惡靈共に內部を窺はれ、にたりにたりと冷嘲を浴せかけられてゐるやうな氣持であつた。裸蠟燭の火を一張の提燈にうつした。北星を帳につけ、彼にも此の家の最後の秣が與へられた。それを嚙む音が寂しく悲痛に聞えた。暗闇のうちに、細い燈をたよりに、馬櫓を最初にして、荷物が次ぎ次ぎに積み込まれた。重い馬櫓が常造とお捨の二人だけの手で輕る輕ると積まれた時、二人は不思議な力に微笑しながら、何か自ら勇氣づくものを感じた。荷物の內側に布團を重ね、その窪みに女たちや子供たちが、ちぢくまつて乘ることになつた。
「さあ、出かけるぞ。」

常造はさう聲をかけて、秣の入つてゐる叺を北星の頭からはづし、それを馬車の後方へ乘せた。
「忘れものはないかな。」
と、常造は獨言のやうに言つた。車の上からは何も返事はなかつた。常造は手綱を引き、舌を鳴らした。北星は歩きなれた路を、ごとりごとり歩き出した。
車の上の女たちは、寄り添うたまま棲みなれた小屋をふり向いて見ようとする氣配であつたが、暗闇の中で、それらしい形も見えなかつた。夜の闇が原野に隈なくひろがつて、ぽつんとただ一つ搖れながら、とぼつてゐる提燈の灯を吸ひこんでしまふばかりであつた。念佛の聲と、すすりなきが草上の布團の間から、かすかに洩れてゐた。北星は、なれた原野の夜路を先づ拓殖道路の方へと、ごとりごとり下つて行つた。
大崎には、先づ最初に、この拓殖道路へ出るまでが、原野の人の目を逃れる難關であつた。夜中のことだから大丈夫とは思ふけれど、萬一にも市街地から遲く戻つて來る者があれば、避け場がないのであつた。だから途中、誰と逢つても、聲を出してはいけないぞと、みんなに言ひつけて置いた。拓殖道路へ出れば、道路はかなり廣いので人に逢つても、默つて知らん顏をしてでも、通り拔けることは出來そうであつた。併し幸に誰にも逢はず、やうやく拓殖道路へ出ることが出來たが、その間の路の長かつたことは、何處か別の道へ迷ひ込んでゐるのではないかと思はれるほどであつた。大崎は手綱を曳いて歩みながらも、こんなに遠い路であつたかと、不審がつ

た。虹別（ニジベツ）市街地には、ちらほらと灯が見えた。彼は一瞬のうちに、此の市街地の人たちを思ひ浮べた。その中でも、秋田さん、小坂商店主、木挽屋の爺さんのことが一番はつきりと目に見えるやうであつた。自分の家の夜逃げのことは一番近い隣人の津田爺さんに明日にでも知られるに違ひない。津田爺さんはどう思ふだらう。出し抜かれたと思ふに違ひない。津田爺さんが移住民世話所の秋田さんへ知らせることは疑ひなかつた。すると案外に早く、市街地と原野中とに知れ渡ることになるわけだ。さう思ふと、遅くとも明日の朝までには標茶（シベチャ）の市街地を過ぎ去つてゐなければ、追手でも向けられそうな氣がした。津田さんや秋田さんは、出し抜かれたやうな氣持で濟むかも知れないが、小坂商店主は標茶（シベチャ）市街地の巡査派出所へ電話をかけて、自分たちの馬車を押へてしまふかも知れないと思つた。だが兎に角、拓殖道路に出て、ここまで逃げられたことは、自分の夜逃げが九分通り成功したもののやうに思はれた。拓殖道路は燈一つ見えない原野の闇の中にうねつてゐたり、或ひは恐ろしくいつまでも一直線に通つてゐたりして、がつかりするほど長く遠かつた。時々、寒い風が裸の林や、梢の枯葉や、黒い藪を無氣味に騒がせた。北星はそれでも、がたり、ごとりと、石を嚙む車を重そうに曳きながら、暗の中をしぶしぶと歩みつづけてゐるが、それが大崎にはいじらしく思はれた。幾年もの間、幾度も通りなれた道路であつたが、夜逃げする身には、薄氷を踏み、荊の上を歩むやうに思はれて、知らず知らずの間に歩度があせり氣味になつた。大崎ばやがて、幾年か前に新しい移住者として、雪の斑らに殘つてゐるこの原野の恐ろしい程の荒涼さに驚きながら、一團の人々と泥濘の道をやつて來たことを思ひ浮べた。そ

の時には人間の手の未だかからぬ原野の荒さと廣さとが、自然の埋れかくれた肥沃の寶庫のやうに見え、ただ一圖（いちず）に賴母しく思はれ、力の限り、根の盡きるまで開墾してやるぞと、一團の大勢の人たちと共に有頂天に、はしやぎながら押し寄せるやうに、この道路を東北へ向つて原野の奥へ奥へと、歩いて行つたのであつた。それが僅かにあしかけ五年後の今日、今夜は絶えず背後から追はれてゐるもののやうに、おびえおののきながら西南へと暗闇の原野の道をとぼとぼと辿つてゐるのである。切り通しの曲り路へ來ると向ふから誰か來ないかと恐れ、溪流の音がさらさらと鳴つてゐると、そこに誰かがひそんで自分の通るのを見据へてゐないかと疑ひ、風が林に鳴り、枯木がぎいときしむのにも心がひかれて、ぞつとした。彼は平常の寧ろ放膽な性質にも似ず、こんなに人間を怖れたことはなかつた。さうして時には、自分の背後からついて來る北星の鼻息や、蹄の音や、車の音や、また馬車の上にゐる家族たちの全くの沈默までが、自分に迫りつつある何ものかではないかと感じられて、思はず後をふりむいて見るのであつた。時々、提燈の蠟燭を新しくとりかへたが、幾にくくりつけた提燈は前方へ、前方へと、自分の歩んでゐる限り、無氣味にゆれてやまないぼんやりした影坊主をなげかけてゐた。

北星も眠そうな歩度で、永遠に休むことのないやうな夜道をごとりごとり荷馬車を曳いて歩いてゐた。布團の間に着ぶくれて、寄り添ふてゐる祖母、母、妻は三人の子供のやうに眠れはしなかつた。馬車の搖れるのと、夜氣の身にしむ冷さの他に、後から何ものにか追はれてゐる氣持と、もう後へ引くことの出來ない、なりゆきの先き先きに自分たちを待ちかまへてゐる不安と暗

さとに氣が張りつめてゐた。北星の歩度がいつもより鈍くさく思はれて、大崎はいらいらしながら、幾度か手綱を強く曳いたが、北星の脚は一向、はずまなかつた。考へてみると、これから先き、道は遠く長いので、北星を今から勞れさせてはならぬと思ひ、眠りこけそうな北星の歩度にまかせることにした。それに拓殖道路を標茶へ行き、その市街地を出てさへしまへば、誰にも見つかる危險はなく、また拓殖道路とても、もうこの夜中には通る者はないので、よく落ちついて考へてみれば、恐るべき人目に出逢ふ筈はなかつた。大崎はさう氣がついて、ほつとした。

標茶の市街地へ入つたのは、もうかれこれ十時頃であつた。細い暗い燈が、闇の中にちらほら見えた。犬の遠吠が聞えた。

「今どの邊さ來たね。」

「標茶の市街地だ。」

尋ねるお捨の聲も、答へる常造の聲も低かつた。常造は車の脇に來た。

「お祖母、寒いで震へてゐるやうだけど。」

「布團かけてやればいい。」

「布團ならうんとかけてあるから、つぶされて息がつまりそうだよ。」

「そんなに寒いか。」

「まるで震へてゐる。」

無事でここまで逃げのびて來た大崎には、不安は消え去つて度胸が据はつてゐた。さうしてこ

のままこれから先き、不案内の土地へ夜路をかけて行くことは難儀だと思つたので、今夜はここで泊つて明朝、明方に出發することに變更した。

「ここまで來いば、もう大丈夫だから、今夜はここの宿屋さ泊つて、あすの朝、早く立つことにするべよ。お祖母が寒くて震えてゐるんでは困るから。」

「でも、大丈夫だべか。」

とお捨が尋ねた。お捨たちには、標茶ではまだまだ不安があつた。

「大丈夫だ。おらの知つてる宿さ行くべ。」

大崎は北星の手綱をとつて、うす暗い舊市街地の方へ行つた。馬車はやがて、長い木橋を、がたがたと鳴らして渡つた。

「これは何處の川だね。」

「釧路川よ。」

「大きな川だことね。」

「ああ。」

大崎の聲にゆとりが出てゐた。荷馬車はやうやく橋を渡り終つた。馬車に乘つてゐるものたちには、闇に響く車輪の音が強く四隣に響き渡るので氣になつてたまらなかつた。舊市街地に行つて、大崎は見覺えのある馬宿と蹄鐵屋をかねた旅人宿の前に荷馬車を停めた。

宿屋の亭主は大崎の顔を覺えてゐて、さあ、お上りなさいと言つたが、また一度戸外へ出た大

崎が、ぞろぞろと一家族をひきつれて入つて來たので、亭主はあつけにとられた顏をして、彼等を眺めた。

「みんな、家の者でね、こんど釧路の方さ行くで、引つ越して來ましたよ。」

「さうですか。いつか探して來た新しい土地ですか。」

「いや、あすこではないですけど、釧路の町のすぐ近くで野菜ものの出來るとこを作らせてもらふことになつたでね。荷馬車が自分のとこにあるから、馬車で行かうと思つて。今夜のうちにここまで來てゐれば、あす中に釧路さ着けるべえからね。」

大崎は、最初の一つの嘘の上へ、ひとりでに幾つも幾つも嘘を積みかさねて行つた。

「それはいいですね。今年も虹別はとりわけてひどかつたつてさうだが、あんたとこはどうだつたかね。ちつとは穫れたかね。」

「お話にならないですよ。今年こそは、ほんとうにもう食べるもんもない有樣でなあ。」

とこんどは大崎は眞實のことを言つた。

夜も更けてはゐるが、祖母はじめ、みんなが寒さに震へてゐるので、かけそばを七つとつてもらひ、それを更に熱く溫めなほして食べた。大崎が亭主と言葉を交すほかは、誰も物おちして默り込み、寒そうに小さい爐をかこんで寄りかたまつてゐた。荷物は車のまま蹄鐵場の軒下へ引き寄せられ、北星は馬宿へつながれた。大崎は、明朝明け方に出立したいことと、晝と晩二度分の握り飯を作つて貰ふことを賴んで、みんなと一緒に澤い布團に着どころ緣をした。

張りつめた氣が、ほんのひと時ではあるが、緩んだせいか、一家族七人はただ一つの土塊のやうに、ぐつすりと眠つた。ただ布團に入つて、枕に頭をつけた暫時の間は、常造、祖母、母、妻の四人の大人は夜になつてから拔け出して來た彼等の棲みなれた開墾小屋が棟、柱、壁、床、屋根だけの裸小屋にされて、原野の中にぽつんと、放り置かれてゐる樣子を、めいめいに思ひ浮べた。

「おや、うつかりしてゐたなあ。爺つあんのお骨、外の馬車さ置いて來たけど。」

ふと、思ひついたお種が頭を少しもたげて、常造へ小聲で言つた。

「ああ、さうだつたなあ。でも、宿の人、寢てしまつたし、今持つてくるのも、おかしく思はれるから、まあ、今晩だけああして置かう。」

「佛さんに濟まんことだなあ。」

「でも、しかたがないさ、今晩だけ許してもらうさ。」

話はそれでぷつつり切れた。

「虹別の家はどうなるかなあ。」

と暫らくしてお種は細々と低い聲で呟いた。お種には、そこに何もかにもを置き去りにして來たやうに思はれてならなかつた。五年前に、祖先以來棲みなれた鄕里を旅立ちして來る時よりも、遙かに强いつながりが少しも絕たれずに殘つてゐるやうに感じられた。五年程しか棲まなかつた、然も苦勞と貧窮との他、何にもなかつた、人を虐げ殺ろすやうな土地に、何故かうも思ひ

がひかれるのか、無氣味なやうな感じがした。

併し睡魔が、不幸と不運と無明とのうちの老若男女一家七人のものを、死へ引きずり込むやうに深い眠りへ誘うて行つた。

着處寢はどこかしら、薄ら寒さが身にしみた。一と通りの熟睡が次第に淺くなつて曉近くなると、大人たちは寒さを感じて、床の中でもじもじし始めた。それに彼等は朝は早い癖になつてゐるので、窓のしらじらとしらむ頃には目をさました。大崎は床から出て、窓から灰白色の外を眺めた。雪のやうに眞白な霜であつた。

「ひどい霜が降りた。」

「どうりで、寒かつたものなあ。」

「早く出かけるべよ。」

大崎は馬宿の方へ行つて、北星へ秣をやつた。彼は北星の頸を平手で、ぱたぱたと叩いてやつて、元氣をねぎらつた。父親の手のなくなつた今日では、彼は女手ばかりなので、何かしら北星の力を賴るやうな氣持だつた。

祖母も母も妻も一齊に起き上つた。お捨は子供たちを起した。六歳になるお常が、むづかり始めたが、部屋の樣子の違つてゐるのに氣がつくと、おびえたやうに默つて着物をきせて貰つた。臺所で朝の仕度をする庖丁の音が聞えてゐた。お捨は何處か他人の家へ厄介になつてゐて氣がねするやうに、夜具を全部たたんで片隅へ積み、臺所から箒を借りて來て掃き出した。宿のおかみ

が火を持つて來て爐に入れながら、

「今日は釧路まで行かれるんですか。」

と尋ねた。

「さういふ積りですけど、馬車で行くので行かれるか、どうですか。」

お捨は、はばかるやうに返事をした。

みんなが代る代る狹い臺所で、そこそこに顏を洗つて部屋へ戻ると、朝飯が運ばれた。ひどく剝げたお膳ではあるが、めいめいのお膳の運ばれた時には、子供たちは目をまるくして驚き、喜んだ。お膳の上の皿數は賑やかではないが、それでも子供たちにとつては生れて始めてめぐり合ふ御馳走であり、祖母はじめ大人たちにとつても、久しぶりにお祝の膳につくやうな氣持であつた。その賑やかさと樂しさとは、曉方の白々した空を外にして、薄黃色い電燈の下で大崎一家族の口腹を充分に滿足させた。彼等はほんとうに久し振りで生き生きした氣持になつた。深い霜の朝の空氣は、ちくちく刺すやうに冷めたかつたが、身體の心から溫まつて來たので元氣が出た。

大崎は勘定を濟ませ、北星を曳き出して來て荷車の轅へ付け、祖母とその他の者は前夜のやうに、車の上の布團の間へ寄り添うて入つた。仕度が出來ると大崎は、門口まで見送りに出た、どてら姿の亭主に左樣ならと言つた。

「御機嫌で。」

と亭主は答へた。

白々と灰白色だつた空に、ほんのりと卵色の微光が浮んで來た。吐く息は大崎のも、北星のも、眞白く元氣が通つてゐるやうに見えた。釧路をさして南下する街道の曉の疼いまでに冷い空氣の中に、北星の曳く荷馬車の音が生き生きと響いた。大崎は生き返つて、まるで別な人間になり變つたやうに自分を感じた。

「おらたちは、どこさ行くんだか。ずいぶん遠い路、行くんだのう。」

と祖母のお若が、馬車の上の荷物の間から、しわがれた聲で言つた。お種もお捨もだまつてゐた。

常造はどなりつけるやうな聲で、

「新しい土地さいくのさ。おらの見つけておいた土地さ。鶴の棲んでゐる、すばらしい土地だよ。」

と言つた。

「鶴が飛んでゐるつたて、おらの目には、もう見えんものなあ。」

皆は默つてしまつた。北星の蹄の音と車輪の響と常造の足音とが、聞えるばかりであつた。北の國の冷い日光では、凍つた路がとけそうもなく、荒漠とした曠野の方へつづいてゐた。

標茶村の市街地を遠ざかり、淡いながら冬の陽光が曠野の上にひろがるにつれて、大崎の氣持

は夜逃げといふ後めいたい不安と、躊躇から次第に解き放たれ、「死の原野」とさへ言はれる土地から生命を持つて逃げ出すことの出來たのを悅び、今度こそは、安堵と、滿足との生活保證してくれるに相違ない新しい土地へ足を踏み入れようとしてゐる自分の心の緊張さを、强く感じるのであつた。彼は北星を手綱いつぱいに索いて先頭に立ち、車上の默りこくつた祖母と、娘ちち二人、更に荷馬車の後について、とぼとぼと歩んでゐる母のお種、妻のお捨、息子の秀造をも、勢よく引きずつて、ぐんぐん歩いてゐる氣持ちであつた。

大崎一家の夜逃げの荷馬車を樂々に通すことの出來る坦々とした地方費道路は、暫らくの間、釧路川の右岸を、川岸から餘り遠く離れずに南へと通じてゐた。大崎がこの逃亡の計劃を祕かに胸中に抱くやうになつてから、樣々の機會に色々の人々にそれとなく問ひ尋ねてみたり、また自身の踏査から推測したりして考へあげた新しい土地への入地の道順は、釧路川を最も容易に渡ることと、出來るだけ道路を利用し、路のない平原に入つてからの行程をなるべく短かくすることであつた。この目當てで樣々の人の言ふことを考へ合せてみると、標茶市街地ですぐ釧路川を渡つてしまふことは、その後で路のない平野を荷馬車をひいて長く、遠く放浪ふことになると思はれた。それで彼は標茶の南方に當る次驛の五十石驛あたりに架つてゐる橋を渡つて一度目的地とは反對の左岸に出で、茅沼驛を過ぎ塘路驛まで行き、その近くの二股あたりにある橋を渡つて再び右岸に出で、それから、平野の向ふに伸び出てゐるキラコタン崎を目ざし、平野を西南へ向つて斜に横ぎるより他に道はないと考へたのであつた。平野には、釧路川の他に、まだ數多の流れ

があることは彼の踏査でわかつてゐたが、釧路川さへ渡れば、その他は、それほどの困難もなく、どうにかなると思つた。

釧路川流域の右岸の道路は平野の上に折線狀に拓かれた平坦な單調の路であつた。心の緊張が少しづつゆるむにつれて、流域の平野は歩むものを退屈と陰鬱に吸ひ込むために次第に魔の口を開いて來るやうであつた。路は恐ろしく眞直で、やうやくその突き當りまで來ると、折線に、ぎくつと曲つて、其處からまた長い眞直な道が一本の棒のやうに平野に横たはつてゐるのであつた。さうして路が平坦で、雜儀がないだけに退屈であつた。さういふ路を二里ばかり來ると、路は泥川の釧路川に近づき橋の上に出た。橋を過ぎると、間もなく、鐵道線路があり、それを横切ると、路は線路に沿ふて、山際に通じてゐた。道路からは、右手に平野と、その上を、ぐねぐねと曲つて流れてゐる釧路川が低目に見渡された。

「おらたちの行く土地は、この平野につながつた向ふにあるんだぞ。」

と大崎は突然、ふり向いてどなつた。標茶の宿を立つてから、實に赤い間の沈默の後であつた。

「とつても廣いもんだなあ。」

と母親のお種が、誰も返事をしないので、とりなし顏に合槌をうつた。

「向ふさ行けば、もつともつと廣いんだよう。今から、びつくりしないでけれよ。」

と大崎は、おどけた聲で言つた。

「そこの處、通つてゐる線路は、おらたち虹別さ入いるときに乘つた汽車の線路だべかなあ。」

とお種が言つた。

「さうだ。あの線路だよ。」

「だば、今度の土地も、さう遠くさ行つてしまふつてわけでもないなあ。」

「さうともさ。だから、何んにも苦にやむことなんかないんだよ。今日はお晝までに塘路さ着いて、そこで晝飯たべて、それから原野さ、はいることにするんだ。原野さはいつてからは、先づ、うんと遠く見て二里半位だ。路はないが、夏とちがつて、草が茂つてゐないから、今日中に着かれるさ。それが難儀のやうなら、塘路で泊つて、あすの朝、早く出かけることにせば、大丈夫、間違ひはない。かへつて、その方が樂でいいかも知れん。」

大崎の言葉は獨り言になつてしまつた。お種は、もう何んと言つてみようもなかつた。十歳になる秀造は、道になれるにつれて、お種やお捨の傍を離れて道草を食ひ、蜻蛉を追うて遲れ勝ちであつた。

「秀、早く來い。遲れると、置いていかれてしまふだ。」

と母のお捨が、時々後を向いて、大きな聲で呼び立てた。

この「置いていかれてしまふぞ」といふ聲は、寂しい路上の風にすぐ吹き消されて終ふのであるが、默々として常造の命令のままに從ひ、ひきずられて行かねばならぬ一家の者どもの姿を最も痛々しく露骨に言ひ表はすやうに聞えた。寂寞たる道路を默りこくつて、思ひ思ひに歩みつづ

けてゐる大崎一家の姿は悲惨な宿命そのものが歩いてゐるやうに痛〻しかつた。山際を線路に沿うて一里餘り行くと、道は小山へと登りになつた。それを暫らく行くと露岩にさしはさまれた峠になり、その行手の麓は澤のやうな狹い平地で、細い川が流れて居り、つづいて右手に沼のひろがつてゐるのが見えた。

「池。池だ。でつかい池だ。」

と子供たちが喚き立てた。

「あれは池でないぞ。沼つてもんだ。」

と常造がどなり聲で敎へた。

「大きな沼だこと。」

と祖母のお若も驚いて聲を出した。

火山灰質の高原地帶の虹別原野から來た子供たちには、低い平地に白い布をひろげだやうに見える沼が不思議な魅力を以つて目にうつつたのであつた。

「あそこに、何かゐるべいか。」

と秀造が頓狂な聲を擧げた。

「魚がゐるにきまつてゐる。馬鹿だなあ。」

「どんな魚が。」

「いろいろんな魚よ。」

「釣れるべか。」

「向ふさいけば、沼はいくらもある。魚もゐるし、釣も出來るぞ。」

と大崎は勢よく言つた。

道は澤沼地の左側を山裾に沿ふて沼の方へ向つてゐた。やや小高い山裾の道を行くにつれて、沼が次第に廣く見え、やがては右側一帶が長い沼になつてゐるのが見渡された。

「大つかい沼だこと。」

と母親のお種も獨り言をいつた。暫らくの間、沼とその向ふに廣がつてゐる原野をやや見下ろしながら、初冬の冷い風に吹かれて歩いた。それから道は沼から離れて再び山の方へと入つて行つた。その山の背に來ると、林を通して、下の方に、白い湖面が見えた。

「あそこにも、大つかい沼があるよ。」

と秀造が手柄顏に叫んだ。

「さつきのよりも、うんと大つかいぞ。沼がうんとある。まるで沼だらけだ。」

「あれが塘路の沼だ。向ふに家が見えるべ。あそこが、塘路の停車場のあるところだ。あそこから、おらたちの原野さ入つて行くんだ。」

と大崎は皆に言ひきかせるやうに言つた。彼の指す方には、左方には奥の深そうな湖の一端が見え、右方には小さい沼が幾つかならび、その向ふには際涯もない原野が連なつてゐた。さうして、左右の湖沼の間に、白つぽい道路が一直線に橋か堤のやうに、こちらの山裾から向ふへ通じ

てゐた。塘路の市街地は、この地點から見下すと、前後には山、左右には湖沼と平原に、追ひせばめられた地峡のやうな一隅に巣喰うてゐる小さい村落であつた。併し大崎にとつては、原野と湖沼とに臨んで山ふところに抱かれてゐるこの市街地は、又とない頼もしい足溜りの土地でもあり、行く行くは彼の生活が是非とも、そこに連り結びつかねばならぬ宿縁の深い土地のやうにも思はれた。彼の目さす新しい土地からは何んとしても、最も近い距離にある村落としては、この塘路市街地であると思はれたからである。

「さあ、もう少しで塘路だ。」

大崎は再び歩み出した。坂路を下つて湖畔に出で、やがて、平坦な眞直な道路を通つて塘路の市街地にはいりかけた。

その時、急に大崎は怖しい不安に襲はれるのを感じた。それは、この塘路で、彼を追ふ者の手に捉へられはしないかといふ危惧の念であつた。さう思ひ出すと、不安は現實のやうに迫つて來た。その日、早朝に標茶を立つてから今まで彼の念頭から離れてゐた不安であつたが塘路驛に間近い鐵道線路を横切つたり、道路の右側に並行して線路を見たりすると、追ひ手が目の前に彼を待ち伏せしてゐるやうに思はれ出した。前夜、虹別原野を夜逃げしてからの時間を胸算してみると、まだ幾らにもなつてはゐないが、もしや今朝、驛家の津田爺さんがその事を知り、情けをかけて默つてゐてくれればよいが、あわてて世話所の秋田さんへ知らせ、それが小坂商店の主人の耳へ傳つたら、秋田さんは仕方のない奴と思ひあきらめてくれるだらうが、小坂は黙つて居をく

わへてゐるわけがないのだ。小坂はかつて、夜逃げした農家の後を馬で追ひかけ、標茶驛から電話と電信で驛々に手配して相手を捕へ、路上で彼の貸金を全部回收して引上げたことが時折りあつたのだ。それを思ふと、大崎は塘路市街地でゆつくりしてゐるのは不安であつた。彼はなるべく足早くそこを通りぬけ、釧路川を渡つてしまつてから、ひと休みする方が安全だと考へた。彼は微地の中へ入つてゆくやうな心地で、びくびくして市街地へ入いつて行つた。

大崎の歩む道は、いの間にか停車場の前へと、彼等を導いて行つた。市街地も驛前の廣場も、がらんとして人の姿は見えなかつたが、彼はどきんと、胸のうつのを感じた。人目の多い驛前へ夜逃げの一家が飛び出してくるのは、まるで、捕まへられに出たやうなものであつた。彼は何んとかして、みんなの姿を、物陰にかくしてしまはねばならぬと思つた。それから又、釧路川を渡つて、キラコタン崎の方へ原野を横ぎつてゆく方角をよく聞き尋ねなければならなかつた。彼は驛前の廣場から、街道を少し戻つた處に、「お休み、うどん、そば、お酒、お肴」とある小店まで荷馬車をひき戻つた。

「ここで、蕎麥食べて、ひと休みするべ。もう書飯どきになるから。」

さう言つて、大崎は荷物の間から、祖母のお若と二人の小娘を抱き降した。北星には、かますに入れた飼料をあてがつた。その小店では、床に細長い机を置き、兩側にベンチがあつた。そこへ大崎一家が、おびえるやうに倚り沿うて腰をかけた。店の左手に狹い臺所があり、それに續いて奥に茶の間があつた。三十五、六歳の主婦らしい女が、三十部位の新聞を郵送するやうに一部

づつ帶封をかけ、それに一々宛名を帳面から書き寫してゐた。大崎は主婦に、かけそばを注文した。主婦はそばは出來ないが、うどんならと言つて、臺所へ出て來て仕度にかかつた。大崎は臺所の上り框に腰をおろして、煙草を喫ひながら、用心深く主婦にぽつりぽつり尋ねた。

「今年は、この邊の作、どうでしたかね。」

「しどい出來でしたよ。まるでお話になりませんよ。開墾に入つた人たちは、ほんとうに氣の毒ですね。その日その日の食べものに困るつてことですからね。」

「どこの土地でも、さうだつたのですね。」

「あんた方、どつちから來なすつたですか。內地から開墾に、渡つて來なすつたのですかね。」

「いや、標茶の方から來たがね、これからこの原野のキラコタン崎の方さ、入つて行くところですよ。ここから釧路川を渡るのが一番、樂だと聞いて來たんですが、どつちの方になるんですかね。」

「キラコタン崎つてところは、獵師たちが時々、店で話してゐるので聞いてゐますが、あちらの方には、まだ路なんか、ついてゐないんでせう。」

「さうらしいです。釧路川を渡るには、この邊に、橋がかかつてゐるんでせうか。」

「橋は停車場の少し下の方にありますが、その橋は中雪裡行きの軌道が通つてゐるので、軌道を行くとずつと、北西の方へ行つてしまひますよ。キラコタン崎の方へは原野を西南の方へつつきつて行くしか、仕方がないでせう。あちらで開墾なさるんですか。」

「ええ、あつちに、新しい開墾地をもらひましたので。」

「いつそのこと、釧路から川船をたのんで行つた方がよかつたかも知れませんね。釧路川から雪裡川、クチョロ川を、のぼつて行けるさうですから。獵師たちは、この原野を船で渡り歩いでゐますよ。」

「馬車を持つて來てゐますから、船では困るでせう。」

「でも、馬車であの原野を行けるでせうか。路のない野地ださうですから難儀ですよ。」

「さうでせうか。まあ、行けるところまで行つてみて、馬車がどうしても行けなくなつたら、原野が凍れて馬橇のきくまで、荷物を預つて置いてもらひますさ。」

醬油の中へ乾うどんを投げこんだやうな、うどんかけが出來た。途中で腹がすかぬやうにと、大崎はみんなに、お代りをさせた。注文ものを出してしまふと、主婦は茶の間で再び新聞の帶封をかけ始めた。大崎は二杯目のうどんを、手早く食べ終つて煙草をすいながら、主婦の手もとをみてゐたが、やがて尋ねた。

「その新聞は、何處さ送るんですか。」

「これはみんな、この邊の開墾に入つてゐる家へ送るんです。ここまで、まとめて汽車で來たのを、私とこで一軒一軒、郵便に仕立てて郵便局へ持つて行くと、局では、それを毎日配達するんですよ。毎日のことですから、なかなか手數でして。それに、この頃では、うつかりしてゐると、囚作で夜逃げしてしまふ家がありますので困ります。」

大崎は、はつと胸をつかれたやうに默つた。彼はやたらに言葉のつぎ穂を頭の中で探した。

「おらたちも、落ちついたら配達をたのむことにするかなあ。それで一と月、なんぼ拂へばいいことになるんですか。」

「北海タイムスなら、誌代が月一圓で、送料が十五錢、それで一と月、一圓十五錢ですが、私とこの手數料を入れて一圓三十錢になります。でも、郵便配達の區域でないと困ります。毎日配達するんですから。」

大崎は、もうそれ以上、その話にかかわつてゐるのは、氣のつまることであつた。腹ごしらへが濟み、釧路川を渡る橋がわかり、キラコタン崎の方向がわかれば、あとは一分も早く、人目につき易い釧路の市街地を離れなければならぬのであつた。

「どうも、どつつおうさんでした。まあ、行けるとこまで行つてみることにしますわ。」

大崎は内心の不安や焦燥を、わざと、應揚な言葉と物腰で押し匿しながら支拂を濟ませ、祖母と小娘たちを荷物の間へ乘せて、主婦から教へられたやうに、拓殖軌道の方へ歩き出した。拓殖軌道の始點といふのは、塘路驛の構内のやや下手にあつたが、直接そこへ行くには、構内から鐵道線路を横ぎらねばならぬので、荷馬車をひいては許されぬため、彼等の通つて來た街道をもう少し先きへ行つてから右へ折れる道路に入いり、それを少し行けば、橋のところで軌道に出られること、また軌道をそのまま行けば行くほど、北の方へ行つてしまふから橋を渡つたら、川に沿うて南へ下つて行くやうにすることを、教へられたのであつた。

細い路は橋のたもとで拓殖軌道に合してゐた。軌道は狹い橋幅いつぱいに敷かれ、橋を渡ると、軌道の幅だけの路が一筋だけ、刈分け路のやうに、長く細く左右の葦原の中を通つてゐた。軌道の枕木と枕木との間の土が輓馬の往來の爲めに蹴り掘られて窪んでゐるので、北星の輓く荷馬車の車輪は枕木にごとんごとんと、絶えず續けざまにぶつかり、車體がひどくゆすぶられ、荷物は躍りあがり、その間に、うづくまつてゐる祖母と小娘たちは懸命に荷物にしがみついてゐなくてはならなかつた。

併し大崎は、祕かに最も案じてゐた釧路川を渡ることが、かうして何んの苦もなく過ぎてしまつたので、氣をよくし、自分の前途に早くも光明が輝いてゐるやうに思はれた。原野の上には、まだ幾筋もの流れはあるが、彼の踏査では、それらはいづれも深いか、淺いかで、彼の渡渉を阻む程のものではないことがわかつてゐた。原野の灌木や雜草、殊に葦原、笹藪は歩行を難澁にはするが、いざとなれば、根氣よく伐り開いて行くばかりだと考へた。だから、釧路川を橋によつて、樂々と渡つてしまつた彼は、既に目的地についたやうな氣持がするのであつた。彼は、軌道をそのまま行けば北の方へと戻つてしまふことになる、と教へられたのを思ひ出して、北星の歩みを停めさせ、車輪の上へ立ち上つて原野を、前後左右に眺め渡した。その邊りは一帶に逞ましい程に雜草の叢で、草丈の高い葦の密生地帶もそれに續いてゐた。草原は總じて、どこも北星の背丈を埋める程、深く茂つてゐる樣子であつた。冬の迫りつつある荒野なので、草木には生色なく、一面に白ゝとした眺めの底に、暗褐色、白黃色、茶灰色の草原や林が荒蕪のやうに廣がつて

ゐるのであるが、眺めてゐるうちに、どこか、虹別の原野とは異つた感じがこもつてゐるやうに感じられ、虹別の原野よりも廣く、瑞々しく草木を穠らせる力が地の底にこもり隱れてゐるやうに思はれた。おりから、叢から叢へ、飛び渡るおびただしい雀の群が、彼の間近くまで飛んで來たが急に、人間に驚いて、ぱつと方向を換へ、遠くの叢の中へ降りて行つた。

「どうだ。野良雀があんなにゐるぞ。」

と車輪の上に突つ立つてゐる大崎は、荷馬車の後に續いて立ち停まつてゐる母親や妻を見下ろして言つた。野良雀なぞは、本當は作物を荒らす厄介物なのだが、こんなに大群が棲んでゐるといふことが、何がなし、この土地の豐沃さを示す吉兆のやうに、感じさせるのであつた。

「もう、この邊で原野さはいるべえ。」

やがて、大崎はさう強く言つて、車輪の上から飛び下り、北星の手綱を短くとつて、軌道の左側の叢の中へ踏み込ませようとした。併し原野よりも、やや小高く地盛りしてある軌道から、冬枯れてはゐるが雜草の茂みの窪地の中へ踏み込むのは、荒野に馴れた北星も、少し躊躇した。

「やい。こんな草つ原がおつかなくてどうする。けつぱれ！」

と大崎はどなつて、手綱を打ち鳴らした。すると、北星はぐわん！と蹴上げるやうに、荷馬車をゆり動かし、軌條に横車をぶつつけて、大崎を馬車ごと引きずるやうに、雜草の中へ駈け込んだ。北星と荷馬車とは勢よく、轉ぶやうに、軌道から原野の上へ駈け降りたが、車輪や北星の背丈にも達する雜草は、重い荷馬車を輕く北星の歩みを阻み、その上、原野の土は、軌道のやうに

は固くなかつた。大崎はこの原野の土の軟かいことを、かつての踏査で、自分の足裏を以て、ぢかに知つてゐたばかりか、その虹別原野との相違を、かえつて頼母しく思つたのであつたが、それにしても、この邊りの土は、彼の踏査した邊りよりも、軟かのやうであつた。彼は釧路川の流れに近いせいだと思つた。併し車輪が少しぬかるので、北星を樂に歩ませる爲めに、雜草のひどい處は、彼を先頭に妻と秀造も、鎌を持つて雜草を刈り分けて路に敷き、母親のお種が、北星の轡を取つて進むことにした。

「かうして置けば、ひまどるけど、こんど塘路さ出るときに樂でいいぞ。」

彼はさう言ひながら、時折り背後をふり向いて、道がなるべく迂にならぬやうに、曠野を斜に突つきる氣持で進んだ。

釧路川の畔から離れて平野に入つて行くにつれて、潤葉の灌木も疎らになり、雜草と蘆の荒地がむき出しに、灰色の大空の下に廣がり續いて來た。渴水期に入つてゐるので、水は涸れてゐるが、曠野の逃げ水の溜り跡が處々に横たはつてゐて、北星の脚と、車輪とを泥濘の中に引きずり込んだ。さうしてその濕地が次第に多くなつて來た。

「秋の出水の後で、こんなかなあ。」

と大崎は獨り言をいつた。彼の踏査した夏は、濃霧と降雨の多い夏ではあつたが、かうひどいとは思はなかつた。それに、一人で氣儘に原野を歩き廻つてゐるのと、かうして荷馬車をひき、足弱の女、子供たちをつれてゐるのとでは、足の動きがまるで別であるやうに感じられるのであ

つた。蘆の厚く密生した處では、彼が北星の轡をとつて、北星と一體になつて蘆原をかきわけて突進すると、女、子供たちは、荷馬車の通つた後から、喘ぎよろけながら、ついて來るのであつた。道は一向捗らず、幾度も立ち停まらなくてはならなかつた。

「こんな草の中を歩いて行つて、何處さ出られるんだべかねえ。まるつきり道がないとこみると、人つ子の通つたことのない野つ原だねえ。」

と母親のお種が嫁のお捨に言つた。海のやうな草つ原の中を踏み分けて歩いてゐると、目標の山も見えないので、何んの爲めに何處を目當てに歩いてゐるのか、自分の一切の目的への頼り處を失つたやうな氣持になるのであつた。お捨にしても同じ思ひではあつたが、返事のしようもないので、わざと、聞えないふうをしてゐた。併し大崎にも、その言葉はよく聞えた。

「なあに、向ふに山の崎がある。その崎さ出れば、いいんだよ。人の通らん處だから、いい土地がまだ殘つてゐるのさ。慾つたかりの人間の來んところさ行かなければ駄目ださ。」

大崎はさう嘯いて、聞かした。彼はなるべく足を停めさせぬやうにした。足を停めると、その度に、女たちの顏に不安の陰影が現はれ、それがつひ言葉になつて出るので、女たちに考へる暇を與へぬやうに、みんなを引きずつて行かうとした。最も難儀なのは北星であつた。路のない、ぬかり勝ちの荒野の濕地を重い荷馬車を輓きながら、叢の中を進むので、背から腹まで汗を流し、粗い鼻息を吐き、喘ぎつづけてゐるのであつた。大崎は小娘のお松とお當をも馬車から下ろして、歩かせることにした。お松は八歳、お當は六歳であるが原野に育つてゐるので、かへつて

蕊や藁の中を、みんなと一緒に歩くのが嬉しそうであつた。大崎は、小娘二人だけでも、北星にとつては、荷が輕くなつたと思つた。遊び相手の出來た子供たち三人は、轍の通つた後の木の根つこに、蛇の脱け殼や、小鳥の巣を見つけて有頂天に喜び上つた。處々に淺くはあるが、平野の逃げ水の溜りが、彼の行く手をさえぎることがあつた。すると、大崎はみんなを、そこに休ませて置いて、進路を踏査してみるのであつた。その度に、彼は車輪の上に突つ立つて、平野の向ふに伸びてゐる山の崎を目當てに、水溜りを右へ廻ればよいか、左へ廻ればよいかを、見定めるのであつた。小さい水溜りのやうに見えても、路のない廣い平野の上では、馬鹿に出來ない道距の損得と難易とがあつた。

かうして小一里も來たかと思ふ頃、細い川に出た。水はかなり澗れてはゐたが、地下足袋をどつぶり冷い水に漬けてしまふと、後が難儀なので、彼は荷物の中から、長い澱粉靴を取出して履替へた。それから淺そうな、車輪のなるべく、ぬからぬやうな處を瀬踏みして、その向ひ岸に、北星が脚力をがんばれるやうに鍬で土手を崩して、足場を作つた。

「先に車渡してから、みんなば、おぶつてやる。足をぬらすと、あとで冷たくて困るから。」

大崎はさう言つて、北星の轡を固く握つた。さうして、いきなり北星をどやしつけた。北星は驚き、勢ひこんで、狂奔するやうに河原へ駈け下り、その勢で、がむしやらに、川をこ窪渡つて、向ふ岸へ駈け上つてしまつた。大崎は向ふ岸へ北星に引きずられるやうに上つた處で、土に躓づいて、北星の足もとに膝をついてころんだ。併し大崎は一氣に川を押し渡つた北星の元氣に

よろこんだ。

「偉いぞ、北星。」

大崎は立ち上つて、北星の鼻端をなでてやつた。

「えらかつたぞ。おら、川の中さ、投げ出されるかと思つた。頭が、があんとしてしまつた。」

と祖母のお若が荷物の間から顔をのぞかせて言つた。大崎は、はつとした。祖母が馬車にのつてゐたことを思ひ出した。

「濟まんかつたなあ。お祖母うつかりしてゐたたあ。かんべんしてけれや。おら、どうして、車ば渡したらいいかと、そればかし思つてゐたで。こんど、氣をつけるからなあ。臀つこ、痛かつたべなあ。」

大崎は、あやまりながら、おかしくなり、機嫌がよかつた。彼はそれから、子供たちと母親とを、背負つて渡たし、最後に妻のお捨を背負はうとした。お捨はさすがに、自分で渡ると言つて、向ふ岸にみんなの見てゐる前で夫に背負はれることを耻しそうに遠慮し、彼女の前へ、廣い肩をさし出して、しやがんでゐる夫の背に、おぶさるのを躊躇したが、大崎が「遠慮なんかすんな。早く向ふさ行かなければならんから」と、せき立てるので、お捨はおづおづと、夫の肩につかまつた。大崎は輕る輕ると背負つて、川を渡つて來た。

「やあ、お母あ、お父におんぶして來た。」

と子供たち三人は、こちらの岸で手を打つて囃したてた。

「お父とお母と、通うせんぼう。お父とお母と通うせんぼう。通うせんぼうなら、通うらんぼう。」

子供たちは、さう唄つて囃した。

「馬鹿、なに言つてる。そんなこと言ふもんでない。」

と子供たちの祖母のお若が、子供たちを叱つた。

この間に、大崎は川を渡りながら、

「もつと、しつかり、つかまつてゐないとずり落ちてしまふぞ。もつと、がつしりと、つかまつてゐれよ。」

と、背中の妻にどなつた。お捨は赤い顔をして、岸の上のみんなの前におりた。

かうして、みんな川を渡つた。大崎は、澱粉靴を地下足袋に替へながら、

「どうだ、みんな腹へらないか。此處で少し腹拵へするべよ。握り飯出せよ。」

とお捨に言つた。大崎は鎌で枯草や小枝を切りあつめて焚火をし、瀬戸びきの藥鑵に川水をくんで來て、股木にかけた。馬車から藁莚をとつて敷き、祖母と母とをその上に座らせた。北星にも、水を飲ませるために、轅からはなして川へつれて行つた。北星が水を飲み終ると、つれ戻つて秣をやつた。その間に、湯が沸いて來た。一つの茶碗で飲みまわしながら、握り飯をたべた。

「かうして、ぢつと座つてゐても、がたんがたんと動いてゐるやうな氣がする。」

と祖母のお若が言つた。さう言ひながら、自分で身體を搖つてゐる樣子に見えた。

「でも、郷里から出て來る時の汽船よりは樂でないか。」
と大崎は祖母の氣持を輕くする爲めに言つた。
「さうかのう。あの時には、でも、大勢で氣が強かつたのう。なんにせ、賑かだつたもの。」
「その代り、あの時は、みんな、めいめいが十町しか、あたらなかつたが、こんどは三十町でも五十町でも、欲しいだけ、要るだけ、開墾するだけ、あたるんだよ。もう少しの辛棒だから、がんばつて下さいよ。」
大崎はさう言つて祖母をなだめながら、煙草を喫ふた。
「おら、夏に土地ば探しに來た時には、きつとこの川のもつと上の方を渡つたに違ひない。その時には、もつと、水があつたよ。これから先きに、もう二、三本、川があるけど、今は水の涸れどきだし、何しろ、釧路川を渡つてしまつたから、さう大したことはない。おらたちは、いい時にやつて來たんだよ。」
と大崎は皆に、元氣をつけるやうに言つた。
「これも爺さんたちの導きに相違ないよ。新しい佛さんの爺さんと、古いおらの夫の爺さんのことだよ。おらの死んだ夫が、おらたちみんなで、今ごろ、こんな野つ原に焚火たいて、握り飯たべてゐるのを、どつかで見てゐなさるだべもの。可哀そうなやつと思つて見てゐなさるべ。だから、おらたち、どんなに、野つ原の上ば、迷つて歩きまわつてゐても、きつと、見てゐて、いい方さ導いてくださるべさ。」

と祖母が言つた。大崎はかう云ふしめつぽい話はたまらなかつた。
「さあ、出かけるべよ。おらたちの行く處は、ちやんとわかつてゐるし、きまつてゐるんだから。迷つてゐるんではないから安心してゐなさい。さあ、出かけるぞ。」
大崎は、太い聲で言つて立ち上つた。
「どうだ、見れ。おらたちはもう、あれだけ歩いて來たんだぞう」と大崎は背後の方を指した。
「あの山際に塘路の市街地があつて汽車の線路があつたんだ。あそこから、此處まで歩いて來たんだが、あの山の遠さと、これから先きに見える山の遠さとは、どうだ、同じ位だべ。おらたちの行くのは、向ふの崎から又、野つ原を通つて、もう一つ向ふの崎の麓のところなんだ。だから、道程にせば、三つ一つは來たんだ。おら、此處さ、目印し一つ立てて行くべ。これから塘路さ出る時の道印しになるからな。」
大崎は蘆の穂を一束刈りとつて、それを荒縄の端切れで焚火をし、すぐ間近かの灌木の梢に結びつけた。それは、何かしら、曠野の通り魔に對する魔除けのやうでもあり、或ひは彼等の後からこの曠野に足を踏み入れるものに向つての呪詛のやうでもあり、彼等の運命に對する凶兆の暗示のやうでもあつた。併し大崎一家は、ひと休みの後の再び元氣づいた歩みをつづけた。
空はいつの間にか薄曇りとなり、冬の太陽は、かなり傾いてきた。冷い風が、處々に、粗らに立ち殘つてゐる樺の木の褐色の大きい枯葉や、蘆の密生地帶に強い音をならして吹き過ぎた。汗の後で、濕つぽい荒野の風が殊にぞくぞくするやうに冷めたかつた。黄昏が寒氣と共に曠野に廣

がつて來るのが、感じられた。大崎は歩きながら、その日のうちに、手前の崎に辿りつくことはあきらめて、何處か適當の場所に野宿の用意をしなければならぬと考へた。夏の獨りの野宿でも、夜半には、かなり冷えたことを思ひ出すと、今度は初冬の曠野に老婆、女、子供を伴うての野宿は、さう簡單ではないと思つた。併しどの道、野宿するにしても、彼等が必ず出逢ふに違ひないあのもう一つのやや大きい川を渡つてからにしたいものだと思つた。その川を渡つて、手頃な小さい灌木林でもあれば、そこそ、野宿に便利なところだがと、思案しながら歩いた。

「もう間もなく日が暮れるだに、まだ着かれんかのう。野つ原も廣いかはり、そのおらたちの土地つてとこも遠いのう。まだまだかのう。おら、車の上で樂そうだけど、寒くてなあ。」

と祖母が馬車の上から孤獨に耐えられなそうな弱い聲を、大崎にかけた。

「遠いわけではないけど、何んにせ、草が深くて、路のないとこ行くんだからなあ。暇どるで、おらも氣があせるけど、しかたないさ。路に間違ひはないんだから、安心してゐてけれ。ただ、今夜一晩だけは、どこかいいとこで、野宿しなければならないけど、おら、暖いやうにして寢せてやるから心配しなさんな。もう少し行くと、たしか、川があるから、そこで今晩泊ることにするべ、」

大崎は祖母だけにではなく、母や妻にも、きかせるやうに言つた。併し馬車の上で、餘り口をきくこともなく、永い間、遠い道をひどく、ゆられ通して來た祖母は、心の奥底の不安と悲嘆とに一度に吐け口を與へたやうに、獨りで悲しみ呻くやうに、つぶやき出した。その聲は、誰れの

目にも見えぬ何者かに訴へ悔むやうで、かぼそく、とぎれとぎれではあるが、執拗であつた。

「この邊は、よつぽど、原野の奥と見えて驛遞宿もないとこらしいのう。」

と祖母は言つた。併し大崎は默つてゐるより他はないと思つて、返事をしなかつた。祖母は獨り言のやうにいひつづけた。

「おらたちは何處さ行くのかのう。朝から晩まで、かうして路のない野つ原の中を歩いてゐるんだのう。野つ原の中で、何處さも出られないで、迷ひ死にしてしまうんでないかのう。草はひどく深くなるし、地は惡くなるやうだし。おらたちは一家みんなが、地獄の原つぱを、まよひ歩いてゐるやうなもんでないか。神さまが、どこか高い天から見下ろしていらつしやつたら、きつと、さう思はつしやるに違ひないのう。おらたちは、もう何んかの罰をあてられてゐるのかも知れんのう。郷里の土地ば見捨てたで、おらたち一家のものは、誰もかれも一生涯、土地で苦しめられることになるかも知れんのう。土地つてものは、神様みたいもので、害なことをすると、きつと罰をおあてになるのだのう。郷里の土地を見捨てた、おらたち一家のものの運は、もうきまつたやうなもんだのう。おらたちはきつと、この土地で死んだり、散り散りになつてしまうのが定命かも知れないのう。おら、何んかしら、そんな氣がしてきてならんのう。」

「そんな氣の弱いこと言つてどうなるべよ。おらたち一家の運は、そんな弱いもんじやないど。これから運が開けて來るんだよ。この新しい土地で、おらたちの運ば開くのさ。その氣でなかつたら、誰がこの野つ原さ入つて來られるもんか。」

と大崎は、喰ひつくやうに、言ひかへした。
「さう、思ふやうに行つてくれればいいけどなあ。」
「いくとも。なんにも心配することはない。」
大崎は、祖母の弱音が、母や妻の氣持を挫くのを恐れた。馬車に搖られどほしの疲れ、寒さ、孤獨感、寂寥、等がごつちやになつて祖母の氣持を滅入らせ、今にも死んで行きそうな呼吸の聲を思はずも、もらすのだと思つた。
「もう、ここまで來いば、誰れにも見つけられる心配はない。」
と大崎は考へると、早くその邊で野宿につかうといふ氣持ちが強くなつた。
野面が急に暗くなつた頃、灌木の疎林に緣どられた川岸にやうやく辿り着いたが、その疎林の手前では深く厚い蘆原と、その下にかくれてゐる泥濘とに苦しみ惱まされた。大崎は北星の轡を引つぱり、女、子供たちは馬車の後押しをした。
「もう少しだ。がんばれ。この蘆でいい寢藁こしらへてやるぞ。」
と大崎はどなつた。北星も、憐れな主人一家の痛々しい夜逃げの有樣と主人の氣持ちを察したものか、本當に從順に且つけなげに、がんばり通した。自分がこの大崎一家を最も安泰で裕福で幸運な運命の土地へ導いてゆくことの出來る唯一の働き手であると信じきつてゐるかのやうに見えた。彼は忠義な役畜であるばかりではなく、運命の神の遣はした道案内のやうにも見えた。大崎には益々、北星だけが自分の力になる頼もしさを持ちながら、然も漠々として不安も不平も嗟

嘆をも訴へぬものとして、今迄になく可憐に思はれるのであつた。
大崎は蘆原をこぎぬけ、川ぶちへ出て、ほつとした。彼は此處まで來れば、目的の大半は達したかのやうに思はれるのであつた。さうしてその日一日の道程が終つたのを、兎に角、安堵と滿足とで喜びたく思つた。
「いいと思つたことは、思ひきつてやつてみるに限る。さうすれば、きつとうまく行くのだ。何んでも思ひきつて、やりぬかなければ駄目だ。」
彼は今度の新しい入地に、大つぴらな自信と誇りを強く感じるのであつた。
「今日は此處で泊ることにしよう。あしたは、どうにでも、おらたちの土地さ寢るんだから、今夜一晩、辛棒してけれよ。さあ、みんなでその邊の蘆を、うんと刈り集めるんだ。」
大崎は、さう言つて、母と妻と子供たちに鎌を渡した。鎌をうけとつたものは、一勢に蘆原へとりついて、ざくざくと刈り始めた。大崎は木の根つこへ、莚を敷いて祖母を馬車からそこへ下ろし、北星を轡から解き、川へ連れて行つて水を飲ませてから、傍の木につないだ。彼は鍬をとつて、地面に淺い穴を掘り、枯枝をとつて焚火を作つた。さうして祖母を焚火の近くに移らせた。彼は川へ下りて水をくまうとしたが、餘りきれいではなかつたので、手拭で幾度も濾して湯沸しに滿たし、それを又木に吊して焚火の上にかけた。女、子供たちが刈り集めた蘆を焚火のぐるりに積みかさね、又、荷物を積んだまま、轡を地面につけて、車體の後部を上げてゐる車の下に積み込ませた。それから、莚を車の外側へ垂れ下げて圍にした。北星のためにも、寢藁を木

の根に敷いてやり、背中には莚を一枚かけて結んでやつた。

みんなは、焚火を圍んで身體を暖めた。初冬の冷い曠野ではあるが、路のない荒地を難儀して歩いて來たので、汗が出て、それが冷い黄昏の風に吹きさらされて、焚火にあたつても、顔や胸は暖いが、頸や背筋は、ぞくぞくする冷たさを感じた。布團や丹禪を取出して、二人づつ仲間に背に掛けて曠野のしみ込む冷氣を、いくらかでも防いだ。妻のお捨は食事の仕度をした。仕度といつても、冷えきつた握り飯を、めいめいに渡し、二、三本の脂臭い身欠鰊を焚火にかけて、幾つかに裂いてめいめいに渡すことだけであつた。それでもみんなは、冷い握り飯と、燒け焦げた脂臭い身欠鰊を貪るやうに食べた。さうして金氣臭いのも氣にかからぬふうで、川水の湯をがぶがぶと飲んだ。祖母のお若は身欠鰊の一片を、いつまでも、もぐもぐ、しやぶつてゐた。

曠野は焚火の周圍だけを殘して、もういつの間にか暗くなつてゐた。焚火のはじける音が、森閑とした曠野の闇の中に滅入るやうな寂寞の感じを與へた。その焚火の音のほかには、何處か大地の底からでも響き傳はつて來るやうなちいんと、耳底にひびく物音が、何物かの呻き聲が聞えるやうに思はれるのであつた。大崎は身體が暖まると、立つて疎林の間を歩き廻り、薪にする枯枝を取り集めて來た。さうして、一とくべくべて、暖まるとみんなは車體の下の蘆の寢藁に布團や丹禪と一緒にもぐり込んで寢た。子供たちは貧困にはなれてゐるとは言ひ、こんな寢床の野宿は生れて始めてなので、はしやいで、蘆の中から顔を出したり、隠したりしてゐたが、焚火が次第に消えて、闇が鼻先きまで迫り、「そんなに騒いでゐると鬼が出てくるぞ」と、母親のお捨に

おどかされると、本當に鬼も棲んでゐそうな荒野の闇に急にびつくりして、お捨にすり寄つて來て、息をひそめ、やがて眠つてしまつた。

大崎も、早く眠りに入つた。彼は生れて初めて、こんなに伸び伸びと屈托なしに眠れると思つた。彼は、最早や絶えず彼の後を追ひかけてくる債鬼、絶えず彼と一緒にゐて彼から離れることのない飢餓の不安とが、今こそ、はつきりと彼から離れ落ちて了つたやうに感じた。借金と餓え死との心配さへなくなれば、百姓の暮しは安樂で好ましいものに相違なかつた。然も、さういふ暮しが、今、始まりかかつたのだと思ふと、蘆の寢床の中にもぐる一晩の野宿が、二晩でも三晩でも苦にならなかつた。彼はさう思ひながら、伸び伸びとした氣持で間もなく眠つた。

併し三人の女たちは、さう容易く眠ることは出來なかつた。祖母のお若には、何にもかにもが見さかひのつかぬ混沌であつた。遠く離れ、遙かに過ぎ去つた郷里のことも、虹別開墾への移住から現在、曠野の野宿に至る目まぐるしい移り變りも、これから先き、我が身がどうなつてゆくか、その行末のことも、もう、どうにも區別の出來ぬ混沌で、茫然としびれたやうな頭では、ただ目のあたりの闇に面してゐるのと、全く同じであつた。郷里の昔のことが、何かしら思ひ出されるやうには思はれるが、それが何んのことであるかを、はつきりさせる頭の力は、もはやその差別をつけかねるやうであつた。身の行末についても思ひは同じであつた。苦しみについても、過去と現在との苦しみを比べてみるだけの力もなく、また苦しみを行末の樂しみに較べてみる望みもなかつた。さうかと言つて、行末はどうにでもなれと、我が身を投げ出して諦めをつけた

り、或ひは目に見えぬ大きい力に、委ねきつて安心してゐるわけでもなく、ただ、わけもなく時と境遇の流れのままに從つてゐるといふに過ぎないのであつた。ひと言でいへば、祖母のお若はいつの間にか、心身共に呆けて來たのであつた。さうして呆けてきた祖母には、眠られぬことが一番苦しかつた。然も眠りは、この老ひさらばへ、呆けた心身にはまるで、その日その日の天氣具合のやうに、むらであつた。或る晩は、死んだやうによく眠るかと思ふと、或る夜は全く眠れずに明かすのであつた　永い生涯の勞れが、安らかな眠りの樂しみを奪ひとつて、幸ひに眠れる夜は、呆けた生物に過ぎず、何の思ひ出もなく何の希望もなく、萬象ことごとく、虚無でしかない夜の闇の中に息を殺して、うづくまつてゐるに過ぎないのであつた。此の夜も、冷えと勞れは祖母を眠らせなかつた。併し目はさえるが、とりとめのない考へに耽るだけの心の働きすらもなく、心の内も眼の前も、すべてが茫つとした闇であつた。祖母は口の中で念佛を唱え、蘆の寢藁の中に、ごそごそと老ひぼれた野鼠のやうに小さくなつてゐた。

母親のお種も眠れなかつた。お種の心は、郷里の思ひ出でいつぱいであつた。虹別のことも、考へぬではないが、昔と今とを比較するとなると、何よりも強く郷里のことが胸に浮ぶのであつた。郷里での刈分小作の暮しは決して樂なものではなかつたが、それ故に郷里を捨てる氣にもなつたのであるが、併し今の我が身のやうに、野たれ死にならうかも知れぬ心配はなかつたばかりか、貧困の中にも、百姓には百姓らしい、いくらかの樂しみもあつた。それが今では、何が我が身に殘つてゐるだらう。虹別では、なるほど廣い土地を貰つた筈だつた。信しそれは、數年たつ

か、たたぬ中に、おらたちのものではなくなつた。みんなは、骨身をけずり荒地を墾したばかりか、夫の勉造は死んでお骨になつてしまつた。おらたちは無い上に一そう無いものになつてしまつた。郷里のものたちは、おらたちの事、みんなで笑つてゐるに違ひない。ああ、耻しいなあ。おら、ひとに顔みられてゐるやうに耻しいなあ、と胸が闇夜の中に、聲もなく叫ぶのであつた。

妻のお捨とても眠れなかつた。左右の腕に小娘のお松とお常を抱き寢しながら、お捨には郷里のことよりも、虹別開墾のことが、何もかにも一かたまりになつて思ひ出された。同じ苦勞が要るなら、虹別で居殘つた人たちの仲間として辛棒する方が、こんな道のない原野へ入つて來るよりも、安全であつたのではないか。こんな廣い原野に入つて、たつた一軒で土地を開墾する心細さに押し包まれるやうな氣がした。明日は向ふの土地へ着いて、それから小屋掛けをし、迫つて來つつある冬に向つて、そこに棲みつく用意をしなければならぬことが、お捨の氣持を重く暗くした。この冬は、これまでの幾度かの冬、殊に凶作に凶作をつづけ重ねて來た去年の冬よりも、もつとひどい、恐しい寒さと飢餓の中へ自ら死に飛び込んで來たのではなかつたか。おらたちは、借金取りを恐れ、また廣い、いい土地を目あてにしては來たのだが、その考へは、みんな恐ろしい化け者にかどわかされて無我夢中で飛びついた考へではなかつたかと、不安な疑ひが頭を擡げて來た。でも、もう、どうにも致し方がない。かうなつたからには、向ふの土地がどんな土地でも、そこに嚙りついて、生きぬかなければ、みんなが野たれ死にするばかりだ。でも夫が一度行つて見て來た土地だから、まさか、何んにも出來ない土地ではないだらうもの。まあ、働けるだ

け働いて、早く樂になるやうにするよりしかたがないと思ふと、冷たい涙がにじみ出るのであつた。

曉が冷たい平野の上に來た。ぐつすり寢足りた子供たちが、どそごそ寢藁の中で身動きし、おちおちとして眠れなかつた老婆や女たちを起こし、野獸のやうに悠々と眠つてゐた大崎の目をさまさした。みんなが目をさまして起きた時、その樣子は曠野に巣喰ふ野鼠の巣のやうであつた。

曠野は一面に眞白な霜に覆はれてゐた。寒氣が骨にまでしみ徹つた。大崎は先づ、火を焚きつけた。焚火の白い煙を圍んで、みんなが身體を暖めた。みんな默りこくつてゐた。身體が少し暖まると、大崎は川水を汲んで來て、湯をわかすやうにお捨に言つた。お捨とお種とが朝食の仕度をしてゐる間に、大崎は木蔭につながれて、背の莚や、鬣(たてがみ)に霜をのせて、しよんぼり、立つてゐる北星を、焚火の近くにつれて來て霜を拂つてやり、秣を與へた。

焚火を圍んで朝食を終りながら、大崎は努めて元氣な聲で言つた。

「さあ、今日一日のふんばりだ。今日はおらたちの土地さ着いて、ゆつくり休めるぞ。」

みんなは默つてゐた。大崎の言ふことは、恐らく間違ひのないことに相違なからう。確かに、「おらたちの土地」へ、着くだらう。併しそれは幸に到着するといふだけのことで、そこには、寢起きする住家といふものはないのである。掘立小屋の出來るまで、やはり野宿しなければならぬのである。さうして掘立小屋が出來たにしても、それは荷馬車の下の野宿よりも、ややましだといふ程度に過ぎないことは、誰れにもわかり切つたことである。でも、殆ど日常のない粗りな

い流浪のやうな逃避が、今日一日で終るだらうといふことは、嘗々しい喜ばしいことであつた。北星を轅につけ、野宿に用ひた荷物を馬車に積み、祖母のお若を荷物の間に乘せて、さあ、出かけようとして、大崎はすぐ目の前の川を渡らねばならぬことに氣がついた。

「さうだ、この川を渡るんであつた。ちよつと待つててけれ。おら、川の樣子見てくるから。」

大崎はさう言ひ捨てて、先づ川岸の蘆を踏みわけて川上の方へ淺瀨を探しに行つた。この川は前日渡つた川よりも小さいが、泥土がやや深そうであつた。併し渇水期に入つてゐて水嵩が少いので、少しの淺瀨が見つかれば渡れないこともないと思つた。彼は暫らく川上の方へ行つてみたが、適當の個所がないので、今度は川下へ下つてみた。みんなの待つてゐる處へ戻つて、更に下流へと川岸をつたつて行つたが、四、五丁も下つた處に渡れそうな淺瀨をやうやく見つけることが出來た。大崎は元氣よく、みんなの待つてゐる處へ戻つて來た。

「下(しも)に渡れるとこがある。四、五町下だけど渡りやすい方がいい。」

彼はさう言つて北星の手綱をとつて先頭に立つた。蘆原や灌木の粗林を通りぬけて、その渡河地點まで來ると、お捨が川を見ながら言つた。

「きのふの川よか、泥が深そうで荷物つけたまま北星は、ひつぱれないでないか。川の中で深はまりしない内に、おらたちで、少しでも荷物運んで、輕くしたらいいと思ふな。」

お捨の言ふのは尤もだと大崎も思つた。川のこちら岸から、斜に下へずつと淺瀨がつづいてゐるが、向ひ岸近くにほんの少しの間であるが、難所らしい水勢の處があつた。

「あそこで北星がへたばつたら、どうにもしかたがなくなる。お捨の言ふやうにするがいい。」と母親のお種も言つた。それで、大崎もその氣になつて、先づ祖母を馬車から下ろし、馬橇だけを殘して、その他の荷物をみんな、蘆原の上へ下ろした。

「手數なこつたなあ。」

「手數のやうだけど、川へはまつてから騷ぐより、この方が得だよ。」

とお種が言つた。

荷物を全部おろすと、大崎はまた言つた。

「いつそ、この馬橇が一番重いんだから、此處さ置いて行くか。雪の積むまで用はないから、」

雪が降つてから北星ひつぱつて來て、引かせて戻ればいいものな。」

「こんなとこへ置いといて、盗まれたら、どうもならんよ。」

とお種が言つた。

「こんなとこさ、誰も來るもんか。來たつて、馬でもつれて來なければ、引いて持つて行かれないもの。」

全くそれに違ひなかつた。大崎はなぜ、この考へを昨日のうちに考へ出さなかつたのかと、殘念に思つた。昨日の川の岸で置いて來てもよかつたのだ。さうすれば、北星はどれほど、楽に歩くことが出來たらう。從つてみんなも、もつと早く、楽にやつて來られたものを。さうだ、いつそのこと、塘路で休んだあの店に、冬まで預つて貰ひばよかつたのだ。いやいや、さうは出來る

ものか、塘路の店屋に預けて置いたら、それから、おらたちの夜逃げのあしがつくかも知れない。危い危い。併しここならもう大丈夫だ。

彼はさう思ひついて、お種とお若の力を借りて、馬橇を馬車から下ろし、灌木の根元に横たへ、縄切れをその灌木の枝先きにしつかと結びつけた。

「かうして置けば大丈夫だ。雪の中を來ても、橇の在り場もわかるし、淺瀬もわかるから。」

大崎はやがて、水馬をやるやうに裸體になり、北星の手綱をとつて川縁から川へと下り、淺瀬をこいで、やがて向ふ岸の深そうな處へ踏み入つた。併し水が涸れてゐるので、案外容易に渡ることが出來た。北星と馬車とを渡した後、その他の人間と荷物とは全部、大崎の背を借りなければならなかつた。祖母を最初に、次々に家族のものを渡してから、荷物を運び渡した。その荷物を、お種とお若とが馬車の上へ積んだ。最後に荷物の搖り落ちぬやうに縄をかけ、祖母を荷物の間に乗せた時には、冷たい霜の朝ながら、身體が火照る位であつた。

「早く着物着んと、風邪ひくよ。」

とお種が言つたが、大崎は平氣であつた。薄ら陽ながら朝日が彼の身體に當つて逞ましい筋肉を輝かした。

「川のお蔭で馬鹿に暇どつたな。」

彼はさう言ひながら、着物を着、目じるしのために縄の切れ端を、川縁の木の枝に結びつけた。

「さあ、出かけるべ。もう二三本位、川があるかも知れんが、今は丁度、水の涸れてゐる時だから、大したことはない。この夏に來た時は、かなり深いところがあつたけど。」

彼等の行手には、蘆原や笹原や灌木の粗林が入り代り、立ち代り連なり續いてゐた。泥炭地でぬかる上に、昨夜の強い霜で路が難儀になつた。馬橇を下ろして、ずつと荷の輕くなつた北星も全身にびつしより汗をかいてふんばつてゐた。それだけに、大崎は馬橇を下ろして來てよかつたと思つた。前方に右方からのびて來てゐる長い岬のやうな山が見えて來たが、併しそこまで辿りつくのは、まだ容易ではなかつた。大崎は時々立ち止る度に、その曠野の上の岬は、彼の本統の目的地ではなくて、その崎から更に、一里ほども向ふにある崎が彼の土地の在る處であることを思つた。この歩度では、途中で女、子供は勿論のこと、北星とても、へたばつて了ふのではないかと案じられた。

「向ふに山の崎が見えてるが、おらたちの土地は、あの邊かなあ。」

とお種が言つた。

「いや、あれから、一里ばかり奥の別の崎だ。あの崎で、おら、一晩野宿して探したんだよ。あそこも悪い土地ではないけど、もう一つ奥の崎の方が、ずつといい土地だよ。路が悪くて難儀だけど、もう大したことはない。」

彼等の歩みは、蘆原の中を歩む蝸牛のやうに、のろかつた。大崎はいつも先頭に立つて、蘆原を分けながら、北星の手綱を牽いた。さうして、暴息あらく、喘ぐ北星の馬車の後に、野豆には

馴れてはゐても、足弱な子供、女たちが續いた。まるで、情れな地鼠の一族が巣を移し歩いてゐるやうであつた。

斯うして晝頃に、曠野に踏み入つてから最初の崎に、やうやく近づくことが出來た。大崎には落葉して、くろずんだ痛々しい冬の間近かな山の樣子ながら、夏來た折の眺めと思ひ合はせて、舊知の感が強かつた。夏の濃い青葉はすつかり枯れ落ちて、まばらに殘つてゐる、えぞ松、とど松の他には、褐色のがさつな大きい枯葉を枝頭にとどめてゐる、柏の木が際立つて見えるのであるが、山の樹木の一本一本が、彼に見覺えのあるやうな心地がした。ああ、あの崎へ來たのだ。

「あの崎で晝休みだ。それから、おらたちの土地はすぐだ。」

大崎は夏の土地探しにやつて來た折に、二晩目の野宿をした崎の樣子を思ひ出して、元氣よくさう言つた。併し思ひがけなくかなり廣い地域にわたつて濕地が彼等の歩み阻げた。夏にやつて來た折には、大崎は、もつと北の方から、この山並に沿うて崎へ出たので、その濕地に出逢はなかつたらしい。じくじくした濕地で、北星の脚や車輛がぬかるばかりでなく、みんなの足も濕地水を吸ひ、泥にまみれて重く冷めたかつた。大崎はあせつて北星をどなり立てたが、激しい息を吐いて止まり勝ちであつた。この濕地を越すのに、思ひがけぬ時間がかかり、みんなは疲れ、身體が冷え上るのを感じた。やうやく濕地をぬけると、蘆原から笹藪になり、灌木林が廣がつて居り、その向ふが崎であつた。野宿をするには灌木林の中がいいが、それからまだ先へ進んで行く爲めには、林へ入つては難儀なので、濕地を越えて蘆原のそれほど濕つてゐない處で休むことに

した。

大崎は蘆や小枝を刈りあつめて、焚火をした。さうして、みんな冷めたい握飯を嚙りながら、濕つて冷えた足を焚火へさし出して少しでも干かすやうにした。汗でべつとりとぬれた北星の體軀から立つ湯氣が白く見えた。北星も秣をがむしやらに喰つた。濕地の逃げ水を湯沸しにくみとつて、焚火にかけてゐる間に大崎は枯れきつた蘆を束ねて北星の汗を拭ひとり、焚火の近くにつれて來た。

「北星も、よくがんばつてくれるなあ。おら、有難いぞ。」

と大崎は獨り言つた。

みんなは焚火にあたりながら、ぼろぼろに冷えた握り飯を嚙つた。すつかり食べあげてしまつた。晝飯が濟んだ時は、正午をずつと過ぎた頃で、日脚の短い北國では黄昏まで、餘り遠い頃ではなかつた。大崎の胸中では、この分では、もう一夜、野宿しなければならぬだらうと考へてゐたが、わざとそのことは默つてゐた。

北星を轅につけ、祖母を荷物の間へ乘せてみんなは又、荒野を歩み出した。深く厚く廣い蘆原が南方一面に擴がつてゐた。

「まるで、海みたいだのう。」

と喪心したやうな嘆息の聲が馬車の上の祖母の唇から洩れた。併しみんなは、馬車の後についてて、見通しのつかない蘆原の中をかきわけて、足もとだけに氣をとられて歩いてゐたので、祖母

の聲は先頭の大崎だけにしか聞えなかつた。

「廣いもんだべさ。こんな土地がまだまだいくらでも、ほつたらかしになつてゐるんだよ。おらたちの土地は、これから南の方で、この崎をかわすと、その向ふにあるんだよ。」

と大崎は、大きな聲で言つた。

「まるで海みたいだ。廣いもんだのう。」

と祖母はくりかへして嘆息するばかりであつた。

暫らく默りこくつて歩いてゐたが、大崎は右手に出てゐる山の崎の位置に絶えず注意してゐた。のろい歩みではあるが、次第に、やうやく崎の形が近く、大きくなつて來て、やがて、その崎を西南へかわすことが出來た。その時、曠野の眺めは更に、ぐつと西南へと涯なく廣がつて行つた。さうして夏以來、彼の眼底にはつきりと映し留められてゐた彼の土地が、蘆原の上に廣がつてゐた。さうだ。蘆原の末に低く、ゆるやかに伸びてゐるもう一つ向ふの崎！あそこに、彼の土地が彼を待つてゐるのであつた。

「お祖母、向ふに低い崎が見えるべえ。あそこが、おらたちの土地だぞ、見えるべえ。」

と大崎は北星が息を吐いて停まつた時、背後をふり向いて、西南の方を指しながら祖母に言つた。

「見える、見える。」

と祖母は荷物の間から頭をもたげて言つた。

「おらたちの土地が見えるぞ、みんな見せてやるか。」
大崎は蘆を踏み分けて、馬車の後方へ廻り、母親のお種を背後から抱え、車輪に足をかけさせて立たせた。
「向ふの低い崎のところだよ。」
大崎は母親の腰を支えながら言つた。それからまた妻のお捨も、同じやうに他方の車輪の上に立たせた。子供たちは、「おらにも見せてけれ」とせがむので、大崎は彼等を代る代る抱いて、高くしてやつた。お松とお常とは、抱きあげられて默つて見てゐたが、最後に秀造を抱き上げてやると、彼は、
「お父、なんが見えるのけえ。」
と言つた。
「馬鹿、何んがつて、おらたちの土地が見えるのだ。おらたちで耘して、作る土地ば見せてやつとるのだ。わからんのか、馬鹿。」
大崎はいまいましげに、且つ總身の力が、がくんと抜け落ちたやうに子供を下ろした。母親と妻とは、左右の車輪の上におそるおそる立つて、しげしげと向ふの崎を眺めてゐた。
「日常りはよささうだが、肥えてゐるだかしら。」
と母親は車輪の上から危なげに下りながら言つた。お捨も下りた。
「新地だから大丈夫作れるやうになる。」

「新地つて言へば、虹別も新地だつたけが。」
「新地と言つても、虹別とは違ふさ。」
「冷たい土でないべか。」
「この原野は、とてもよく日がさすんだ。」
「そんなら、いいけど。」
「さあ、出かけるぞ。」
いつまでも女たちの不安と疑問を相手にしてはゐられないと思つた。大崎は元氣をつけて、北星を索き出した。やがてまた曠野から湧き出てゐる川にさえぎられた。大崎はこの川を覺えてゐたので、驚ろかなかつたばかりか、舊知の所へ來た親しみを感じた。水が涸れてゐたので、北星は馬車を牽いたまま渡つた。家族の者たちは、足をぬらさぬやうにと、大崎に負はれた。それからまた、蘆原と灌木の粗林があり泥炭質の草地があり、濕地があつたりして、難儀さは減じなかつた。ただ粗林や蘆原の向ふに見える低い崎が、徐々に、少しづつ近づいて來るやうに思はれるのが、心と脚との賴りどころであつた。心の喜びと共に、氣はあせつて來たが、北星の脚は停り勝になり、大崎はじめ、女子供たちの歩みは、目に見えて弱り、のろくなつて來た。やがてまた、小さな流れにさえぎられた。大崎はこの小さい流れにも見覺えがあつた。殆ど水の涸れた流れで、難儀せずに渡つた。併しこの流れを渡ると、大崎はもう、日沒の迫つてゐるのに氣がついた。彼は無理をして、路のない荒野を夜路するのは難儀だし、向ふについたとて、どうせ野宿し

なければならぬので、ここで野宿して疲れを休めて明日の晝、明るい時に目的地について、小屋がけする方がいいと考へた。

「夜路は危いから今夜もう一晩、ここさ野宿するべえ。今日は難儀だつたから、身體休めて、あす早くおらたちの土地さ入いることにする方がいい。ここまで來いば、もう着いたも同じだから、安心して休むべえよ。」

と大崎は言つた。さうして川緣の灌木の粗林に野宿の用意をした。お捨が川水を掬んで來て湯を沸した。お種と子供たちは、蘆や小枝を集めた。大崎は祖母を焚火の近くに連れて來、北星を轅から放して、蘆の束で汗を拭ひてやり、流れで水を飲ませ秣をやつた。大崎は又、斧を取り出して川緣に生えてゐる白樺の稚木を伐り倒し、薪木を作つた。白樺の薪木のはじけ燃える音が氣持ちよく聞えた。馬車の下には寢藁のための蘆が刈り積まれた他に、焚火のぐるりにも、蘆が敷かれた。お捨は川水を鍋にくんで、飯をたき、それに干した菜つ葉と味噌を入れて雜炊にした。味噌の煮える匂が、香ばしく、みんなの空腹に刺すやうに、こたへた。

熱い雜炊を啜る頃には、曠野の上に夜が降りてゐた。急に冷えがはびこり迫つて來た。女子供たちを、焚火近くの馬車の下の、昨日と同じやうな蘆の寢藁の中にもぐらせてしまふと、大崎は焚火に近い木の下に北星を繫いだ。さうして彼は、白樺の薪木を次から次へと火にくべながら身體を焚火にあててゐた。背からしみ込んでくる痛い寒さが胸にまで、しみ徹つて來るやうで、時時彼は背を焚火にあてた。すると、忽ちのうちに、胸が寒さで疼むやうに覺えた。併し疲れと眠

氣は、もつと強く彼を襲うて來た。自分の膝頭を抱えて、丸くちぢまりながら、顏を焚火に照らされながら居眠りをした。さうして時々、焚火が消えかかると、疼む寒さの爲めに目が覺めた。馬車の下から時々、かすれたくしやみが聞えて來た。それは祖母のくしやみであつた。大崎は夜通し焚火をして、少しでも、女子供たちを暖めてやらうと思つたが、とうとう自分もたまらなくなつて、居眠りこけながら明方までどうやら過すことが出來た。曠野の空を飛んでゆく、おびただしい鳥の群れの、喧しい鳴聲に目をさました時、乳白色の朝が、しらみかかつてゐた。

彼は何も考へてゐなかつた。夢一つ見なかつた。ただ抑へつけることの出來ない嬉しさと滿足と安心とが一つの團子のやうに、彼の胸の鳩尾の處にあるやうに感じた。もはや、あせることも恐れることも、くよくよすることもいらぬ氣持ちであつた。長い年月の、生れて以來のやうに思はれる當日頃の心のしこりが一夜あけると、けろりと落ちてしまつたやうに感じた。彼の鄕里であつたこと、虹別の移住開墾地であつたこと、それらのすべてのことは彼の背後から消え去つてしまつたとしか思はれない位、彼の心は氣負うてゐた。强い霜も、彼の氣持ちを緊張させた。

大崎は焚火を盛んにした。川水を掬んで湯をわかし、前夜の殘りの雜炊の鍋を焚火にかけた。彼は北星の背の上の、莚の霜を落してやり、秣をやつた。

「北星、がんばつてけれ。苦勞かけるのも今日一日だけだからな。」

彼は心の中でさう言つた。

お捨と子供たちが、蘆藁の屑を髪や着物につけて起きて來た。やがて母親のお種も馬車の下か

ら逼ひ出して來た。祖母のお若のお念佛の聲が、車の下の蘆藁の中から、かぼそく聞えて來た。

「お祖母、ゆふべくしやみしてゐたが、風邪ひいたでないかなあ。」

と大崎は言つた。

「二た晩も野宿で冷えたから、さうかも知れんなあ。ゆふべは、いつまでもお念佛唱へてゐたつけ。」

とお種が言つた。

「早く焚火さあたらせてやればいい。」

と大崎は言つた。お捨は馬車の下へ行つて、祖母を起し、焚火に近くつれて來て坐らせた。

「お祖母、ゆふべはよく眠れたかね。」

「眠つたんだか、眠らなんだのか、なんかしらちつとも、わからなかつた。夢ばつかしみてゐたから、まるで起きてゐたと同じだつたさ。夢で、いろいろなことに出あつたぞなあ。」

「さうかえ。ゆふべはお祖母くしやみ、うんとしてゐたかで、風邪ひかせたかと心配してゐたぞ。」

「風邪なら、すこしひいたやうだが、何んでもないさ。」

「今日こそは、お祖母、おらたちの土地さ入いるんだぞ。とうとう來たんだよ。喜んでけれよ。」

「よろこぶとも。おらたちの土地がさづかつたんだもの。こんどの土地は、大切にしなければならんのう。おら、早くおらたちの土地さ鶴のとぶのを見たいもんだのう。」

「ああいいとも。今に見られるから、楽しみにしてゐなさい。」

大崎は祖母に鶴のことを言はれると、よくいつまでも覺えてゐるものだと、少し薬がきき過ぎたやうな感じがして苦笑した。大崎にしてみれば、一番氣のすすまない祖母を説き伏せる爲めに、その土地に鶴の棲んでゐることを話したのであるが、それが祖母の氣持を一轉させて虹別原野を逃げ出ることに賛成させ、路のない荒野の上を、見ず知らずの土地を目ざしてここまで來させることになつたのであつた。さうして今では「おらたちの土地へ」引きつけられる氣持のほかに、「鶴の棲んでゐる土地」へ引きつけられる氣持が強い樣子であつた。

朝の雜炊を吸り終る頃には、曠野の東をくぎる遠い山脈の上に重なり連つてゐる朝雲の蔭から、朝日が曠野の上にさつと射し始め、曠野を覆ふ霜が、きらきらと輝きわたつた。彼等の土地が朝日をまともにうけて輝いてゐた。

「霜がとけると、ひどくぬれるから、少しでも、早く立つことにするべえ。さうせば、少しも早く、おらたちの土地さ着かれるからなあ。」

北星が轅につけられ、出立の仕度は忽ち出來た。今日こそは行く處へ行けるといふ氣持が、みんなの顏に明らかに現はれ、元氣づいて見えた。彼等は出立した。霜にぬれた蘆原や濕地が冷めたく、且つ歩むのに難儀なのは、前日と變りはなかつた。朝日を受けた低い崎が目の前に見えてゐながら、路がはかどらなかつた。大崎は北星の手綱を牽きながら、先頭に立つてしぶとい歩みをつづけた。幾度となく、北星は停つて動かうとしなかつた。鼻孔を開き、激しい呼吸を喘ぎつ

づけて土にぬかる脚も折れそうにふんばつた。車輪は泥炭地にぬめり込み、その度に大崎は、車の後や車輪を押し上げてやらねばならなかつた。彼は幾度となく、荷物の一部を、そこここに、下ろして行かうかと思つた。遂にお種が北星の手綱を引き、大崎と妻のお捨とが車の後押しをした。馬車の進みなやむのを見て、車上に揺られてゐる祖母が、とうとう言つた。

「ひどい濕地でばないか。おらたちの土地もこんなだべか。氣をつけないば駄目だよ。濕地の目さ落ち込まないやうにのう。濕地の目さ陥ちたら、上がられなくなるから。」

併し祖母の聲は懸命に、がんばりふんばつてゐるみんなの耳には入らなかつた。祖母は不安氣な顏に目をしよぼつかせて、揺れる車上の荷物に、しつかとしがみついてゐた。祖母の目には、揺れる曠野が、地獄の魔の海のやうに思はれた。祖母は荷物の間にちぢくまつて、目を閉じ、お念佛を口の中で唱へた。

やうやくの思ひで濕地の深い蘆原を通りぬけて、やはり雜草は深くはあるが、濕地からぬけて土地のやや固い草地に來た。大崎たちみんなも北星も、ほつと息をついた。そこから暫く深い草地や、雜木の粗林をかきわけて行つた。崎はずつと近くなつて來た。落葉し盡して黑ずんだ立木に覆はれ、處〻に地肌の露はれた崎が彼等の前に腕をひろげてゐた。

「もう來たぞ、もう來たぞ」と大崎はどなりつづけながら、その黑〻とした崎に向つてつき進んだ。さうしてその蔦の粗林につき當つた時に、大崎たちみんな北星も共〻、彼等の目的地に辿り着いたのであつた。

かうして大崎一家は、既にお骨となつた父親勉造の生命を除いては、無事に「死の原野」と呼ばれるに至つた不毛の虹別原野から丹頂鶴の棲んでゐるといふ未だ鍬の入れられてゐない處女地に到着した。虹別原野への許可移民としての入地の折とは全く異つて、そこには、殖民軌道もなく、移民世話所もなく、移民小屋もなく、互に助け合ふ移住仲間もなく、ただ見る限り開けつ放しな、やたらに廣く平らな土地が、惜しげもなく懷をひろげて一家七人のものを受け容れたに過ぎなかつた。それは大きな荒莚の上に、けしつぶが落ちこぼれたほどの有樣で、彼等よりは寧ろ、荷馬車を牽いて此處までやつて來た北星の姿の方が、ずつと逞しく見えた。

大崎が「着いた、着いた」といつて、あだかも呆けたやうに暫く茫然と佇んだ時、みんなも、きよとんとした顏で、そこに棒立ちになつた。一人だけ馬車の荷物の間にちぢこまつてゐた祖母のお若には、まだ大崎の言葉の意味がのみ込めなかつた。

「お祖母ついたよう。とうとうおらたちの土地さ着いたんだよう。」

と大崎は大きな聲で祖母に言ひながら、彼女の方へ近よつた。

「さあ、降りて、おらたちの新しい土地ば、踏んでみなさい。こんなに廣いんだよ。さあだいて降ろしてやるよ。」

大崎は太い兩腕をひろげて祖母を抱き降ろそうとした。併し祖母は長い道中を馬車に揺られて

來たので、老體の脚腰がしびれて急には立ち上れなかつた。祖母は荷物にすがりついて、ふらつく膝頭に力を入れ、やうやくかがんだ程度に立ち上つた。彼女は震える兩手で荷物につかまつて、辛うじて目の前を見た。

「ほう、まるで海みたいに廣いだのう。」

祖母はさう言ひながら、しよぼしよぼした目で大空の方を仰いで見まわした。

「おらたちはこの廣い土地で作るんだよう。うれしいべよう、なあ。」

と大崎も上の方を向いて言つた。

「鶴は飛んでゐるかのう。」

「今はまだ飛んで來てゐないけど、ここらには澤山、棲んでゐるつてから、そのうちにいくらでも見えるよう。」

「さうけえ、早く見たいもんだのう。おら、それ樂しみに來たんだからのう。」

老婆は猶も廣い原野をぢつと眺めて、感に耐えぬ口調でくりかへし言つた。

「おそろしく廣いんだのう、おそろしく廣い土地だのう。」

「ほんとだつたべさ。おら、嘘は言はないべえ。ここなら、いくらでも土地があるから思ふだけ作れるさ。」

「ほんとに廣いもんだ。こんな廣い土地ば作れるなんて、まるで夢みたいなもんだなあ。こんな土地ば、ひと目でも死んだ爺さんに見せてやりたかつたのう。」

「爺さんだつて、この土地ば見たら腦つ玉つぶしたべさ。それに爺さんが生きてゐてけれたら、開墾にも助かるだつたになあ。」

「それは、爺さんの不運つことだべもの。」

「さあ、早く下りなさえ。これから荷物おろして、小屋がけの仕度せんならんから。日が短いから、ぐずぐずしてゐられんぞ、もう、やがてお晝だから。」

大崎は輕る輕ると祖母を抱いて土の上へおろした。みんなは、べたべたと枯れた草原の上へ腰を下ろし、勞れた脚をなげ出した。みんなは嬉しさの餘り默りこくつてしまつた。大崎は深く煙草をすうた。彼は心地よく醉うた氣持がした。彼等はかうして彼等の土地に辿り着いたのであつた。併し身體を休ませる暇もなく、何よりも先づ小屋掛けをしなければならなかつた。その場所は夏に土地を探しに來た折、大體の見當をつけて置いたので、大崎は焚火にあたつて一休みすると、粗林をぬけ、枯れた雜草をわけ崎の方へと登つて行つた。さし迫つてゐる冬を越す爲めには、なるべく北風と吹雪を避けられ、さうして水の便利の處がほしかつた。彼は淺い澤にはいつて行つてみた。その澤に水のあることは夏に來た時に知つてゐた。さうしてその澤を上つた處の小高い丘から、沼を眺めたことや、笹を分けて登ると、なだらかな斜面が東南に向つてゐて、白樺の林が生えてゐる處のあつたことを思ひ出した。この丘の低い斜面と山腹との境ひ目あたりが、小屋掛けによい場所だと見て置いたことを思ひ出した。彼は白樺の林を目あてに容易しく、再びその場所を見出すことが出來た。そこは澤の中にあるのだが、澤が淺く、丘はその澤のふところに

洪積層のやうに廣くやや小高くなつてゐるので、日當りがよいばかりか、崎のふところの中に抱かれて居て、曠野からむき出しに見られる心配がなかつた。大崎には、まだ心の奥底のどこかに、人目をさける氣持がかくれひそんでゐて、彼の思案や行爲の一つ一つが、無意識のうちに、そこに關係を持ち、それに制肘されてゐた。

大崎はそこに小屋掛けの地點を定めた。併し荷馬車を停めた場所からそこまでは二丁ほどもある上に、荷馬車を牽いて通りぬけることは困難な粗林と、叢の澤が横たはつてゐるので、車體はそこに置いて、荷物は北星の背や自分たちで運ぶことにした。さうしてやがて、馬車の通れる路を拓いてから車體を取りに來ればよいし、また事實、ここまで來てしまへば、當分はもう馬車の用もありそうはなかつた。

彼は祖母を背負ひ、みんなを連れて粗林を通りぬけ、澤を上つて、小屋掛けの地點に家族のものを移した。それから妻のお捨と二人で戻つて、北星の背に荷物をつけ、自分たちも出來るだけ背負つて幾度にも、運んで來た。さうしてゐる間に、大崎は母親のお種と子供の秀造に草や笹を刈りとらせたり、場所を敎へて、穴を掘らせたりした。荷物を全部運んでしまふと、蘆を刈り集めて來た。子供たちには、近くに生えてゐる枯れたいたどりを根元から刈り集めさせた。

大崎は母親と子供の掘つた穴を更に掘り下げた。立木のままの白樺の太そうなのを三本、一列に選んで、同じ高さの枝股をのこして、他の枝を拂ひ、別に手頃な白樺の木を伐り倒し、枝を拂つて作つた丸太を、その又へ渡した。地面の上で丸太を二本づつ先端を組合せ、林の中から刈り

とつて來た蔀荷づるで、がつちりと結びつけ、さういふのを四組拵へ、それを桑木の上へまたがせ、適當な間隔に二列に並べて掘つた穴へ、向ひ合せに一組づつ丸太の根本を差しこんだ。それで、ぐらぐらするが倒れる心配のないおがみ小屋の骨組みが出來た。彼はこの造り方を、夜逃げの決心がついて以來、どんなにか屢々、深く祕かに心の中で考へて來たことであつたらう。寒さを防ぐことも勿論大事だが、彼の案じたのは、何よりも積雪に耐えることであつた。一夜の積雪の爲めに屋根が落ちて一家が寢ながら、その下に壓死してしまつたといふ開墾地小屋の話を屢々聞いてゐたので、彼は人知れず苦心し、小屋の骨組みの方法を獨りで考へてゐたのであつた。今やその仕方で、骨組みは出來たのであつた。

「棟上げが出來たぞ。お神酒上げたいけどなあ。」

と大崎は元氣な聲で言つた。

「醬油なら持つて來たけど、酒はないものなあ。」

とお捨が言つた。

「水と鹽とで勘辨して貰ふべさ。うんと金持ちになつて、いい家建てるやうになるまでな。」

と母親のお種が言つた。やつぱり年の效だけあると大崎は感心した。

「秀、澤さ行つて、水汲んで來いよ。」

と大崎は秀造へ言ひつけた。秀造は湯沸しに水を一つぱい汲んで、息せきながら戻つて來た。

「澤にさるがにがゐるぞ。」

と秀造は左手に湯沸しをぶら下げたまま右指に、はさんだ小さいさるがにを妹たちに見せびらかした。

大崎はお捨から小皿に入れた粗鹽を受けとり澤の水を茶碗に入れたのと一緒に、おがみ小屋の正面に、地面の上に置いた。彼はそれから「さあ、みんな、おがむんだぞ」と言つてばん、ばん、ばんと三つ手を拍つて頭を下げた。みんなも、大崎の背後からおがんだ。併し祖母と母親とは、手を拍たずにやたらに、荒れた掌を、がさがさとすり合はせて頭を下げた。そればかりか、祖母はお念佛を唱へた。子供たちはぽかんとして立つてゐた。

「痛い、痛い。」

と秀造が突然叫び出して、右手をやたらにふつてわめいた。彼はさるがにに指をはさまれたのであつた。さるがにには、やたらに振りまわされても、なかなか秀造の指に喰ひついて放れなかつた。

「馬鹿」

大崎はさう言ひながら、泣きそうになつた秀造の右手の親指から、さるがにをもぎとつたが、さるがにの太い指が一本、秀造の指に喰ひついたまま殘つた。大崎は太い強い指でそれをむしつて取つてやつた。

棟上げが濟むと、屋根に細目の丸太を幾本も横に結びつけ、要(かなめ)に古釘を打ちつけた。それから、それらの横木と横木との間に、蘆を束ねたのを挿し込み、更にそれらの束の間へ、隙間のない

やうになるべく厚く蘆を挿し込んだ。母親は暗い小屋の内に立つて、蘆の屋根の薄くて光線のもれる隙間を棒で突つさして、その個所を屋根の上の大崎に知らせた。一番急ぐ屋根と、長い方の兩側面が出來上ると、小屋の内は燈のほしい位暗くなつた。大崎はそれから、小屋の一方に北星を入れるだけの區切りの爲めに埒のやうに、一本の丸太を渡した。反對の側には、みんなの出入口がつけられ、ほんの少しの土間を殘して、幾本もの土臺杭を打ち、その上に丸太を出來るだけ密に並べてうちつけ、その上に蘆を厚く敷き並べ、更にその上に荒莚や數枚の胡座(ござ)を敷いた。大崎は虹別の小屋に殘して來た古疊が惜しくてたまらなかつたが、口には出さなかつた。その上を歩くと、足の踏みぬけそうな處があり、でこぼこしてはゐるが、兎に角も地面の上に床が出來たばかりでなく、座敷が出來たのであつた。彼は其處と厩の埒との間に、土を深く掘つて爐を作り、屋外の焚火の灰を掻きあつめてその中へ入れた。爐に焚火がはいると、急に住居(すまひ)の感じが出て來て、何かしら心の中が暖まるやうであつた。併し煙がこもるので、煙出しと明り取りの爲めに、蘆の壁を少し切り取つて、小さい窓を開けた。臺所は入口の土間の傍にきめ、入口には莚をさげた。

これで、掘立のおがみ小屋が出來上つたわけである。慾を言へば、きりがないが、雪の降り積むまでに小屋の周圍に風や雪を防ぐ雪圍ひを拵へれば、この冬を過ごすには大丈夫だといふ見當がついた。彼は全く安堵した。虹別原野へ入地した時には、節穴だらけの薄い板で叩き上げられた安小屋ではあるが屋根を柾で葺き、小さい硝子窓のついたこれよりもずつと上等な開墾移民小

屋が建てられてゐたが、それが自分らの住居だと氣持ちの落ちつくまでには容易でなかつた。併し今は何といふ相違であらう。それは、上龍や野鼠の巣と、どれだけの違ひがあるものでないに拘らず、大崎やその家族のみんなにとつて、これこそ、自分たちの本當の住居だといふ親しみなつかしみが忽ちに、油然と湧き上つてくるのであつた。

「さあ、おらたちの家が出來たぞ。みんなはいつていいぞ。」

と大崎が大聲で叫んだ。

「さあ、お祖母、家が出來たよ。家さはいつて休むべよ。」

と言つてお種が祖母を焚火の傍から扶け立たせようとすると、

「有難いのう。お佛壇とお骨ば、先きに入れて上げてけれ。お爺もこの家さ入れてやりたかつたのう」

と言つて、後はお念佛を繰返しながら、大崎の抱えた蜜柑箱ほどのお佛壇とお骨函の後から、小屋へ入つた。

祖母と子供たちが物珍らしそうに、小屋から出たり、入つたり周圍の山や林を眺めたりしてゐる間に、大崎、母親、妻の三人は荷物を小屋の内へ運び込んだ。

「種子薯、凍みさせんように、穴掘つておいてけれなう。」

と馬鈴薯の入いつてゐる俵を運びながら、お捨が言つた。

「そんだとも。それにやつぱし、馬小屋の脇さ納屋造つた方がいいな。そのうちに造つてやるぞ。」

「うつかりしてゐたけど、ランプつるすとこ拵へてけれな。」

「ようし、造つてやる。でも、こんどは石油、氣をつけて使はないば駄目だぞ。買ひに行くに遠いからな。日が暮れたら寢てしまふことにするんだなあ。まだほしいもの澤山あるべえけど、なるだけ辛棒してけれよ。冬の間に、どうしても要るものは、原野が凍れてから北星つれて行つて買つて來るから、よく考へて置いてけれさ。おらの考へだば、湯たんぽをお祖母とお母に買つてやりたいけどなあ。」

「買つて上げればいいさ。年寄り喜ぶべもの。」

大崎と妻との、立ち働きながら交す言葉は溫く、生き生きとしてゐた。

貧しい僅かばかりの荷物の中で、大崎が秘かに造つて置いた所有地標の角棒杙が荒莚に包まれて、業々しく大きく女たちの目についた。お捨がそれを持ち上げようとして、重いので又、下へ降ろした。

「重いもんだが、何の荷だべか。」

「それか、それはおらたちの土地の境界さ立てる棒杙よ。生方牧場の赤井さんに書いて貰つたんだ。大崎常造所有地つて書いてあるんだ。」

「その棒杙、どこさ立てるの。」

「どこつて、ここのおらたちの土地の境界さ立てるのよ。」

お捨は、怪訝な顏をして、腑に落ちぬ樣子であつた。

「今年はもう冬だから、來春になつて土地ば開墾して、そこさ立てるんだ。これを立てた處が、すつかりおらたちの土地になるんだ。」

さう言ひながら、大崎はその荷物を勞よく肩にしよい上げて、小屋へ運んだ。

荷物を全部運び終るまで時間の過ぎるのも、空腹も忘れてゐた。あたりが薄暗くなつて來て始めて、氣がついた。大崎は後に、北星を澤に引いて行つて水を飲ませ、馬小屋へ入れてやり、蘆の寢藁を敷いてやつた。

「北星、お前も來たかや。ご苦勞だつたのう。」

と爐の焚火の脇から祖母が言つた。

お捨は、荷物をごそごそ選り分けながら、夕餉の仕度にとりかかつた。その間に大崎は「裏で薪木を少し拵へて來るから、出來たらおしへてけれ。蘆で燃えつき易いから火に氣をつけれよ。小屋燒かんようにな」と言つて外へ出た。やがて小屋の背後の林の中から木を伐り倒す音が、丁丁と響いて來た。

小屋の內は焚火の照りかへしがあつたが、もう暗くなつた。棚木から吊した煤けた目在鉤にかけられた鍋の飯が炊け、味噌汁と葱がかうばしく匂うた。

「秀、裏さ行つてお父呼んで來い。飯出來たつて。」

お捨に言ひつけられて、秀造は裏へ飛んで行つた。さうしてやがて、大崎は背にひとしよひ、

手頃の薪を運んで戻つて來た。小屋の內の暗いので氣がついて言つた。

「ああ、ランプの釣金つけるのを忘れてゐた。あの鉤は何處さ仕納つたかなあ。」

「ここさ出してあるから、濟まんがちよつと取りつけてけれさ。始めての晩だもの、明るくして、あずましく食べたいから。」

と母親のお種が言つた。大崎はランプの釣金を手に取り上げたが、それを吊り下げるには棟木に一本、釘を打ち込まねばならなかつた。それに低いおがみ小屋でも、彼が立つたままでは棟木に手は屆かなかつた。彼は布團を積みかさねて踏み臺代りにしたが、脚下がゆらゆらして賴りなかつた。お捨と子供たちが布團の崩れないやうに押へた。大崎は部屋の眞中ほどで、白樺の親柱よりも爐邊寄りに、古釘を一本、深くうち込んだ。さうして、釣金を吊し、古ぼけたランプを掛けた。燈が灯された。ああ、その明るさ暖かさと言つたら！　子供たちは、手を拍ち躍り上つて喜んだ。白樺の榾火ははじけ、二つの鍋からは白い湯氣が立ち昇つてゐる。榾火の明りとランプの光とは、目もくらめくやうな思ひであつた。暗い厩からこちらの方へ向いてゐる北星の顏にも、その反映が明るく見えた。

榾火の下から一つまま燒いた馬鈴薯が掘り出された。身欠鰊が脂の青い火をあげながら榾火の上で燒かれた。それをお捨は指で裂きちぎつて、大きい皿に馬鈴薯と一緒に入れ、醬油を少しかけた。それから母親のお種は、小さい銚子を一本、大崎の前へつけた。

「酒があつたのけ。」

と大崎は驚いて目を見はつた。

「澤山はないけど、お爺の騒ぎのときにとつて置いたのだよ。今日のやうなことがあるかと思つて。何せ、お目出度い晩だから。」

と、晴々とお種が言つた。

「そんなら、さつき棟上げのお神酒に使ひばよかつたに。」

「ほんに、さうだつたけ。でも、おらさつきまでは氣がこんがらがつてゐたで、すつかり忘れてしまつてゐただよ。家が出來て荷物をかたづけて落ちついたら、やうやつと氣がついたんだもの。ゆるしてけれさ。」

「いいよ、いいよ。それでは一杯目を、神様と佛様に上げるか。」

大崎はさう言つて、盃代りの茶飲み茶碗に酒を少し入れて、お佛壇の前へ供へた。神様も佛様も、その函の中に同居させられてゐるのであつた。

それから、有頂天に嬉しい夕餉が始まつた。

「おらだけ、こんなうまいご飯頂いていいのかのう。死んだお爺にも食べさせたかつたのう。」

と祖母は虹別原野で死んだ勉造が一緒にゐないことを、淋しく心殘りに思ひ出すのであつた。子供たちは腹がさけはしまいかと思はれるほど貪り食べた。母親お種とても、妻のお捨とても、また大崎自身とても、誰に氣がねなく、これほど食べ足りたことは一度もないと思ふほど食べた。全く、苦勞も心配も一度に忘れ果てた氣持ちであつた。肩の凝り、胸のつかえ、腹のひだるさが一時に消し飛んでしまつた心地であつた。

晩飯が終ると、お捨はつと立つて、ランプの芯を細くした。長い冬の間の事を思へば、石油を大切にしなければならぬのは、みんな同じ思ひであつた。それに心配なく薪木を燃されるので、その明りで爐端のつどゐには充分であつた。腹が充ち、身體が温まり、氣持が落ちついたので、急にみんなが眠くなつた。祖母は居眠りし、子供たちもごろ寝をした。

「さあ、つかれたから寝るべ。これで落ちついたのだ。これから何もかもよくなる。これからいいことが始まつて來るんだ。こんなことなら、もつと早くこの考ば起して、やつて來いばよかつたなあ。」

と大崎は榾火で暖まつた上に醉ひのまわつた赤い顏をして言つた。

歩くたびに、床がもくもくし、また蘆の敷藁が、がさがさ鳴る部屋に、薄い布團を敷き並べて寝た。大崎は最後にランプを消し、榾火を掻き集め、火種を保ち、且つ飛火のしないやうに埋めて寝た。火照つた頰にひやりと、冷い布團のさわるのも心地よかつた。暗い中で、數分の間、實に種々様々な事が頭の中にごつた返しに現はれ出るのを覺えた。三日二晩にわたつて、ひたむきに歩きつめたこの曠野が、ただ一片の紙切れのやうに縮少されて映じた。それから虹別の原野が、そこに住みついてゐれば間もなく、原野のために喰ひ殺されてしまひそうな原野が小さい一枚の荒莚のやうに、瞳裡に映つた。それから虹別原野の中の、捨てて來た自分の開墾小屋が映つた。然も住む者のない荒れ果てたがらんとした空屋の姿が映じた。野鼠に棲み荒されてゐるだら

うと思つた。いや、食べもののなくなつたあの小屋から、野鼠共も何處かへ移り行つてしまうだらうと思つた。隣家の津田爺さんの驚いた顏が思ひ合はされた。移民世話所の秋田さんの困つた顏が浮び出て來た。高利貸の宮内や小坂商店主の怒り罵る顏が飛び出して來た。併しそれとても、もう自分を苦しめ、惱ましし痛めつける力のない存在であるばかりか、そんなものは、もう消えて無くなつた影のやうなもので、今では頭に浮んでも何かしら滑稽で樂しいもののやうに思はれるのであつた。そんな數分間の聯想のうちに、大崎は心地よく眠りに陷ちて行つた。

大崎の新しい土地の最初の曉が、おがみ小屋の暗い中にも訪れて來た。先づ北星が蹄でごとごとと厩の土を蹴り、眠るだけ眠足りた末娘のお常が母のお捨の懐で、もぐもぐと動き出し、それから年上のお松、秀造が目をさまして不思議そうに、あたりを見まわしてゐた。お捨は曉のほの明りの中で、起き出て爐に焚火をつけた。白い煙が先づ小屋の内を心もち明るくし、やがて燃えついた榾火にぼうつと暖かい明るさが漂うた。祖母も母親も大崎も、もぐもぐと身體を動かした。みんな、もう目をさましてゐたのであつた。

「まだ暗いでないか。」

と大崎は床の中からお捨に言つた。

「でも、もう夜が明けるよう。」

とお捨は薪木をくべながら言つた。

大崎はまだ床の中であたりを見まわした。蘆束で固つた壁を少し切りぬいて作つた窓代りの穴

に、夜氣を防ぐために、小豆色の風呂敷を張り當てて置いたのであるが、それをすかして屋外の白い曉の色が薄々と感じられると同時に、その穴から冬の曉の冷氣が刺すやうに流れ込んで來るのがわかつた。蘆で葺いた小屋の天井と壁とはまだ方々に、白く見える隙間が澤山あつて、そこから漏れてくる點々とした白い明りは星空を仰いでゐるやうであり、焚火の白い煙は星空を流れ漂ふうすい白雲のやうに見えた。

「まだ隨分、隙間があるなあ。今日はあれをふさいで置かないば駄目だなあ。」

と大崎は寢床の中で仰向けに寢たまま言つた。お捨は天井を仰いだ。

「でも、早く小屋が出來ていかつたねえ。それに思つたよか、暖かで寒さしのげるもん。」

とお捨は言つた。

「天井が低いから暖かなんだ。これで床と壁さえしつかりしてゐれば、もつと暖いんだけどなあ。春になつたら壁に取りかへることにする。」

と大崎は言つた。やがて大崎は母親のお種につづいて起きた。も起きようとするとお捨が言つた。

「お祖母。もつと寢てゐなさい。暖いもんが出來たら知らせて上げるから。」

「お祖母。ゆんべはよく眠られたかね。」

と大崎は爐端へ近づきながら言つた。眠られたけど、やつぱり處がかわつたせいか、夢ばつかしみてゐた。それに身體がまだ搖れて困る。」

「さうだかしれない。あんなに馬車にゆられたことなんか、なかつたものなあ。」

「なんせ、ひどい野つ原だつたもん。でもあの津輕の汽船よか、うんと樂だつたさ。」

と祖母は北海道へ渡るときの津輕海峽の海の上のことを思ひ出して言つた。

大崎は入口の土間へ行つて、汲んで置いた澤の水で顏を洗ひ、戸の代りの莚をあげて小屋の外へ出た。彼の立つてゐるやや小高い丘から、白い冬の朝靄に覆はれて、草木の枯れ果てて、冷え冷えとした陰鬱な曠野が見渡された。さうして處々、白黃色に冴えた蘆の密生帶が曠野の眺めを一層、痛寒く思はせた。朝靄の中から、うすら明るく小さい沼も幾つか見えた。東の空は未だ昇らぬ朝日の淡い明りを帶びてゐた。丘の背後は更に一段、二段と高い丘が續き、それが林に覆はれた山に連つてゐた。小屋の背後をつつむ白樺の林は既に落葉し盡して、まる裸であつた。

大崎はあたりを眺めた目をやがて、自分のおがみ小屋へ向けた。それは彼の目にも、まことにささやかで、ひどくみじめなものであつた。それは林と山とを背景にして、その前に投げ出された一つかみ程の叢に過ぎなかつた。さうして、その叢の隙間隙間から、白い薄い煙が流れ出てゐるのであつた。併し大崎はその叢の中の巢のやうな小屋に何一つ不安らしいものを感じなかつたばかりか、寧ろそこに大きい安堵と滿足とを強く感じたのであつた。彼は小屋を眺めながら、彼の土地に於ける最初の日の仕事の手順を考へた。何を先づやつたらいいか。最初の日の仕事始めは、とりもなほさず、この土地での彼等の一生涯、彼等の運命と幸福との爲めの最初の仕事に他ならぬことを彼は強く感じた。彼は先づ小屋にもう少し手を加へて更によく風雨を防ぎ、氷雪の

寒さを凌ぎ得るやうにしようと思つた。それから、長い冬ごもりに耐える爲めに、乏しいながらも虹別の囚作地から運んで來た收穫物を調べて、その中から來春の種子をとり分け、その上、どれだけ殘るか、その殘りでこの冬から來年の收穫までの食ひつなぎが出來るかどうかを確かめなければならぬと思つた。彼はそれから冬の間の仕事を考へた。無論、この冬は出稼は出來ない。それでは裏の林に入つて薪を割り、木炭を燒くのだと考へた。これは自分で使ふために必要であるばかりでなく、原野が凍れてから北星にひかせて市街地へ運べば、幾らかでも、屑米や醬油や味噌や鹽や石油代にはなるに違ひない。さうして春になつたら、土地を拓きおこすのだ。この丘も、あの原野も、どしどし火入れしておこしてやるのだ。さうして、種子を蒔きおろす。この新土はぐんぐん作物を育ててくれるに違ひない。收穫だ。次の年の春には、また土地をひろげる。土地はいくらでもあるではないか。それへ、いつぱいに種子を蒔くんだ。

彼が末ひろがりに限りなく廣がつてゆくかういふ樂しい希望に滿ち溢れた考へにひたつてゐると、小屋の莚をあげて、秀造が走り出て來た。

「お父、飯だつて。」

「おう、ようし、今行くぞ。」

大崎は、もう一度ぐるりとあたりを眺め渡した。空の明りは增して來たが、冬の朝日はまだ上らなかつた。大崎は秀造とつれ立つて暗い小屋へはいつた。

小屋の内で榾火の反映だけの明りに寄り集るやうに、みんなが爐端にすわつてゐた。祖母も起

きてゐた。朝餉はゆふべの殘りものの雜炊で濟まされた。それでも、腹に暖いものの納まるだけで滿足であつた。大崎は雜炊を啜り終るとお捨に言つた。

「今日は仕事始めだぞ。おらは、おつ母ともう少し小屋ば手入れするから、子供らつれて裏山の笹と原野の蘆ばとつて來てけれ。いくらでも、多いほどいいから。」

大崎は野良仕事着に身仕度すると裏の林へ行つて細長い木の枝を一本伐つて來た。彼はその枝を母親に渡して、小屋の內から見える屋根の隙間にそれを突きさして、屋根の上に登つてゐる彼に、その個所を知らせることを賴んだ。さうして大崎は入口に近い方から奧の方へと徐々に屋根の上を逼ひ渡りながら、隙間に蘆を束ねたのを挿込んで行つた。小屋の內で天井を仰ぎながら、隙間を探してゐるお種には次第にその隙間のふさぎ埋められてゆくのが、心に暖く感じられた。子供たちは、お捨の刈りとつた笹や蘆を、みんな腕一つぱいに抱いて小屋の前へ運んで來た。小屋は少しづつではあるが、次第に着ぶくれるやうに暖く見えて來た。祖母も小屋から出たり入つたりして、大崎の小屋造りを眺てゐた。

「暖かそうになつたなあ。でも、雪が積つても大丈夫だべかのう。雪につぶされる心配ないべか。」

と祖母は大崎に尋ねた。

「大丈夫だとも、少し位の雪にびくともせんさ。掘立てだし、それに、眞中の柱は樺の生きたまんまの立木だからなあ。時々、雪のけすれば、ちつとも心配はいらんよ。この屋根の下なら、

安心して往まわれるさ。」

と大崎は屋根の上から、大きい聲で言つた。

屋根や側面の隙間を塞き終ると、こんどは床の莚をまくつて、その下にも更に蘆を厚く敷き重ねた。

「まるで、布團の上ば歩いてゐるやうでないか」と、彼は窪い所を直しながら言つた。それからまた彼は小屋の前後の入口を圍うて風よけの垣を拵へた。それが一段と小屋の構えをひき立てて見せた。

「どうだ。まるで玄關みたいだべよ。」

「ほんとだなあ。それから濟まんけど、便所ばこしらへてければいいな。なるたけ寒くないとこさ。」

と母親のお種が言つた。大崎はなるほど、さうだつたと思つた。

「さうさう。おら、うつかりしてゐたぞ。何處さこしらへるか。やつぱり、厩のわきがいいべなあ。」

大崎は厩の片隅の壁にくぐり口を開け、その外に便所のための穴を掘り、外から蘆で圍つた。

「二年や三年は肥はいらないけど、その內にいるやうになるから、野糞たれたら駄目だぞ。來春は大きな肥溜め作つて、貯めて置くやうにするんだ。」

と大崎は子供たちに言つてきかせるやうに、大きな聲で言つた。

「ほんとだとも。それから厩に溝きつて置いたらいいぞ。北星の小便、便所さ流れ込むやうに。」

とお種が言つた。

「さうだとも。それもやつて置くさ。」

「風呂桶がほしいけどなあ。」

とお捨が言つた。

「ほんとだなあ。あれは持つて來たかつたなあ。」

とお種が相鎚をうつた。大崎もかうして、一段落つきかけてみると、尤もだと思つた。虹別の開墾小屋では、小さい鐵砲風呂を持つてゐたのであるが、荷物になるので小屋へ置いて來たのであつた。彼としては持つて行けない以上、賣り拂つて金にしたかつたのだが、さうすれば不審がられて夜逃げの下心が露見そうに思はれたので、殘念ながら、置いて來たのであつた。併し今では、隣家のない原野の一軒家では貰ひ風呂は出來ないので、どうしても欲しいものとなつた。

「少しの間、がまんしてけれ。その内に、くめんするからな。これでもう少し落ちついたら欲しいもの澤山出てくるべなあ。」

と大崎は女たちを慰め顏に言つた。

「でも、出來るだけ辛棒するさ。早う、みんなで樂になつた方がいいからなあ。」

とお種が言つた。

「ただお祖母には、湯たんぽ買つてやりたいもんだなあ。」

とお捨が言つた。みんなに異存はなかつたが、默つてゐるより致しかたがなかつた。

小屋は見違へるほど、恰好がつき、實際に住み心地が別になつたほど暖くなつた。ただ欲しいのは、窓と入口との硝子戸であつた。併しそれとても、全く當てのない望みではなく、ただもう少しの辛棒であつたから、みんなには苦にならなかつた。

小屋の方の仕事が濟むと、お種も草刈りの方へまわつた。女たち、子供たちは勤勉な蟻のやうに精一つぱいの力で蘆や笹や、いたどりなどを刈り集め、それをせつせと小屋へ運んだ。

「いくらあつても餘るつてことはないぞ。きつと使ひ道はあるからなあ。」

と大崎は、女、子供たちを勵した。さうして自分は裏の林へ入つて行つて、薪木を集めた。

かうして、みんなが夢我夢中になつて働いてゐるうちに、いつの間にか黃昏がせまり、あたりは暗く地面は冷めたくなり、やがて日が暮れた。すると小さい地蟲が草むらの蔭の巢にもぐり込むやうに、大崎たちみんなは、小屋へ入つた。晩飯がすみ、焚火に一あたり暖まると、みんな口數少く寢床に入つた。

夜中に裏の林から山一帶にごうつと風立つ物音で大崎はふと目を覺ました。風が蘆葺の小屋の四方八方から吹き込むのを感じた。やがてうとうととして、非常な物靜けさに引きこまれるやうな氣持で再び目を覺されてみると、風は止んで雨が、しとしとと降つてゐるのであつた。雨の雫の音が小屋の外側に聞えるやうであるが、小屋の中は、どうやら雨もりに耐えてゐる樣子であつ

た。彼は自分の作つた小屋が雨を凌げることを證據立てられた氣持がして愉快であつた。雨が凌げれば、雪だつて大丈夫だ。春先になつたら、少し早目に雪を下ろせば、すがもりすることはあるまいと考へた。彼は安堵して眠つた。

お捨が焚火をくべる物音で大崎は目をさました時、やはり雨の音が彼の耳に入つた。

「まだ、雨降つてゐるな。今日は外の仕事出來んから、明るくなるまでもつと寢てゐればいいに。今日は虹別の畑のもの、みんな調べてみて置くべよ。來春の種子にするだけは、どんなことしても、とつて置かないばならんからな。さうして殘りのものでうまく食ひつないでいくやうにするんだ。」

と大崎は寢床の中から低い聲で言つた。

「虹別の畑のものなんて、いくらもないから、食ひつないでいかれるべか。」

とお捨がつぶやいた。

「なあに。心配はない。今年一年の辛棒だから、どうにでもなる。おら、すぐ木炭燒をはじめるつもりだ。木炭と薪で一冬食ふだけのものにはなるさ。」

大崎は榾火の明りで赤くはえたお捨の顏が生氣づいて見えた。併し本當は、焚火が衰へると忽ち、蒼黃いろい勞れきつた顏に立ちかへるのであつた。

雨の中にも小屋の外は明けはなれたが、小屋の內はじめじめと暗かつた。その暗さは、開墾小屋とおがみ小屋との相違以上に、虹別ととの蝦野との相違を思はせた。何も食べないと同じやう

な朝餉を終ると、大崎はお捨と二人で、虹別の畑から拾ひ集めるやうに收穫し運んで來た收穫物を改めてみた。さうしてこの夫婦のものは、虹別原野の開墾が彼等一家に對して一體、何を以て酬ひたかを思ひを改めて、更にしみじみと感じるのであつた。ふりかへつてみると、來る年も來る年も不作、冷害、凶作、飢饉の連續であつた。言葉は異ふが、事實は同じことであつた。あの土地は、自然は自分たちを生かしてやらうとしないのだ。あれは人間の土地といふことが出來ないのだ。その證據には、この收穫物を見てくれ。五年も六年もの、死にもの狂ひの勞働に對してあの土地は何を酬へてくれたのだらう。大崎は死の谷間へ、つき落されるやうな心地で、茫然と目前の收穫物に對つてゐた。

馬鈴薯、燕麥、蕎麥、稗、菜種、唐黍、大豆、青豌、大手亡、葱、玉葱、南瓜と數へあげれば豐富のやうでも、どれもこれも、不出來でほんのちよつぴりづつであつた。これらのものが、虹別の新しい不毛地が大崎一家の勞力に與へたものであつた。その他には、これも僅かばかりの屑米と、味噌、醬油、鹽があるほかに、身缺鮭、鹽鱈、干鰈が少しづつ、とつときの御馳走としてあるに過ぎなかつた。いづれにしても、一家みんなで腹にいつぱいになるほど食べられはしないことは明かであつた。來春の種子用として、また多少の豫備として取りのけてみたら、一家のものの生命を喰ひつなぐに、ひどく足りないことが火を見るよりも明かになつた。

「冬の間は少しひだるいかも知れんが、身體働らかすことも少いから、何んとかして食ひつなぐことにするべ。虹別のこと思へば、もう何にも他人に持つて行かれる心配はないから、どうに

かして都合していかれるさ。どうしてもいけなくなつたら無盡おとした金で食ひつなぐこと出來るからなあ。まあ、心配したことはないさ。」

と大崎は自分で自分に元氣をつけるやうに言つた。

お種とお捨とは、暗いだまりこくつた顏を互に見合はせた。

「冬の間だけの辛棒ださ。雪がとければ、路のとうも片栗も生がつてくるから心配ないさ。」

とお種が年寄役でみんなを勵ますやうに言つた。

「さうだとも。山には兎や鳥もゐるべし、澤や沼には川魚がゐるべもの。食べるもんには苦勞しないさ。虹別とちがつて、ここには何をとつて來ても、誰も文句つけるもんはゐないからなあ。みんなおらたちのもんだから。」

と大崎は一時でも、心配したことを悔むやうに元氣よく言つた。彼は心の内で「さうだ、さうだ。何んにも、くよくよすることなんかなかつたのだ。何んにも困らぬやうに、ちやんと考へて段どりがついてゐたではないか。思つてゐた通りにやれば、物事はすつかりうまくいくのだ」と、自分で自分を嗾るやうに呟いた。

「種子のものだけは、どんな事があつても手をつけんようにせや。それから野鼠にやられんやうに、氣をつけてけれや。」

と大崎は言つた。

「それに、凍れさせると困るな。水っ氣のないものはいいけど、馬鈴薯と玉蜀は氣をつけんけ

ばならんな。」

とお種が言つた。それで凍らせて困るものは俵や叺のまま、爐に近い處へ置くことにした。

「薯ばここさ置くが、お前たち、だまつて出して燒いたりしては駄目だぞ。そんなことしたら、何んも食はせんで野つ原でも山でも何處さでもやつて了ふから。」

と大崎は、三人の子供たちをおどかしておいた。子供たちは、おびえた眼をきよろきよろさせて默つてゐた。

外は晩秋の冷たい雨が、びしやびしや降つていつやむか見當もつきかねた。虹別の收穫物を調べ、それをそれぞれかたづけて了ふと、みんな焚火を圍んだ。乏しく、且つ實入りの惡い收穫物ではあるが、それを兎に角にも、生長させ收穫させた虹別の原野のことが、それぞれみんなに思ひ出される樣子であつた。

「虹別でも、今頃はこんな雨が毎日のやうに降つたなあ。」

とお種が言つた。寒冷な霧が降り、雪に變る前に、連日連夜、びしやびしやと底知れず降りつづける原野の雨を、ただただ限りないわびしさの心を以て、お種が思ひ出したのであつたが、その言葉は大崎には別の意味にとられたのであつた。それは「この新しい土地とても、虹別のやうに天氣の不順な新しい不毛地ではないか」といふやうに聞えたのであつた。

「この冬になりかけの雨なら、どこでも降るんだから、少し位、長ぶりしても心配ないさ。まあ、ゆつくり骨休みしといて雨が上つたらみんなで、何んでも、うんと食べ物集めにかかるさ。」

と大崎は言つた。大崎はふと、爐の向ふの厩で、ぷうと屁を放つた北星へ目をやつた。

「北星、屁こいた！」

と子供の秀造が叫んだ。子供には面白いことだつたが、大崎ははつとして北星の運動不足なのを考へた。ここに着いてから、北星は厩につながれて秣を與へられるだけで、まだ働くべき役目がなかつた。大崎は北星に、何を稼がせたらいいか考へた。材木を牽かせるのだ。それよりほかに仕事はなかつた。澤と原野との境目に生えてゐる林を伐つて、その藪出しに北星を働かせてやらう。さうしてその木を小屋の傍まで運ばせ、それを薪に割つて小屋のぐるりに積みかさねて行けば、薪がふえると一緒に、風や雪よけの圍が出來るわけだ。材木を牽かせるには、山葡萄の蔓をとつて來て使へば、丈夫で一番いいんだと考へた。

大崎には今では、方法がつかなくて、どうにも困つたといふ事は、何一つとしてあるやうに思はれなかつた。どうにかなるといふやうな受け身の消極的なことではなく、必ず、一香有效で適切などんな方法でも見つけることが出來るといふ氣がするのであつた。考へてもみるがいい。虹別にゐた時には、この新しい土地に移ることが、どんなに困難なことのやうに見えただらう。それが、何もかにも、うまく行つて、おらたちは、もうおらたちの土地に着いて、小屋を建てて納まつてゐるではないか。それまでの間に、一體全體、どれだけの困難や苦しいことがあつたといふのか。まるで夢のやうではないか。何もかも、思ふやうに行つたではないか。ただ、一つ思ふ通りではなかつたのは、爺さんが死んでしまつて、一緒に、この土地へ來られなかつたことだけ

ではないか。でも、このことは、おらたちにはどうにも、しかたのない神様のしなさつたことだから、死んだもんの不運と、あきらめるより仕方がないことだ、と考へて自分で自分を慰めた。

雨は一日中、びしやびしやと小やみもなく、底知れず降りつづいた。執拗な降りかたであつた。ひどく雨もりがした。併しその雨よりも、一層ねばり强く、大崎一家のものたちはうす暗い小屋の爐端に寄りあつまつて、焚火をつついたり、襤褸をつづくつたり、蘆藁で雪靴を編んでみたり、手垢で眞黑になつた人形を奪ひ合つたり、どんぐひの枯れた莖で笛をつくつたり、お念佛を唱へたりして、長い長い一日を、殆ど話といふ話も無く過した。さうして夕暮と同時に、夜が來た。夜が來ると共に、みんなは寢るより他に、しかたがなかつた。

「この雨のあとは雪になるなあ。虹別ではいつの年もさうだつたもの。風がついて雲になつて、あしたの朝ば雪が積つてゐるべよう。どこも、さう大した變りがあるもんでないべからのう。」

祖母のお若は寢しなにみんなに、さう言つて聞かせるやうに呟いた。

翌朝起きてみると、祖母の言つた通り、雪が降つて山も林も曠野も新しい眞白な雪を、ふはりとかぶり、更に白い靄がたちこめて遠くの眺めをさへぎつてゐた。夜前に祖母の呟いたやうに冷たい雨に風がつき、やがて、氷雨となり、霙となつた後で、細い雪がぬれた山や林や曠野の上へ、しんしんと降り積つたのであつた。降りたての白い柔い處女雪に包まれた樹々の枝や物かげは、新しい雪に對して水々しい灰色の影を作り、神祕的な靜寂な空氣が、それらの影の中から大氣の

うちに融かし出されて來るやうであつた。充分に水氣をふくんだ野や林や山から、日の高くなるにつれて、白い靄が次第に消え去り、青い水々しい空がひろがつて來た。さうしてその青い空の下には、次第に融けかかつて來た白い雪が、雲母色に輝き、山々は銀色にきらめく稜線を青空にくつきりと、描き出して見せた。

大崎は始ど雪白の一色に化した曠野を眺めて、途中に置いて來た馬橇のことを思ひ出した。

「この雪に、馬橇ひいて來るかなあ。」

と言つた。

「綺麗に降つたけど、この雪、今日中に融けてしまうべよ。山の方は殘るか知れんが、この陽光の照り案配だば、原野の方はずい分暖くなつて、雪ば融かすさ。それに雨の後で降つた雪だで、地面の方からも融けて來るもの。もつと凍れてからでなければ、馬橇ひいて來られないさ。」

とお捨が言つた。お捨にさう言はれる迄もなく、確かにさうであると大崎は思つた。彼はただ何んとなく、雪晴れの爽快な原野の上へ行つて自分の土地を踏み、自分の土地を歩るき廻つてみたかつたのであつた。次々に雪が降り積めば、その雪が春になつて融け去るまで、自分の土地は踏めないのであることを思へば、雪が降つたとはいひ、踏めばまだ地面の見られる土地を歩いて廻りたかつたのであつた。

太陽が高くなるにつれ、近くの山の林を包んだ雪は、融けはじめて、ばさりばさりと地上に落ち、ぬれて黒い裸の木々が再び現はれて來た。小屋の上の雪も、蔭の方は殘して、白い水蒸氣を

立てて融け、小屋の立つてゐる丘の上も斑ら雪になり、子供たちの造つた雪達磨が二つ三つ小屋の前にころがつてゐた。遠い原野の上では、雪がねつとりとした感じに水氣をふくみ、清純さも爽快さも消え去つて、ものの老衰を思はせるやうにうす穢くなつて了つた。雪晴れの陽光が暖く、まぶしいほど明るいので、みんなは小屋を出た。北星も日向の木につながれた。

大崎はいよいよ木炭燒窯を拵へる仕事に着手した。彼は裏の白樺林の中に穴を掘り始め、女子供たちは澤や藪から手頃な石を拾ひ集める爲めに働いた。窯の石を積んでその隙間を塗りかためるための泥土は、彼が原野の泥炭地の眞黑な土を叺に入れ、北星につけて運んだ。この眞黑な土は泥炭地特有の臭氣が强かつたが、壁土に役立ち得るので、大崎はやがて小屋の蘆の園を壁に直すことの容易に出來ることに氣がついた。

「この土で、小屋の壁がぬられるぞ。春になつたら、やつてみるべ。」

と大崎は言つた。

「眞黑な土で、畑作るにも、どんなにいいべか。虹別ではこんな黑い土、見たこともなかつたなあ。」

と母親のお種が言つた。

大崎は虹別原野では死んだ勉造爺さんと、二人仕事で窯を拵へたことがあつたが、普通の大きさで十日餘りもかかつたのであつた。併し急場の今は、そんな時日と人手の餘裕がないので、なるべく小さい窯で間に合せて行くよりほかはなかつた。白樺林の中は雪が融けず殘つてゐるの

で、土にまみれて穴を掘つたり、石を運んで積み重ねたり、泥炭地の土を塗つたりすることは、冷たい仕事であつたが、小さい木炭焼き窯一つでも、小屋の近くに造られつつあるといふことは、誰の心にも、何かしら大きな力づよい生活の頼りどころが出來つつあるやうに、感じられるのであつた。さうして彼等には小屋を建てる時のやうに、何ものかに追ひ迫られてゐるやうな氣持が少しもないばかりか、既にそれだけ、事物や心の餘裕が出來たやうに感じられるのであつた。彼等には、生活のどん底から、一番惨めな最底の暮しから僅かながら、既に浮び上つた感じであつた。實際には、それはまだ一歩にも足らぬ向上であるが、併し彼等には、富裕に向つての非常な上昇であり、成功であると思はれるのであつた。大崎とお種とお捨とは、泥にまみれて、日が暮れ落ちてやうやく仕事の手を休めた。黄昏の白樺の木立の間に、まるで死人をその中に埋めた土饅頭のやうな小さい土窯が一日目、二日目、三日目と次第に出來上つて來た。窯の天邊に煙出しの孔を掘へて仕事を終つた。

「出來た。出來た。どうだ、いい窯だべよ。」

と大崎は有頂天に喜び、自慢した。

「あとは一日二日、火を焚いて窯の中を乾かせばいいんだ。今日はこれで、仕事しまうべよ。」

みんなは、樂しそうに小屋へ歸つた。夜は馬鈴薯を大根下しでおろして團子にし、茹たのが、窯の出來上りの心祝ひとして、みんなの口腹へ振舞はれた。大崎は焚火にあたりながら、上機嫌で言つた。

「この調子で、小屋にへつついを掘へたら便利だべなあ。」

「たのむから、掘へてけれや。へつついあれば、火の持ちもいいし、小屋も暖くなるし、煮炊きにとつても便利だもの。」

とお捨が聲をはづませて言つた。へつつい、を造るといふ考へは女たちの氣持を、非常に明るく和やかに元氣づけた。

大崎は早速ひとりで、へつついの形を色々と考へてみたが、この何んでもない、ありふれたものの形が、いざとなると、はつきり頭に思ひ出しにくかつた。

「へつついつて、どんな形をしてゐたつけな。」

と大崎は考へあぐんでつひに、うつかり口に出して言つた。

「へつついの形、知らんてかえ。おかしなことといふなあ。」

と母親のお種が呆れた男と言はんばかりに、大崎の顔を眺めた。

「形は大體、わかつとるが、自分の手で掘へるとなると、どうもはつきりせんなあ。なんせ、おら左官屋やつたことないでなあ。」

大人たちは祖母も入れて、みんな大笑に笑ひこけた。

「こんな、かつこうしてゐるべよ。」

とお種は言ひながら、兩腕をひろげて土饅頭の形のやうな手ぶりをしてみせ、

「それから前に焚口をつけ、上は鍋釜の丁度乗るだけ、ずんどうにせば、いいべさ。」

「それはわかつとる。わかつとるがわからんのは、煙出しがあつたか、どうかつてことさ。」
と大崎は言つた。
「煙出しだつてか、煙出しなんか、あつてもなくてもいいさ。」
とお種が言つた。
「煙出しなかつたら、煙はどこさ逃げていくべか。いぶつて煙くて、どうもならんべさ。木炭焼き窯だつて煙出しの孔は拵へたもの。」
「その煙で、物が煮えるんでないか。」
「煙出しなくたつていいさ。爐の焚火には煙出しがないどもよく煮えるし、煙くてたまらんこともないもの。」
と祖母のお若が言つた。みんなは成る程さうだ、と頷く様子で笑ひ合つた。子供らは、この大人たちの大笑ひが不思議でたまらなさそうに見守つてゐた。大人たちも、後でめいめいが本當にどうしてあんなに笑ひこけたのだらうと下審がつた程、永年の間、笑ひを忘れてゐたのが一度に堰を切つたやうに笑つた。
次の日は曇り勝ちで曠野には、まだらに雪が殘り、眺めは更に念に、うす汚くなつた。山蔭や林の中にも雪が殘つたが、林の木々は更に落葉を増して梢がむき出しになり柏だけが、鳶色の大きいがさがさした葉をかぶつてゐた。この日の仕事は出來上つた木炭焼き窯に少し火を入れて窯の内部を乾かすと共に、窯の具合を試す傍ら、窯に入れる原木を林の中から伐り出すことであつ

た。
彼は窯の中へ少し薪を入れ火をつけた。やがて窯の頭から白い煙がゆるやかに立ち上るのを見て彼は思はず微笑した。彼は妻のお捨に、時々薪を加へて、徐々に窯を乾かすやうに言ひつけて、木炭の原木を伐りに、裏の山へ藪を踏み分けて入つた。彼は手近に楓の大木を見つけ、それを伐り倒すことにした。彼は仕事に取りかかる前に、武者ぶるひのやうな胴震ひを感じた。彼は今こそ、自然との取つ組み合ひの眞の第一歩をふみ出すやうに思つた。然も次の瞬間には、この巨大な立木が自分の脚下に伐り倒されて、惨めに、意氣地なく横たはる様子を勝ち誇るやうに感じた。彼がこれまでに幾度か出稼ぎした天鹽や十勝の山奥の冬期伐木の勇ましい生業の様子が眼に見えるやうに思ひ出された。然も最も晴れがましいことは、自分が飯場の出稼人夫でなく、この冬山の主人であり、この巨大な立木の持主だといふことである。この日の山仕事は芯から楽めた。大がかりな冬期伐材や藪出しの賑やかさはないが、ただ一人で巨木と取つ組み合ふといふ凛凛しい感じの中には、遠い冬山稼ぎの賑やかさが自分のもののやうに身近かに感じられた。彼は選んだ楓の大木を藪出しに都合のいいやうに、切り口を麓の方へ向けて、山の傾斜なりに倒すことにした。それで、彼は先づ斧で受け口を山側の方へとり、鋸でひき込んで行つた。さういふ手順を彼は幾度もの山子の出稼ぎで覺えてゐたのであつた。木をひき切る冴えた音と、その木響、根本や野良着にふりかかる鋸屑の匂ひが彼の仕事を調子づけた。併し巨大な楓は、次第に切り込まれる鋸の大きい齒にも平然としてゐるやうに見えた。彼は今に見ろ、今に見ろと胸の中で呟き

ながら、時々休まなければ、腕がつづかなかつた。

大崎の鋸なぞ恐れる様子もなく豪然と、突つ立つてゐた楓の大木も、いつとはなく、目に見えぬほどの身震ひが次第次第に加はつて來て、そのきしむやうな身震の反動が大崎の兩腕にも傳はつてくるのが感じられた。大崎は時々、梢の方を見上げ梢のゆれ震ふ様をみて、につこりと微笑をもらした。それから又、兩掌に唾をつけて、木の肉に固くしめつけられる鋸を力一つぱい、ひいたり押したりした。やうやく幹の三分の一程の深さまで切り込むと、彼は鋸をぬき、幹の反對の側で受け口の三、四寸上の處に新たに鋸をひき込んだ。大木の身震ひは愈々、著しく激しくなつて來た。かうして三分の一程の深さまでひき込んでゆくと、大木は急に、みしつみしつと響きをあげ、自身の重みの力で搖れ出した。大崎は身體をさけた。大木は今や自分の背骨をへし折られる苦悶の響を鳴らし、截り口から、ぽんと躍り上つたとみるうちに、周圍の立木の枝を折り飛ばし、ばりばりづしんと地響を上げて倒れた。數百年の樹齢を持つ大木が憐れにも大崎の手によつて、一とたまりもなくそこに横たはり、斷末魔のやうな、枝や梢の震動が靜まると、林の中に忽然と現はれたその空隙は奈落の底が口を開いたやうであつた。大崎は全身のひきしまるのを感じ、勝ち誇つた氣持になつた。彼はひと休みすると、先づ枝を伐りとり、それを木炭に燒くやうに手頃に短かくした。その枝を伐り集めるのでも、二、三日分の仕事であつた。

窯の具合もよさそうなので、いよいよ木炭を燒く日が來た。一家の者はみな、窯の前に集り、窯の中に原木を積み重ねる大崎の仕事を熱心に、じつと見つめてゐた。大崎は焚口に火をつけ、

それが燃え出すのを見定めると、窯口を石と泥土で密閉した。みんなは片唾をのんで窯を見守つてゐた。あたかも、目前に横たはつてゐるものが生きてゐるか、死んでゐるかを驗そうとでもする目つきであつた。暫らくたつて、窯の天邊の孔から、薄い白い煙が一筋、二筋、細くすうつと、林間の冷い朝の空氣の中へ流れ出て來た。

「煙だ。煙が出て來た。」

不思議なものを見るやうに、子供たちは躍り上がつて喜んだ。

「馬鹿。炭燒きが珍らしいか。虹別でうんと見たべよ。」

と大崎はにこにこしながら言つた。子供たちは、無論、木炭燒きは珍らしいわけではないが、この恐しい程に寂しい、人つ氣のない新しい土地では、それがただの煙であつても、動くものに何かしら暖く心をひかれるのが、子供心にも感じるのであつた。子供たちは、窯の前から離れず、そこを一番なじみ深そうに遊び場にした。子供たちばかりでなく、大人たちも木炭燒き窯が働き出したことは何よりも頼丈夫に思はれた。それは單に窯が働き出したことだけではなく、同時に彼等の小屋も、土地も、林も、彼等自身も稼ぎ出したことにほかならぬのであつた。林の中に、絶えず煙が玩具のやうな窯から流れ出て、それが次第に色が變つてゆくのを眺めてゐるのは、暖く又賑かな感じを與へるに充分であつた。

「煙が紫色になつたら教へるんだぞう。紫色になつたら、燒けたんだからなあ。」

と大崎は、窯の前で遊んでゐる子供たちに時々、遠くから大きな聲で叫んだ。

翌日の晝頃に、子供たちは、煙の色が紫色になつてゐるのに氣がついて、あわてて教へに驅けて來た。大崎は原木のために伐木してゐる現場から下りて來た。彼は炭質を固くするために密閉した窯口に、小さい孔を一つ二つ開け、煙出しの孔を小さくした。

「あと二時間ほどしたら、窯の口ば開けるぞ。みんなで澤さ行つて、ぬれた砂を集めて來いや。土だば駄目だ。砂だぞ。」

とお捨や子供たちに言つた。みんなは叺を持つて澤へ砂を集めに行つた。大崎は時間を見計らつて、いよいよ窯口を開け、手製の柄の長いこまざらひで眞赤な木炭を掻き出した。子供たちは「木炭が出來上つた、木炭が出來上つた」と喚聲をあげて喜んだ。大崎は手早く濕つた砂を、その上へ撒きかけて眞赤な木炭を冷ました。さうして、冷め終ると、荒莚の上へ乘せて小屋の土間へ運び入れた。

「炭俵も作らんばならんし、入れて置く納屋もいるなあ。」

とお捨が言つた。

「さうだ、さうだ、納屋もつくるべえ。」

と大崎が元氣よくそれに答へた。

「もう、納屋がいるやうになつたか。」

とお種が心から樂しさうに且つ自ら驚くやうに言つた。

「今に、土藏建てるやうになるぞ。なあに、すぐのことつたぞ。樓つたものは、みんなおらたちのものになるんだから、殖える一方だ。雪の積らんうちに、窯ばもう一つ拵へるべえ。」

と大崎は豪勢に言ひ放つた。それほど、彼は木炭燒きの初窯の成功で醉ひしれて夢中になつた。

續いて窯に原木が積み込まれ、火が入れられた。さうしてその傍に並んで、根雪にならぬうちにと、もう一つ窯を築く仕事が始められた。

祖母のお若は、自分がぼんやり居食ひばかりしてはゐられないと言つて、雨や雪の降らぬ日には、子供たちをつれて丘の下の澤に下り、木の枝をとらせては焚火し、その燠に澤の水をかけては消し炭を作つた。子供たちは始めの間は、「お祖母變なことするなあ」なんて燠さ水をかけては、又焚火はじめるのかなあ」と不審がつてゐたが、「かうして消し炭こしらへるのよ。今にもつと寒くなつたら、みんなさ炬燵かけて寢るやうにしてやるのよ。お婆の遠い郷里にゐた時は、みんな消し炭こしらへてゐたんだよ。儉約になつたからなあ。よつく、見て覺えとけや。おら、作れなくなつたら、お前たちして消し炭つくつてけれやなあ。」

子供たちが枯れた草むらや、落葉した林のから中、樣々な枝や朽木をとつて來るのを、祖母は一ゝ、それは楢の枝だとか、それは楓の枝だとか木の名前を言ひきかせ、或ひはこれは大きいぞ、これは小さいなあ、と賞めたり勵したりしながら、焚火に投げくべる。火箸代りに小枝で焚火を掻きまわし、燠がかなりたまると、燠の一部を傍に移して別の焚火をしかけ、前の燠の山へ、澤で水に漬けた古莚を持つて來てかける。じゆうと消える音と同時に、もくもくと白い煙が

立つて消し炭が殘つた。さうして白い煙の中から見える祖母の姿はまるで、お伽噺の妖婆そのものであつた。

こんな消し炭つくりも、祖母にとつては粗末に出來ぬ仕事であり、子供たちには樂しい遊びであつたが、雪模樣の曠野では、祖母にとつては無理な仕事であつた。お種やお捨にとめられながら、もう少し、もう少しと言つてゐる中に、いつの間にか、すつかり冷え込んでしまつた。祖母は暫く、小屋の焚火の近くに床に就いた。床の裾に炬燵を入れ、祖母のつくつた消し炭がその炬燵の火に使はれた。それでも、祖母は自分のつくつた消し炭に滿足し、氣がねなく寢てゐることが出來た。

「お祖母永く寢つくやうにならんばいいがなあ。」

と窯の前で働いてゐる時、お種が大崎に言つた。

「なあに大丈夫ださ、心配することないさ。お祖母はあれで家中で一番たつしやに出來てゐるから。暖かくしておいてやれば、すぐなおるさ。」

と大崎は屈托なさそうに言つた。

「でも齢が齢だからなあ、無理はさせられんものなあ。」

とお種が言つた。大崎は別に返事はしなかつた。併し腹の中では、「家で落ちついてゐればいいのに、年寄りの癖にいらぬ外仕事なんかするから、かへつて心配かけることになるんでないか」と、少しむしやくしやした。大崎は自分の病氣の場合のことは考へようともしなかつたが、家の

中に誰か病人の出來るのをひどく恐れてゐた。誰か一人でも永い重い病人が出來たら、百姓なんかの暮し向きは、忽ち根こそぎに掠め去られてしまふことを、よく知つてゐたからであつた。どうせ、なほらぬ病氣にとつつかれたのなら、早くきまりがついてくれることを、祕かに願ふのであつた。

併し最も老衰した筈の祖母が一番、寒さと困窮と苦勞に耐える力を持つてゐるやうに床を上げることが出來た。めいめいに默つてはゐたが多少の心配をしてゐたみんなは、それで安心してよく働いた。大崎が裏山の林に入つて大木を倒したり、立木に攀つて太い枝を伐り落して、手頃に木炭の原木を用意すると、母親のお種と妻のお捨とは、それを集め揃へて窯に入れた。窯に火のある間、大崎は伐り倒した大木を幾つにも胴切りに鋸でひき、更にまさかりでたち割つて薪を造つた。さうして一日一日と、うづ高い薪の敷數が積みかさねられて行つた。そのうちに、木炭窯の煙が紫色に變ると、眞赤に燒け上つた木炭を窯から搔き出して、濕れた砂をかけた。まだほの暖い木炭が數日目毎に窯の傍に幾つもの山を作つた。すつかり冷えきつた方から、雪や雨にぬらさぬやうにと、順々に小屋の土間や厩の隅へ運び込んだ。炭俵の仕度がまだ出來てゐないので、ばら積みにしてゐたが、やがて、小屋の裏へさし掛けに簡單な納屋を拵へた。

「炭俵も用意しなければならんぞう。ここは何んもかも、新手だから、何んもかも、自分とこの手で用意しなければならんなう。」

とお種が働き甲斐のある調子で言つた。さうして一寸の間、言葉をきつて話の調子をかへて言

つた。

「俵や莚は、死んだお爺が上手だつたになあ。お爺がこの山のやうな木炭見たら、どんなに喜ぶこつたかなあ。」

「でも、虹別では、自分のとこの木炭を焼くだけでも、木がなかつたものなあ。」

とお捨が言つた。

「お爺ゐたら、毎日木炭ばつかし焼いて喜んでゐるべよ。裏の山の林を、すつかり木炭に焼いて、坊主山にしてしまうべよ。」

と大崎は言つた。

かうして三人の稼ぎ手は働きつづけた。冬の冷い雨が雪になり、それが雪に変り、融けたり降つたりしてゐる間にも働きつづけた。併しこの三人の働き手のほかに、祖母のお若と三人の子供たちも、ただぼんやりしてゐるのではなかつた。一束の稲藁をも持たぬ彼等は、曠野に密生してゐる蘆を刈りとつて來て、それを稲藁の代りにしようとするのであつた。大崎は手頃な木の根株で砧を作り、又、藁をうつ木槌を拵へた。祖母と子供たちは、うす闇い小屋の中で、とんとんと藁をうつた。老婆や子供たちのうつ、その鈍い眠むそうな音が、裏で働く者へ聞えて來て、外の仕事も元氣づいた。

「みんなが揃つて稼いでゐる。これで生きて行けないわけがない。いや、きつとよくなつて行くに違ひはないのだ。」

夜業にも焜火のいらぬ藁打ちが、雪明りと焚火の明りで、交る交るつづけられた。身體もそれで暖まつた。明けても暮れても一家の生計と困窮と將來の成功を負ひ目に感じてゐる大崎は、そのやうに考へずにはゐられなかつた。

「力はあんまり入れん方がいいぞ。ただ、萬遍なく、軟らかくなるやうに打つてけれよ。それで温い雪靴拵へてやるぞ。」

と大崎は、藁を打つ子供たちに言つた。雪が次第に積つてきた。殊に山では、一夜のうちに一尺、二尺と深くなる事が屢々であつた。大崎は一層山仕事に夢中になつた。或日、一日、吹雪が襲來し、雪煙りが山頂から澤まで眞白に吹き埋め、風がごうごうと裏山の林に咆哮してゐた。久しぶりでの骨休めの日が、暗い小屋の中に訪れたのであつた。併し一家のものは、骨休めのしようもなかつたばかりか、そのしかたも知らなかつた。何か手を働かせることが骨休みにほかならなかつた。女、子供たちは代る代る藁をうつた。大崎は、山から伐りとつて來た、こくわや葡萄づるで幾組かの、がんじきを拵へた。子供たちの分までせがまれて彼等を嬉しがらせた。それから、冬山へ履いて出るつまごを編み、大、小幾足もの雪靴を作つた。併し子供たちはそれを履いてみて、變な不平がましい顏をした。

「どうだ、温いべよ。雪道はこれに限る。澱粉靴なんか駄目だ。」

と大崎は言つたが、子供達は貧しくとも、虹別開墾地で買つてもらつた澱粉靴と呼ばれる深ゴム靴の方が嬉しいのであつた。

「でも、これ、藁で拵へたんだし、前のは、ゴムで拵へたんだもの。」
と息子の秀造が、こましやくれたことを言つた。
「生意氣なこと言ふな。ゴム靴だつて、あれはみんな澱粉で拵へるんだ。澱粉つてのは、馬鈴薯からとるんだぞ。それ位のこと學校で習つたべよ。習はなくたつて、百姓の子は覺えてゐなけりあ駄目だぞ、だから、藁靴はゴム靴よか、いいんだぞ。」
「だつて、ゴム靴みたいに光つとらんもの。それに、中に、羅紗がついてをらんものなあ。」
「馬鹿、贅澤いふな。學校さ行かんのに、ゴム靴なんかいるもんか。今まで履いてゐたのは、仕舞つて置いて、藁靴はいて遊ぶんだぞ。」
「そんなら、いつから學校さいけるのけえ。」
秀造は父親の顏をぢつと見つめて、つつかかるやうに言つた。お松も兄のこのひと言に對する父親の返事を、片唾をのむで眞劍な目つきで待つた。
「學校だつてか？　馬鹿、學校なんつて何處にもないでないか。學校どころか、家一軒ないでないか。そんなこと位、自分の眼でみて、わからんか。」
大崎の聲は焦々し且つとげとげしかつた。
「だつて、お父、こつちの學校さ入れてけるつて言つてたでないか。」
と秀造は突つこんで行つた。大崎は苦ゝしくだまり込んだ。ぐつと詰つた彼には怒鳴るにも、きつかけが得られなかつた。

「今になあ、ここの土地が開けてよくなると大きな學校も役場も建つんだぞう。そうしたら學校さあげてやるから、もう少し辛棒してけれよ。うちは今、貧乏だて、みんなでうんと稼いで金持になつてよ、お前たちば學校さあげてやるし、ゴム靴も買つてやるからなあ。」
とお捨が、つづくり物の針を休めずに、しんみりと子供たちに言つてきかせた。
この眞實そのままの言葉は、そのまま子供たちの小さい胸にも、よくのみ込めた樣子であつた。子供たちを憐れみ愛しながら、眞實を恐れてゐる父親の甘い夢のやうな言葉がかへつて子供の心を焦立たせるのに反して、母親の、
「おらたちは今、貧乏だからな、辛棒してけれよ。」
といふ痛々しい一言が不思議にも子供たちの心をなぐさめ、和らげるのであつた。
この夜、大人たちは吹雪の底に、いぢけきつてだまりこくつて、めいめいの仕事をつづけるよりほかには、しようもなかつた。それからは、子供たちは、學校のことを言はなくなつた。
自然の荒ゝしい掌中に投げ出されたやうな一家の暮しで、月日の過ぎるのが忘れられてゐた。虹別から來てから、月日は永遠のやうでもあり、瞬間のやうでもあつた。
「今日は何日になつたのかのう。お爺の命日も、うつかり過してしまうたでないかのう。」
と或る日、急に氣がついたやうに祖母のお若が言つた。
「ほんとうになあ。日も忘れてゐた。」
とお種が相槌うつた。

「柱暦、どこさ入れたか覺えてゐるか。」
と大崎はお捨に尋ねた。
「おら、仕舞はなかつたよ。ぼんぼん時計はづして貰ふとき、あんた氣がつかなかつたべか。」
とお捨は答へた。
「おらも知らんぞ。虹別の小屋さ忘れて來たかな。時計はづすのに氣をとられて、その下にかけてあつた暦ば忘れて來たのかも知れんぞ。どつべかへしたなあ。日も時もわからんことになつてしまつたか。」
「時間なら時計があるからわかるけど。」
とお捨が言つた。
「でも、時計だつて一度停つたら、確かな時間がわからんことになる。」
「だけど、此處さ着いた時には、時計は途中で搖られたで停つてゐたよ。」
「でも、今、動いてゐるでないか。いつ、合せた。」
「いい加減に日脚と腹加減に合はせて、かけて置いたけど。」
とお捨は眞面目な顏で言つたので、みんなはどつと笑つた。
「時間のことは、それでも濟むけど、日日の方はわからんと困るぞ。今日は一體、何日なんかなあ、虹別を立つた日から數えてみなければならんな。」
大崎は暫く考へ立つた、硬い指を折つて、日を數えようとした。併し先づ最初に疑はしいのは、

出立の日であつた。大崎は考へればあやしく、疑はしくなつた。虹別の空小屋の柱に取りのこされてゐる汚れた柱暦が彼を嘲笑つてゐるやうに、彼の眼底にちらついた。お捨も、はつきりしなかつた。お種だけが十一月二十日の夜だつたと覺えてゐた。
「その日は、おらには忘れられん日だから、よく覺えてゐるけど、おらの母親、實家の母親の祥月命日だつたでなあ。おらは、虹別立つのが悲しくてたまらんかつたども、めぐりめぐつて、生みの母親の祥月命日に、新しい土地さ旅立つのも、よくよくの緣だかも知れんし、これはきつと生みの母親が仕倖の方さ導いて下さるのだと、獨りで胸の中で思つてゐたよ。それで、出立の日ばよく覺えてゐるのだよ。」
この話をきくと、大崎の頭に覆ひかぶさつてゐる柱暦の、疑はしい幻影は忽ち消え去つた。彼は標茶市街地の一泊と、曠野の上の野宿二泊とを數えて、この土地に到着した彼等の輝やかしい入地日を十一月二十三日と確認することが出來た。併し、それからの日數を繰ることは困難であつた。特に目ぼしい仕事でその日、その日を區別して數え上げねばならぬのであつたが、來る日も來る日も單調で同じ仕事の繰りかへしであつたので、すぐこんがらがつて終ふのであつた。彼は十一月二十四日仕事始めの、小屋掛けの日から數えて行つた。小屋掛けが濟んで木炭燒窯造りの日とか、楓の大木を伐り倒した日とか、薪を割つた日とか、第一回の木炭燒き上り、窯出しの日とか、雨から霙になつた日とか、霙から雪になつた日とか、それが融けた日とか、曇つて風の强かつた日とか、蘆で藁をうつた日とか、祖母が澤で消し炭を作つた日と

か、雪靴や、がんじきやつまごを拵へた日とか、それらの單調な日夜の繰りかへしの數を數えてみるとその日は、暦の上ではもう年も暮近く十二月二十七日に當つてゐるのであつた。

「おらもお爺の命日に近い頃だとは思つてゐたけど、急に變つた仕事にかまけてゐて、日日數えるの忘れてゐたものなあ。うつかと、命日過してしまつて、とんでもないことしたなあ。ほんとに、お爺に濟まんことしたなあ。」

とお種が言つた。虹別で死んだ勉造の命日は、それより二日前に過ぎてゐるのであつた。

併し大崎には、いつの間にかその年も暮れ近い十二月二十七日にもなつたといふことは强く且つ深く彼の胸をうつものがあつた。不作、凶作と連年打ちのめされた虹別原野では年末、正月と云つても、格別に嬉しいといふことはないが、それにしても、困窮貧乏のうちにも隣近所の者たちの間で酌みかはす賑やかさがあつた。併し今、ここではそれが一切ない。その代り、虹別では、後から後からと、執拗に襲ひ來る債鬼が、餓えた狼のやうに彼を痛みつけるのであつたが、今、ここでは、野鼠の一匹すらも彼を嚙みにやつて來るものはない。かうして、苦惱の年々がすべて一擧に消え去り、新しい希望に溢れた年が、だまつてゐても彼の方へ、辷るやうにやつて來るのだと思ふと、何かしら、淋しく、物足らぬやうな氣持ちもした。收穫が濟むか濟まぬ中から痛めつけられ、新の正月前に手ひどくせめつけられ、更に、舊の正月に嚙みつかれるのが、秋から冬ぢゆうの免がれ難い受難として、日夜、生活をきびしく壓迫してゐたのであるが、今はその債鬼が一匹もやつて來ないとすると、彼は何かしら虛脫した感じがした。完全に成功した夜逃の

效果がこれほど大きいものだつたかと、彼は自分で感じ入るのであつた。

「こんど市街さ出たら、暦を買つて來るけど、それまでは、紙さ、毎日しるしつけて置くことにするべよ。」

そう言つて、大崎は古くなつた便箋から紙を一枚はいで、それに鉛筆で、十一月二十三日、到着。二十四日、仕事始、と書き、それから間をとばして、十二月二十七日とし、以下昭和×年一月七日まで數字を書き並べた。彼はその紙をどこかに貼りつけようとして見廻したが、柱も壁も平な個處がないので、柱時計の下部に貼りつけた。

「もう、今年も行つてしまふなあ。早いものだ。來年こそはきつと、いい年だぞ。」

大崎は元氣よくそう言つた。彼はこの時ほど樂な年末を過したこともなく、又、この時ほど嬉しい來年を待つこともなかつた。

大崎の作つた暦の上で年の暮が來たが、それは、掘立のおがみ小屋一軒に過ぎない原野の大崎一家にとつては、雪深い冬の並の日に過ぎなかつた。寒氣のきびしい大晦日が來た。併し吹雪だけが、この借金と不義理だらけの大崎一家を、白い濛々とした雪の幕で押し包んだに過ぎなかつた。虹別原野の開墾小屋で來る年も來る年も借金の云ひ譯で過した大晦日に較べて、何んと云ふ穏やかな、むしろ寂しいほどの大晦日に思はれた。虹別の衆は、今頃は、津田爺さん始め、谷村、横尾、小山、富田、石山なぞ、割合に懇意にした連中が、高利貸や小坂商店の大將に、ぺこぺこ頭を下げたり、唇を嚙んで默り込んだりして、一分も早くこの日が過ぎてくれればいいと念

じてゐる樣子が、ありありと目にうつるのであつた。

「氣のきかない樂だ。こんなに樂々と年越しが出來るのに、あの樂は自分で好き勝手に苦しんでゐるやうなものだ。」

と大崎は繰りかへし胸中で獨り言つた。

「寢正月とか云ふもんは、來年の正月みたいなことをいふもんだべものなあ。」

と大晦日の晩と元日の御馳走に煮てゐる鶉豆に、とつときの黑砂糖を少し入れてかきまはしながら、お捨が言つた。

「ほんに、かういふ暮れや正月もあるもんだものなあ。氣が樂で、なんぼかいいんだか。」

とお種が相槌をうつた。

「正月だと云ふに、餅ば食べさせんで、氣の毒だけど、少しがまんしてけれよ。舊の正月には、何んとかするからなあ。この次の正月には、うちで餅つきでもやりたいもんだなあ。」

と大崎が言つた。併し誰れも返事が出來なかつた。

煮豆と赤い鹽鱒と菜つ葉の雜炊で年の暮れを送り、元旦が迎へられた。全く、身體の置き處のない、退屈な元日であつた。雪は降りやんだが、寒い風が鋭く吹いて、小屋の前へやたらに吹き溜りを拵へて元日は過ぎた。虹別原野では、あの疲弊困憊の裡にも正月二日の買ひ初めに女、子供たちは貧しいながらも、何かしら喜びがあつたが、ここの二日はただ天氣がやや回復したと云ふに過ぎなかつた。三日も雪、四日も雪であつた。五日になつて天氣が直つて思ひがけぬ、大喜

びが小屋を動れた。それは天氣がやうやく晴れたので裏の山林で木を伐り倒して、ひと休みしてゐると、傍の根蔭から一匹の兎が飛び出して來て、今倒された木の枝先きを噛り初めた。大崎はやにわに傍の薪を手にとつて、力まかせに投げつけた。薪は、びゆんと飛んで行つて、偶然ながら、うまく兎の頭にぶつかつた。大崎はしめたと思つて飛び出して行くと、その間に兎は、よろけながら、倒された木の枝の下へもぐり込まうとして、もがひた。大崎は枝の上にあがつて兎をその下に押へつけ、手にした薪でやたらになぐりつけた。兎は忽ち動かなくなつた。大崎は口や鼻から流れ出た血で紅く染つた長い耳を引つぱつて、枝の間から引きずり出した。彼はまだ時時、脚のぴくぴくする獲物を雪の上に横たへて置いて、雪で手の血を拭つた。それから、彼はだらりと伸びた獲物をぶらさげて小屋へ戻つて來た。

「御馳走だぞ。兎をとつて來た。晩に煮て食べるんだ。正月の大御馳走がやつて來た。」

と獲物をお捨に見せびらかした。

「珍らしいとと。ここは、兎が澤山ゐるんだかしら。すまんけど、拵へてきてければいいなあ。」

とお捨が言つた。大崎は庖丁と鍋とを持つて、雪の小徑を澤の流れへ下りて行つた。そこはこの小屋にとつては、井戸端であつた。子供たちは雪靴を履いて珍らしそうについて來た。大崎は獲物の皮を剝ぐと、それを傍の雪の上へ置き、肉と骨をぶつた切りにして鍋へ入れた。生々しい血が流れの緣の雪を染め、子供たちには不氣味な見物であつた。

「今夜は、うんと食べさせてやるぞ。兎の肉だ。ほつぺた落ちるほどうまいぞ。」
と大崎は子供たちに言つた。獲物の作りが濟むと、大崎は肉の盛りあがつた鍋と、剥いだ皮をさげて小屋へ戻つた。
「かなり大きな毛皮がとれたぞ。お祖母の、ねんねこに着けるやうにすればいいなあ。」
と言ひながら大崎は、その生々しい皮を小さい又木に張りつけて、それを煙の來る爐の上の棟木に吊り下げた。
兎の肉を盛つた鍋が焚火にかけられた。併しこの大御馳走のためとは云ひながら、砂糖や醤油を思ふやうに使ふことは出來ず、ほんの、ちよつぴりの黒砂糖と醤油とが入れられたに過ぎなかつた。それでも獲物が煮えるにつれて、五臓六腑を、でんぐりかへり、やたらに、唾液の泌み出る、うまさうな匂ひが、むんむんするほど小屋にこもつてきた。厩の北星が、ひどく地面を蹴る音が、どしんどしんと響いた。
「北星にも御馳走がわかるんだらうか。やたらに地ば蹴るでないか、可哀想に。」
とお種が言つた。
「やつぱり、いい匂ひがするんだべもの。猫なら骨をやるんだが、馬は骨を食はんものなあ。秣をくはせてやれよ。秀。」
と大崎は言つた。秀造は厩へ立つて行つた。
「兎が澤山ゐるやうだつたら、こんど捕まへたら飼つて、仔ば殖やしたらどうだべさ。兎と雞

を飼へば、錢になるし、いいと思ふけどなあ。」
とお捨が言つた。
「そうするべよ。だけど、餘り多く飼ふと冬の食べものに困るぞ。尤も、畑の作物がとれるやうになれば、その心配はないけどなあ。」
と大崎が言つた。
やがて、獲物は煮えた。ぶつた切りの肉と骨とを鍋からとつて默りこくつて食べる樣子は、餓え切つた悪鬼がやうやく食にありついたやうであつた。暗い小屋の中は、兎肉の煮えたぎる匂ひと、湯氣と焚火の煙とで、まるで人間の棲家とは思はれぬ程、陰慘であつた。老婆も、子供も、男も女も、餓鬼のやうに、貪り食べた。
便箋に月日を書きつらねて作つた暦の上で松の内七日が過ぎると、急にひどい寒さが襲ふて來た。然もその寒さは、ちつとも、ゆるむといふ隙がなかつた。それを眞先きに感じとつたのは、祖母のお若で、次が母親のお種であつた。
「急に凍れがひどくなつたが、もう寒に入いつたのだのう。骨の芯まで凍れがしみ徹るものの
う。」
と祖母が言つた。小屋にしみ入る寒氣は、焚火位では凌ぎ難かつた。大崎は家族七人がはいられるやうな炬燵櫓を白樺の木で造り、ひどく、しりもりのする鍋を一つ火入れに下ろして、日夜、炬燵をかけることにした。それで薄い貧しい布團も溫つて、綿がふくらみ、身體も溫まるこ

とが出來た。祖母は小便に立つほかは、夜も日も炬燵にもぐり、それが、いつの間にか一日の多くを寢て過ごすやうになつた。始めの内は誰も氣がつかなかつたが、或る日、ふとお種がそれに氣づいて言つた。

「お祖母は、どこか惡いんではないべか。此頃、毎日炬燵で寢てばかりゐて、なんだか、元氣がないやうだけど。」

そう云はれてみると、此頃は口數もずつと少くなり、しよんぼりと元氣がない樣子をしてゐるやうに思はれた。

「耄碌かな、齡が齡だからなあ。しかたがないなあ。」

と大崎は心の中で思ひながら、改めて老祖母の根株のやうな小さい姿を見つめた。

「併し今ここで死なれたら困るなあ。燒場のないのは、しかたがないが、お經あげて貰ふ坊さまもないし、何から何まで自分一人でやらなければならぬなあ。」

と心の底で秘かに思つた。併し又、心の奥のある、暗い處では、

「これが壽命なんなら、しかたのないことだ。醫者に見て貰ふことの出來ないのは、氣の毒だけれど、ここには醫者がないんだから、仕方がない。一生の不運だと思つて、あきらめて貰ふよか、しかたがない。ここで、こんな貧乏して死なすつもりではなかつたんだけど。」

と思つた。しかし又、心の隅の別の處で、

「嘘云へ！　こんな處へ年寄をつれて來いば、すぐ命とられて終ふのはわかりきつてゐたでな

いか。虹別にゐる中に、死んでくれれば、いいと考へたこともあつたでないか。それを鶴が見られるつて、だまして連れて來たんではないか。」

と嘲り呟くものがあつた。

「お祖母、元氣出さんといかんよ。雪がとければ、すぐ開墾始めるんだし、鶴も飛んでくるからなあ。」

と大崎は言つた。

「鶴のことなんか、おら、もうどうでもいい。この凍れ方のひどいので、ここも虹別とおんなじことではないかと、それだけが心配でなあ。この凍れ方ば、お前たち、そう思はんかのう。」

と祖母が言つた。

「北海道だもの、この位の凍れは心配ないさ。それに、寒中に、うんと凍れると、畑に蟲が湧かんからかへつていいんだよ。今年はきつと豐作だと思ふよ。それに、もう、豐作がまわつて來ていい年まわりだし。」

と大崎は言つた。

「來年、來年つて、なんぼ太陽樣にだまされたことかのう。」

と祖母は、かぼそい聲で、うらめしそうに言つた。

「虹別にゐた時みたいな弱音吐かないでけれよ。ここは新しい土地だから、心配ないよ。雪の中で心配してゐたつて、なんにもならん。雪がとけて、土が出たら、何にもかも、よくなるよ。」

と大崎は遂に、むしやくしやして、荒々しく言つた。彼はそんな時には、すぐ藁を打つか、裏の山林へ伐採に出かけて、氣晴らしに仕事をするのであつた。併しこの時は、吹雪であつたので、藁を打ちつづけた。木槌で藁を、とんとんと打つ間に、彼の氣持ちが次第にほぐれて來た。

寒さと凍れとは、少しのゆるみもなく、つのつて來るのが、働き盛りの大崎にも、はつきりとわかつた。大崎にも、これはただ事でない凍れだと氣になるのであつた。裏の山には、見る見る雪が降り積み、澤の向ふに擴がつてゐる曠野は、蘆や低い木は丈を沒し、一面に鋼のやうな鋭い感じの雪原に化し、處々の丈高い老木や、川緣の粗林なぞが、小さい陰影のやうに眺められるに過ぎなかつた。この酷寒の冬のさなかに在つては、大崎のおがみ小屋なぞは、木蔭の小さい笹むらにも及ばぬやうに見えた。この憐れな人間の棲み家だけをめがけてゐるやうに雪と寒さが交互に攻め襲ふて來た。さうしてその間に吹雪が作つた。

雪の降り積む日は心持ち寒さがゆるむが、その後に激しい吹雪が襲ひ、積つた雪に吹き溜りを作り、小屋を吹き埋めて終ふことが屢々であつた。吹雪が鎭まると曠野の上の空は靑く冷めたく晴れ渡り、肉を刺し、骨にしみ込む凍寒が迫つて來た。そんな日には、榾火に面する側だけが、やや暖かくて、頸筋から背腰へかけて、しんしんと凍みこむばかりか、榾火も火勢があがらなかつた。寒さのために、ランプの灯がちゝゝゝと鳴つて消えることがあつた。ひどく凍る日は、大體に空が晴れ、雪に覆はれた曠野が、冷たい冬の太陽に徐々に照らされてくると、やがて風が曠野に起り、それが靑空を白つぽく曇らせ、やがて雪を降らして來た。そう云ふ變化のほかに、

執拗な冬空は灰黑色の雪雲や、どす黑い風雲を湧きたたせ流動させた。虹別原野に劣らぬほどの、ただならぬ冬の積雪と寒氣とが、この新しい土地にみられるのであつた。

大吹雪が、充分に凍りついた曠野の上に襲ひ、それが晴れ上つた朝、大崎は曠野の川緣に置いて來た馬橇をとりに北星をひいて出かけた。雪が風に吹き拂はれて、露出した土はがちがちに凍つてゐるが、蘆の密生したところは、吹雪に吹き倒された蘆が厚く地上に寢た上に雪が降り積んだので、ぼさぼさと北星の脚にからむだ。併しこの曠野を踏み分けて入地して來た時からみると、まるで別の曠野を歩いてゐるやうに樂であつた。大崎は北星の背にまたがつて方角を見誤らぬように氣をつけてさへゐればいいのであつた。空氣は冷く鼻孔を刺し、鼻毛を凍らすほどであるが、淡いながら冬の太陽が彼の右頰、右肩をほんのりと暖め、やがて、それが背中に廻つて來た。きらきらと輝く新しい雪野原に淡い黃色や黑々とした褐色の草木が點々とし、處々に大きい枯木が突つ立つてゐたり、灌木が粗らに林をなしてゐた。大崎はこの眞白い、廣い赤裸々な曠野を馬上から眺めて、久しぶりに晴れ晴れした心地にひたつた。何かしら、ぼうつとした恍惚さにひきこまれる氣持ちであつた。彼はかつては難澁した濕地も川も凍つた上に雪が積つたので、樂々と越すことが出來た。彼は覺えのある川緣に着いてから、目標のために繩切れを枝先きに結びつけて置いた岸の灌木林を探して、川上へ行つた。川緣に沿ふてゆくと、暫らくしてそれが見つかつた。雪を冠つた繩切れが、彼を待ちあぐねてゐたやうに見えた。雪と氷で閉ざされてゐる淺瀨を渡つて、その灌木林に着いた。彼は手斧で枯枝を伐りとつて焚火を起した。秣の入つてゐ

る叺を繩で北星の首へ吊してやつた。焚火に當りながら握飯を嚙つた。ひと休みすると、馬橇の上に積つた雪を掻きのけ、轅を北星につけた。北星に來かせると、橇の辷り金が土に凍りついてゐて、三、四度目に、がりがりと土を離れた。

彼は、併し空橇をひいて戻るといふ馬鹿はないと考へた。日暮れまでには大丈夫戻れるので、少しでも薪木を積んで戻ることにした。彼は灌木林に入つて、手斧で伐れる手頃の木を伐り倒して薪木を造つた。さうして、それを橇に積み、自分は薪木の中に腰をかけて歸途についた。樣は心地よく辷り、日沒近くの寒さが、ひしひしと迫つて來るにつれて、北星の歩みは進んだ。曠野を一直線に横切り、西をさえぎる山の鼻に近づき、林をぬけて小屋のある澤についたのは、もう黄昏時であつた。

「お父もどつた。澤山、薪木つんで戻つた。」

と子供たちが騒ぎ立てた。

「道、難儀しなかつたかね。」

とお種がいたわるやうに言つた。

「凍れて、雪が丁度いい按配に降つてゐたで、街道歩くみたいに樂であつた。時間があつたから、薪木とつて積んで來た。」

と大崎は元氣に答へた。

「道がいいなら、雪の深くならんうちに、馬橇で塘路まで麥るもの買ひに行つた方がいいな

あ。」

とお種が言つた。

「今がいいか、それとも堅雪になつてからがいいか。」

と大崎は答へた。大崎の考へでは、なるべく冬のうちは、手もとの金錢を使ひたくなかつた。必要のもの、欲しいものは、これからの開墾にも生計の上にも、ありすぎるほどあつた。併し一番に、彼に心配なのは、何んといつても、食物であつた。出來るだけ食ひつなぎ、生き延びなければならぬ。雪が融けたら、蕗のとう、蕨、片栗を摘み取ることを忘れてはならぬと絶えず思つてゐた。それほどであるから、彼は出來るだけ辛棒して兎に角、この冬を越さねばならぬ。それには金錢に手をつけてはならぬと心に決めてゐた。

「堅雪になつてからにするさ。それまでに木炭と薪が少しはたまるから、それを持つて行つて賣つて、それで要るもの買ふさ。そうせんと、虹別から持つて來た錢さ手をつけて減らして終ふことになるからなあ。」

と、分別深さうに言つた。そう言はれてみれば、女たちにも無論、異存はなかつた。大崎は冬の間に早く金錢になる薪伐りと木炭燒きに精を出すのであつた。

或る日、裏の山林に入つて伐採し、日暮に近づいたので小屋へ戻ると、スキーを履いた一人の男が、よろめくやうに、重い足ゞりで小屋の建てられてゐる丘の上を、小屋の方へと近づいて來るのを見つけた。大崎は小屋の前で、不審と恐怖につつまれて、その近づいて來る男を見つめて

ゐた。この男は大崎の姿を見ると、スキーの杖をふり上げたり、幾度も頭を下げたりしながら近づいて來た。そうして、大崎の近くまで來ると、

「救けて下さい。路にまよつたのです。」

と喘ぎながら言つて、雪の上へ、もろくも、くづれ折れさうになつた。大崎は手を貸して、男の身體を支え、スキーを脱がせて小屋につれ込んだ。

「路に迷つたんだとよ。」

と大崎は言ひながら、男を爐端に坐らせ、手や足を、ごしごしとこすつてやつた。

「顔や耳をごしごしこすりなさい。凍傷にやられると困るから。お捨、熱い鹽湯を一杯、のませるといい。腹はへつてゐないかね。」

と大崎は言つた。幸ひ、凍傷にやられてゐる處もなく、熱い鹽湯をのむと元氣づいた樣子であつた。男は、何も食べたくないと言つた。

「濟みませんがスキーを家の中へ入れて置いて下さい。それから今日一晩だけ泊めて下さいませんか。僕は札幌から來た學生なんですが。」

と男は言つた。そう言はれて、よく男の顔をみると、山男のやうに髪も髭もぼうぼうに伸びてゐる、雪燒けした顔ではあるが、人柄な若者に相違なかつた。大崎の不安も恐怖も警戒心も次第に解けて來た。若者はリュックサックから煙草とキヤラメルを取り出して、煙草を大崎にすすめ、キヤラメルを子供たちに頒けた。子供たちは、びつくりした顔をして受取らうとしないので、お捨

がそれを貰つて、分けてやつた。若者が、ぽつりぽつり話し出した處では、この釧路原野のチルワッナイ附近は丹頂鶴の棲息地だと聞いてゐるので、スキーで阿寒方面へ遊びに來たついでに、それを見て釧路へ出ようと思つて、塘路から曠野をつつきり、西の尾根を傳はつて南へ下つて來たが、距離を見誤つて日暮れになつて了ひ、野宿の用意がないので危い目にあつたのだと云ふことであつた。

「丹頂鶴が越年して蕃殖する土地といふのは、日本中、此處だけだといふのですが、この邊で鶴を見たことがありますか。」

と學生は大崎に尋ねた。

「夏には、飛んでゐるのを見たことがありますが、それはもつと原野の方でした。此處へは、つひこの冬に入いつて來たので、まだ一度も見たことがありません。」

と大崎は改まつた、ぎごちない言葉で答へた。

「この澤は地圖では、どの邊になるのかなあ、鶴の棲んでゐるのは、チルワッナイといふ濕地だといふことですけれど。」

學生はそう言つて、リュックサックから地圖を取り出して展げた。それは陸地測量部の五萬分の一の地圖であつたが、大崎にはただ細い線でくちやくちやと、こまかく書かれた大きい一枚の紙面に過ぎず、どういふやうに見ればよいのかも見當がつかなかつた。

「これが釧路です。チルワッナイといふのは、この邊のことです。この家のあるのは、この邊

でせう。そうすると、釧路までは、地圖の上では、眞直に計つて、三里半位でせう。四里はないと思ひます。天氣さへ、よければ釧路まですぐなんですが。地圖の上で見ると、ずつと釧路まで、一帶に濕地と草地の平野つづきですね。」

と學生は指先で距離を計りながら、造作もなさそうに原野の地勢のことを言つた。

「四里位ひのもんですかねえ。釧路へはまだ出たことがないですが、それ位ひのもんですかねえ。」

と大崎は、驚ろきと照れ隱しの混つた妙な目つきをして言つた。彼は明らかに心の底で、狼狽してゐたのであつた。彼は廣い曠野の地に潜みかくれてゐるもののやうに安全感を滿喫してゐたのに、その廣い曠野が曝露されるやうに、あからさまに、且つこんなにも小さく、一枚の紙の上に樂々と載つてゐるのが恐ろしかつた。彼は恰も地中から掘りかへされて、曠野の地上へ投げ出された野鼠の仔のやうに自分を感ぜずにはゐられなかつた。彼は思はずも、物におびえた眼を以つて、學生の顏色を窺つた。併し學生は大崎の胸中の不安に氣がつかなかつた。學生は、未だ興奮が鎭まりきつてはゐないが、次第に疲勞が直つて來ると、おがみ小屋の內部の甚しい困窮さにやうやく氣がついて來たと見え、何かにと珍しそうに、且つ驚きと同情とを以つて、大崎に尋ねるのであつた。それは大方、大崎の農民としての生活のことであつた。大崎の答は勿論、曖昧であつた。彼は慌かに、數年前に虹別に移住して來たのだが、そこは囚作地で、とても末の見込が立たぬので、その土地を離れて新たに此處に移つて來たといふだけであつた。學生は、新開その

他で、囚作を聞き知つてゐて、大崎たち農家の困窮に心から同情するといふ意味の言葉を繰りかへした。併しそう云ふ言葉を面と向つて聞かされれば聞かされるほど、大崎は返事に窮した。いくら同情されてみても、腹の足しにはならぬばかりか、ひと言ひと言、彼の胸中の最も痛い祕密に、慘酷に觸れられるやうな氣持が、つのるのであつた。自然、彼はそらぞらしく、學生の言葉を聞いてゐるようになつたのだが、ただ一つ胸の躍るやうな、新しい知識を獨り樂んでもゐた。それは、ここから四里ほど行くと釧路だと云ふことである。然も、全く平地の四里なのである。彼には、突然、好運が鼻つ先きにぶら下つたやうな心地がした。

「釧路さ四里位ひだつてことなら、雪でも融けたら一度釧路さ出てみることにするかな。どつちの方角に當るですか。」

と大崎は何氣なさそうに言つてみた。學生はリュックサックの中から、磁石を取り出して南の方を指した。

「この方角です。南に當りますから。」

大崎は、

「この方角ですか。」

と荒くれた手を擧げて、深くうなづいた。

「明日の朝、裏の山へ登つて、望遠鏡で見てみませう。はつきり見當がつくでせうから。」

と學生は言つた。

闖入者でもあり、好運の神でもあるやうな學生の不意の訪れに、曠野に隱れ棲む孤獨な一家は、物珍らしさと、物おぢした心持ちとで思はず夜ふかしをした。そうして、大崎が焚火を絶やさぬ爐端で、大崎と學生とは殆んど、ごろ寢の、ぞくぞくと冷えて來る一夜を明かした。

翌朝、薄暗く、寒く、煙い小屋で貧しい朝餉を終ると、學生は五圓紙幣を一枚、ちり紙に包んで名刺と共に大崎の前へさし出した。

「お蔭様で命拾ひをしました。僕は札幌の大學の學生で、こういふ者です。今、これだけしかお禮出來ませんが、僕の志として受取つて下さい。札幌へ戻つたら、改めて手紙でお禮をしたいと思ひます。ここの土地とお名前をどうぞお知らせ下さい。

學生はひどく固く、改まつた挨拶をした。大崎はびつくりして學生の顏を見つめてゐた。手は、紙包みに觸れることさへ、とても出來なかつた。

「おらさ、なにも、そんな心配しないで下さい。道に迷つた人、泊めるのは當り前のことだもの。お禮なんかいらない。」

「いや、そう云はないで、取つて下さい。そうでないと、僕が困りますから。」

學生は、再び紙包みを大崎に突きつけるように繰りかへした。大崎の顏色、特に彼の眼と口許とは胸中の動搖を表はして來た。そうして、遂に彼の荒くれた掌の中へ、紙包は押しこまれた。大崎は、もう斷らうとはしなかつた。學生の顏にも安堵の樣子が見えた。彼は手帳を出して、大崎の所番地と名前とを尋ねた。當惑の色がさつと大崎の顏に上つた。

「此處は何んといふ土地ですか。地圖で見るとクチョロブトあたりのやうですが。」

大崎には、クチョロブトなぞといふ地名は全く初耳であつた。そういふ名の土地に自分が住んでゐるのだらうかと思ふほど不思議であつた。併し、自分が現にかうして小屋掛けして住んでゐるからは、その土地の名を知らぬとは言ひ得なかつた。その上、彼の住む土地が世間の人々によつてあばかれ、知られることはひどく怖ろしかつた。

「そんなやうに、皆が言つてゐます。廣い原野の中のことで、誰も、しつかとした處はわかりませんけど。」

これが彼の、せい一杯の返答であつた。

「それから、お名前は何んと云はれるのですか。」

この問ひには、大崎は全く、巡査の前に引き出された恐しさそのものを、全身に感じた。然も相手の若い男は手帳を出して、彼の返事を待つてゐるではないか。

「お名前は、何んと、おつしやるのでせうか。」

「大崎……常造、といひます。」

彼は、とぎれとぎれに、やうやく答へた。

「ぞう、は、藏ですか、三ですか、造ですか。」

「造です。」

大崎は何んで、そんなに詳しく尋ねるのかと、どぎまぎしながら、やうやく答へた。そうし

て、ほつとした。學生は出立の仕度が出來ると、釧路の方角を敎へてあげるから一緒に裏山へ登らうと大崎にすすめた。

「今日は天氣がいいから、望遠鏡で釧路が見えるかも知れませんよ。」

と學生はスキーを履きながら言つた。大崎はかんじきをつけた。秀造も、虹別原野から持つて來た、ただ二枚の板片のやうな小供用のスキーを、藁靴にむすびつけた。三人は思ひ思ひのコースを取つて林の中を拔け、裏山へ登つた。其處は、原野の上へ、幾本もの脈のやうに、伸び展がつてゐる廣大な段丘の、或る一つの鼻つ端であつた。雪に深く覆はれた林の樹間から、一面に展がつてゐる雪の曠野が、青空の下に、きらきらと輝いて眺められた。間もなく彼等は段丘の南端の頂に來た。彼等の足下から、眞白に輝き渡る雪の海が實に恐ろしく涯てなく續いてゐた。實際には、東と西とに、かなり高い山脈がある筈ではあるが、この廣漠たる白い雪の海原の前には、せいぜい數寸の高さにしか思はれぬのであつた。背後の北方には、重なり合つた山脈の上に、稜線の險しい、雄雄兩阿寒の氷雪の山頂が、眞青な冬の空に眞白に眺められた。

學生は、ストックを雪に突つ立てて、磁石をのぞき、それから、望遠鏡を取り出して、遮るもののない、眞白な南方の地平の彼方を眺めた。

「見える、見える、あれが釧路だ。工場も街も、煙も見える。」

學生はそう言つて、望遠鏡を大崎に渡し、その方角を指した。大崎は生れて始めての望遠鏡を眼に當て、とまどひした。

「見えるでせう。あれが釧路の町です。」

と學生は勢よく言つた。併し、大崎は、だまつてぢつと眼鏡をあててゐるだけであつた。

「見えませんか。ぢあ、目にあてたまま此處のところをどつちかへ廻して下さい。度を合はすとよく見えますから。」

大崎は敎へられる通りに、眼鏡の度を加減してゐると、急に眼前が明るく、はつきりし出した。ただ一面に眞白い野原だと思つてゐた其處に、雪の明暗があり、小さい林や沼なぞの陰影が、くつきりと浮んで見えた。さうして眞白な曠野と眞青な大空との境に、灰黑色の街が、板片のやうに平べたく横たはり、燐寸の先ほどの煙筒から、吐き出されてゐる煙が薄く眺められた。彼の全身をぎくつと搖り動かす程の感動に襲はれた。彼は雪の中に根を下ろしたやうに凝然と突つ立ち、身動きもせずに眼前に擴大された遠い狹い世界をむさぼる如く覗き込み、ぢつと見据えてゐた。

「見えたでせう、あれが釧路の町ですよ。天氣さえ良ければ、此處からわけはありませんよ。」

「うむ……。」

と大崎は、喚くやうなわけのわからぬ返事をしたままで、猶ほも覗きつづけてゐた。さうしてやうやく眼を離すと、

「此處から何時間位で行かれるでせうか。」

と尋ねた。

「そんなにはないと思ふけど、まあ四里あるとして、スキーなら一時間半あれば、大丈夫、ゆつくり行けますね。」

「では、がんじきで行つたら、一里一時間と見ても、四時間あれば行けますね。」

「それは大丈夫でせう。あんた方の足なら、二時間半で行けるでせう。堅雪になれば、もつと樂でせう。」

學生は大崎から望遠鏡を受取つて、再び平野を熱心に眺め渡した。自分のコースを考へてゐる樣子であつた。

「途中に、クッチョロ川が一つ厄介かも知れないけれど、雪が深そうだから、一直線に釧路へ向つても大丈夫だらう。」

と學生は獨り言いつて、望遠鏡を仕舞つた。

「それでは、僕はこれから出立します。どうも色々と有難う御座いました。」

學生は黑羅紗のスキー帽を脱いで禮をした。大崎は口ごもつたまま、頭をぴよこんと下げた。學生は林の中の枝を避けながら、徐々に傾斜面をスキーで辷りながら下りて行つた。やがて、彼の姿は林の中に見えなくなつた。

大崎は放心したやうに、併し他方では、驚くべき熱心さを以つて、前方の原野の涯を眺めてゐた。彼の肉眼には最早や白い水平線上に眺められた釧路の町は見えなかつた。眞白い雪の曠野の末にかき消すやうに、消え隱れて了つた町は、恰も蜃氣樓のやうな、幻の町に化したのであつ

た。たつた今、この眼でしかと見た筈の町は、眞實に此の曠野の上に在るのであらうか。たつた今しがつた、それを見たのだが、數分後の今も猶ほそれは在るであらうか。併し今は、何も見えないではないか。風のやうに吹き去り、雲のやうに飛び去り、雪のやうに消え去つたのではないか。それはあの不思議な闖入者が妖術を以つて見せてくれた夢か幻ではなかつたのか。併しそんなわけがある筈はない。この眼でしつかりと見たのだから、家も工場も煙筒も煙までも見えたではないか。この方角に釧路の町があるのだ。それは見えなくとも、しつかと在るのだ。彼はそう思ひながら、じつとその方角を眺めてゐた。すると、次第に、自分の氣持が生き生きと動き出してくるのを緊々と感ずるのであつた。

「秀、よく覺えて置けよ。こつちの方角に釧路の町があるんだぞ。」

と大崎は傍の秀造に敎へた。秀造は、ただ怪訝な顏をして肯いてゐた。

四季の變化にあはただしく見舞はれつつ自然の眞只中に生き棲む者は、その推移が微細に渡る點まで直ちに感得するやうに馴致されてゐる。彼等は世事にはひどく鈍感ではあるが、自然の息吹きには實に鋭敏である。彼等の皮膚は寒氣の峠がいつ越されたかを直ちに感知するのである。彼等の耳は、寒氣の音が徐々に遠ざかるのを聞きわけるのである。彼等の眼は空の色に、木の膚に、雪の面に、雪の色に、冬の老ひ行きつつあるのを、いち早く感じ出すのである。

「どうやら、冬が越えられそうだ。」

と祖母のお若のつぶやく聲は、祖母のみならず、一番弱少のお常に至るまで大崎一家七人の生命がこの悲慘な冬を越して、もう少し生きのびられそうだといふ眞實の生への執着と希望との、共通の呻き聲なのである。さう云ふ、微かな希望の仄かな光明が、老ひたる冬の蔭から、徐々に、極めて徐々に春を近づけようとしてゐるのであつた。

苦しみ拔きつつある生命の本能は、その仄かな光りと暖かさを奪ひとらうとして待ちかまゐてゐるのであつた。

「もう一度、地面が見られるのう。」

と祖母はつぶやいた。この言葉の含蓄する無數の且つ無限の意味を思へ。この言葉を聞いて、お種も常造もお捨も、大粒の涙を垢に汚れた頰に、ぽろぽろとこぼして、咽び泣くのであつた。

「よく、生きて來られたものだのう。」

と祖母は續けて、つぶやくのである。彼等は今やただ言ひやうのない生命の不思議さに當面して、恐れ、驚き、且つ慴伏するばかりであつた。

かくて、いやしくも事自然に關する限り、冬が老ひ、春が近づいて來たのである。三人の子供たちにも、實に樂しい遊び友たちが現はれて來た。それは小鳥らであつた。

大崎一家が此處へ移つて來た晩秋、初冬の候には、裏山の林や、原野の林や藪原に隨分色々な野鳥があつた。大崎は自分の知つてゐる懸かの鳥の名を子供たちに敎へた。コシキリやミソサザイ

は原野の藪原の蔭に潜山ゐた。裏山の林にはツグミやフクロが夜鳴きし、ヤマセミやケラの類がゐた。併しこれらの敏捷な鳥や、强い鳥は子供らの手に負へなかつたのみか、雪が深くなるにつれて、野鳥は影も見せなくなつて了つた。それが、陽光にやや暖みを帶び、積雪が水ミしく、しつとりとなつて來ると、小屋の周圍の木の枝にコガラやベニガラが飛んで來て、小さいが、澄んだ鳴き聲で遊びまわつてゐた。この小鳥らは殊に、厩の入口に降りて來て、そこに散らかつてゐる餌をあさるのであつた。子供たちは父親に、その小鳥を捕へてくれとせがむので、笊を繩で吊して、その下に餌を撒き、小鳥らの集つてゐる上へそれを落しかぶせて、ベニガラを三羽、捕へてやつた。父親は、裏山から、笹竹を刈つて來て、それを割り、不細工ながら鳥籠を拵へて子供らに與へた。子供らは有頂天に喜んで、殆ど一日中、鳥籠を圍んでめいめいの所有物を見守つてゐた。全く同じやうな三羽のベニガラも、子供らには、實に判然とした區別があるものと見え、お互に自分の所有物を間違ふことはなかつた。子供らは自分の小鳥の餌を他のものが多く奪ふと云つて、小さい所有者同仕の喧嘩を引き起した。又。小鳥ら同志も、籠に馴れぬ間は、焦ら立たしげに飛び廻り、また互に相爭ふ樣子に見えた。

「そんなに、みんなで顏つけて、がやがやしてゐたら、いつまでたつても、鳥が馴れんから駄目だ。もつと、楕はんで、そつとして置いてやれ。みんなこつちさ來でゐれ。」

父親はそう怒鳴つて、やうやく子供らを鳥籠から引き離すのであつた。そうして小鳥らは先づ、徐々に相互に馴れ、鳥籠に馴れ、彼等の所有者たちに馴れつつあつた。そればかりか、この

一籠三羽の小鳥の存在は、この薄暗い小屋に云ふに云はれぬ、朗らかな生氣を與へてゐるのであつた。

「天氣のいい日には、籠を外へ出してやるといい。日當りのいい枝さかけてやれ。」

と大崎は誰にともなく言ふのであつた。慮が或る日、不意に慘劇が三羽のベニガラを見舞ふたのであつた。皆が晝食をしてゐると、いつものやうに戸外の日向の枝に懸けて置いた鳥籠のあたりに、けたたましい物音がするので、父親が戸外へ出てみると、一羽の猛々しいノスリが、鳥籠を、破つてベニガラを三羽とも喰ひ殺ろして了つたのであつた。血に染つた二羽のベニガラの死骸は融けかかつた雪の上に落ちて横たつてゐたが、一羽は、まだノスリの逞しい脚の爪の間に摑まれてゐた。

「ほうい、畜生。」

と大崎は、やにはに怒鳴ると、兩手で雪球を握つて、枝の上のノスリに目がけて投げつけた。ノスリはベニガラの死骸を鷲摑みから、ぽつたり雪の上へ落して羽音高く、林をかすめて飛び去つた。父親の怒聲で驚ろいて飛び出して來た子供たちは、あつけにとられて立ちすくみ、雪の上に落ちてゐる三羽の死骸を見つめてゐた。

「可哀そうなことをしたなあ。ノスリにやられてしまつたんだ。」

と父親は、いまいましそうに言つた。

「やられて了つたら、もう、しかたがない。焼いて食べてみるべ。」

と彼は更に言ひたしながら、雪の上から、三羽の死骸を拾ひ上げた。いづれも、ノスリの嘴の鋭い一と突きでやられてゐた。

子供らは、誰れからともなく、しくしく泣き出してゐた。お捨もこの騒ぎで出て來てゐた。大崎は、手にさげた三羽を見せた。

「ノスリにやられたんだ。しかたがないから、晩に小鳥焼きにすればいい。食べられるものを捨てるのは、いたましいからな。」

お捨は、だまつて、それを受取つた。

「泣くんでばない。ベニガラなら、また捕つてやるからな。」

と大崎は後をふりかへつて子供らに言つた。その時、いつの間にか舞ひ戻つて來た先刻のノスリの不逞不逞しい姿が、間近かの枝の上に見えた。大崎は、かつとして、雪球を投げつけた。

「畜生、また來やがつた。血の味、覺えやがつたな。」

大崎の幾つかの雪球と怒號で、やうやくこの魔の鳥は、すうつと林の中へ飛び隱れて行つた。

春が訪れて來たとなると、北國の原野では夜も晝も積雪が融けて行つた。氣溫と地熱と風雨とがそれを融すばかりではなく、春の雪解水が濕原を浸し、それがまた、急速に積雪を融した。併しクッチョロ川を初めとして數多の流れがあつても、曠野の水のみではなく、山々から融けて流れ込む水のおびただしい嵩を流し運ぶには充分でなかつた。曠野はたちまちに水脹れしたやうに、浮き上つて見えた。數多の流れが、無數の一時的の沼澤に連がり、そこは原野ではなくて滿

潮の下の淺瀬のやうであつた。こんなひどい出水を大崎は見たことがなかつた。一年かかつても、この水は吐けきれぬのではないかと思つて、思はずひやりとした。彼が最初に開墾しようと考へてゐた小屋に間近い平地も、雪融けの冷い水を湛え、いつまでも水の引ける樣子もなかつた。

ただ、彼の小屋を建てた地點は小高い丘の斜面になつてゐるので、その周圍は日當りもよく、早く雪が融けて地面が露はれたので、その邊の籔と粗林とを先づ開墾し、原野の出水の引けるのを待つことにした。

「籔を耕して置くのはいいけど、種子をおろすのは、よつぽど氣をつけて時季を見てせんと、又、雪にやられるかも知れんなあ。何せ、今年、初めての土地で樣子はさつぱりわからんし、世話やいてくれる人も、相談する人もゐないんだから。」

とお種がいつた。大崎も勿論反對ではなかつた。彼は、ただ自分の身についた經驗にすがつて、この新しい土地と、とつ組み合はねばならぬことを覺悟してゐるのであつたから、言はれるまでもなく、何くれとなく周圍の狀態に氣を配つた。それ故にこそ、原野の恐ろしい出水には、鄕里の洪水の時よりも、內心ひどく驚いたのであつた。彼の鄕里にも雪解けが田圃を浸すこともあり、幾年かに一度位ひ、出水に逢ふこともあつたが、それとは較べにならなかつた。また同じ北海道でも、虹別原野の雪融けとも同じではなかつた。虹別では雪融けは、かういつまでも地面を浸し置ふてはゐなかつた。そこは高原で、谷川もあり、土質が輕鬆であつたので地面の乾きも

早かつた。併しこの初めての新しい土地では、一面の濕原で、土壤は重粘であつた。土そのものが、自分から幾らでも水を吐き出すもののやうであつた。

「いつになつたら地面が乾くんだらう。」

と大崎は時折り獨り言をもらさずにはゐられなかつた。これまでの冬期間の全體よりも、土が現れ、乾くまでの日數が長く待ちきれぬ氣持であつた。全くそうなのだ。曠野を覆ふてゐた厚い雪の表面が、次第に輝やかしい反射を失ひ、灰色になり、水浪れになり、その下の土地の色や、水潦や沼地の青黑い色を漂はせ、枯草や枯木が生長するかのように積雪の下からむき出しの姿を現はして來て、曠野は至る處、再び冬枯のやうな荒涼たる陰影を作つた。處々方々に、殘雪や氷を融して浮かせてゐる沼澤が、その數と廣さを增し曠野を水漬けにすると、クッチョロ川は七めた多數の小さい泥川が、吐ききれぬ雪融けを流し出した。流れの岸の楊柳や白樺なぞの根は、根こそぎにされ、泥水は低い川岸を洗ひ浸して、小沼から小沼へと連なつていつた。そうして殆んど曠野の雪が消え去つて、去年の枯草が明るい黃色の曠野をとり戻しても、曠野を東、北、西へかけて遠く圍繞する山脈から流れて來る青黑い春の雪融水は、曠野にしみ込んでその土地を冷めたくするのであつた。

この春の出水は、新しい土地の開墾に、最初の鍬を入れようとしてゐる大崎一家に思ひがけない不幸を齎した。それは末娘お常の溺死であつた。それは次のやうに起つた。

三人の子供らは、曠野の雪が融け始めると、天氣さえよければ毎日、一日ぢゆう曠野に出て遊

んでゐた。そこは、丘の小屋の傍や、裏山の林よりも陽光が當つて暖かいばかりか、面白い遊びの種子が多かつた。川や沼には、田螺や泥鰌がゐたし、藪原の蔭にはヨシキリの古い巣が隱されてあつたり、裸の枝には、思ひがけぬ處に小鳥の古巣が見つけられるからであつた。殊に小沼のほとりの粗林には色々の小鳥の古巣が多く見つかつた。その不幸の訪れた或る日、お常は目ざとく小沼の縁の、こんもりと盛り上つた枯草の蔭にヨシキリの古巣を一つ見つけた。お常はひとりこをどりして、獲物をとらうとして、そのこんもりと盛り上つた枯草の處へ馳せつけた。すると、その枯草の根の塊は、ころりと、ひつくりかへつて、お常の足をさらひ、彼女は、つんのめつたまま小沼へはまつて了つた。うつぶせになつて陷ちたお常の兩手兩足は泥にはまり、顏と頭を泥水に漬けたので、やうやく泣き叫んだ時には、幾度か既に泥沼の中で、もがいた後であつた。少し離れてゐた、兄の秀造と姉のお松とが、そこへ馳せ寄つたが、二人ともあつけにとられて、どうにも出來なかつた。秀造は急に小屋の方へ走り出した。それについて、お松も馳け出した。枯草の中を、やたらに走りぬけてゐるうちに、お松は泣き出した。その聲で一度ふりかへつた秀造も、やがて又泣きながら走り出した。小屋では入口に祖母が獨りで、日向ぼつこをしながら、居睡りをしてゐた。大崎は母親と妻と三人で、此の春、眞先きに火入れをしようとする裏の斜面で、冬中に伐つた木の後かたづけをしてゐた。秀造とお松とだけが、泣きじやくりながら息せき切つて走つて來て、祖母の前でただ泣いてばかりゐるので、祖母は、はつとお常のことを感じたのであつた。

「お常はどうした。」

「沼さはまつて、あつぷ、あつぷしてゐる。」

併し泣きじやくりながら言ふ子供の言葉は、耳のめつきり遠くなつたお祖母には、よく聞きとれなかつた。

「何んだつてか、大きく、はつきり言へ。」

「沼さはまつて、あつぷ、あつぷしてゐる。」子供は兩手をひろげて身振りをした。祖母はびつくりして、顏はさつと青黃ろくなつた。

「父つあん、大事だ。早く行つて見てけれ。お常、沼さはまつたつてさ。早く行つてけれ、大事だ。大事が出來たあ。」

老婆は、よろけながら、叫んで裏の林へ馳けて行つた。

「父つあん。お常こと、沼さはまつたつてさあ。早く賴む、賴む。」

と老婆は叫びながら、腰がぬけたやうに、べたべたと地面へ膝をついて了つた。大崎と妻と母親とは、びつくりして馳け出した。

「お母あ。お祖母ば賴む。お捨、一緒に來い、遲れるな、秀、どつちの方だか敎へれ。うんと走れ。」

大崎の韋駄天に、無論、秀造も妻も及ばなかつた。雪融水を充分に吸ひこんでゐる濕地に足がとられそうで重かつた。大崎は時々、秀造をふりかへつた。秀造は後れて走りながら、方角を指

した。妻のお捨は、それよりもずつと遅れて、つんのめりそうになつて喘ぎながら歩いてゐた。自分では懸命に走つてゐるつもりなのだが、怖れと勞れで足は進まず、辛くも引きずつて歩むに過ぎなかつた。

大崎はやうやく小沼の縁に辿りついた。白い、冷い水が湛えてゐた。彼は一瞬のうちに小沼の全部を見渡したが、彼の子供を呑んだ小沼は平然と冷やかに横たはつてゐるのであつた

「秀、早く來い、どつちの方だ。」

と大崎はもどかしがつて、遅れて走つて來る子供へ怒鳴りつけた。秀造は走りながら、右手の方を指した。大崎は小沼の縁に沿ふて小走りに右の方へ廻つた。彼の目は小沼の岸を追ふて行つた。やがて彼の目は、岸近くに、もつくりとした黑い土塊のやうなものを見つけた。沼の縁近く走り寄るにつれて、黑い物の中に紅い色が目にうつつた。彼はぎよつとした。彼は、やにわに小沼の中へ飛び込むと足はずぶずぶと膝までぬかつた。泥水の冷さが、つうんと頭まで背骨を走つた。彼は泥沼の中へ、うつ伏せになつて浸つてゐるお常を背後から抱き上げて岸へ上つた。そうして、泥水にまみれたお常の身體を、枯葭の上に横たへ、やたらに搖すぶりながら、お常の名を呼んだ。そこへ、やうやく秀造が馳けつけた。

「秀、枯草あつめて火つこ焚け。暖ためてやるんだ。」

秀造は一生懸命に、枯葭を小さい手で折り集めた。併し大崎は懷に燐寸を持つてはゐなかつた。彼は、この長い冬の間に、煙草を殆んど吸ひきらしそうになり、且つ燐寸も殘りすくなになつ

たので、懷中には用意がなかつたのであつた。

「ちえつ！　燐寸がない。」

彼は俄然、一切の救ひから見放されたやうに頭と腰がぐらぐらし、眼の前が眞暗になつたやうに感じた。彼は、土の上へ膝をつき、お常の泥臭い身體を着物ごと、もみ搖すぶつた。彼は驚き狼狽てたからではなく、全くかういふ場合の處置を知らなかつた。彼は、狂氣のやうに、お常の名を呼びながら、仰向けに寢かされた溺死者の身體を搖すぶるに過ぎなかつた。秀造はまだ一生懸命に枯葭を折り集めてゐた。そうしてゐる處へ、お捨が、息せき切つて、蒼白な顏をし、流れおちる青黑い汗を拭はうともせず、やうやく馳けつけた。お捨は、

「お常。」

と叫んだまま、横たはつてゐる、小娘にしがみつき、わつと泣き出した。

「燐寸もつてゐないか。燐寸だ、燐寸だ。」

と大崎は怒鳴つた。お捨はお常の身體にしがみついて、喚き泣きながら、ただ頭を横にふるばかりであつた。

「持つてゐないのか、馬鹿。」

と大崎は大きい聲で、いまいましげに怒鳴つた。

「燐寸とつて來るから、番してゐれ。」

と言ひ棄てて彼は小屋の方へ走り出した。彼は、泥濘の濕原をどう走つて來たか、わからなか

つた。彼は息せき切つて小屋へ戻ると、祖母、母、お松の三人は、おびえきつて、蒼ざめた顔をして入口の外へ出て、茫然と佇んでゐた。大崎の馳けて來たのを見て、彼等の顔はさつと一層蒼ざめた。

「燐寸早く出してけれ。暖めてやるんだから。」

と大崎は、はあはあ言ひながら怒鳴つた。

「息ふきかへしたか、水ば吐いたか。」

とお種が尋ねた。

「いや、早く、燐寸頼む。」

と大崎は言ひ棄てて、小屋へ飛び込むと、臺所で杓子で水をがぶがぶと飲んだ。そうして、お種から、燐寸を受取ると、後をも見ずに飛び出した。祖母と母とお松とは心配のいつ杯な眼で彼の駈け飛んでゆく後姿を見送つた。大崎は一切の望みをかけた燐寸の小箱を右手に堅く握つて、無我夢中に走つた。彼には、どれだけかかつて、どれだけの道を走つたか全くわからなかつた。

併し小沼のほとりの枯草の上では、お捨は永遠の眞只中に取り残されたやうに、待つても待つても時間が過ぎてゆかぬ思ひに摑まれてゐた。お捨には、夫が燐寸を持つて再び戻つて來る時までが、時間に對する意識の全部なのであつた。その時まで、時間はその歩みをぴたりと停めて終つたも同樣なのであつた。或ひはその間だけが、永遠なのであつた。彼女は、いくら呼び叫んで揺すぶつてみても、何んの甲斐もない、泥水まみれのお常の顔をぢつと見つめてゐた。泥水の跡

が乾いて、頬や額や、頭に泥を浮び上がらせてゐた。眼は半眼に開いて、蒼ぶくれのかかつた顔を凄惨に感じさせた。お捨はふと氣づいて、お常の泥水に亂れた髪を撫でつけてやらうと思つて自分の頭へ手をやつたが、櫛は駈けつける間に落して來たと見えてなかつた。お捨は自分の手で、お常の亂れた短い髪を撫で上げてやつた。傍では秀造が、なほも懸命に枯葭を折り集めてゐた。秀造は枯葭を折り集めることで小さい妹が生きかへつて來て、自分も亦、何かしら救はれるやうな氣持がするらしかつた。彼は眞劍に、傍目もふらず枯葭の山を拵へてゐた。

待ちきれぬ長い時間が、大崎の戻つて來たので、一瞬に消し飛んで了つた。

「着物ぬがせて、おらの着物で包め。」

と大崎は言ふと、秀造の拵へた枯葭の山の下の方へ火を放つた。そうして、彼は自分の着物を脱いで、繼ぎだらけの、垢にまみれた、メリヤスシャツ一枚になつた。お捨は、お常のぬれて、べつとりと肌についた着物を脱がせて、夫の着物で抱きくるみ、ぶすぶす煙り出した枯葭の山へ近寄つた。やがて、枯葭の山は、ぽつと勢よく燃え出した。お捨は顔が焼けこげはしまいかと思ふほど熱かつたが、少しばかり、にじり退つただけで、我慢しようと齒を喰ひしばつた。大崎と移造とは後から後からと枯草や枯木を火中へ投げ入れた。

「どうだ、暖たまるか。」

「うん。でも、おら、燃えつくやうだ。」

「でも我慢せ、これで息ふきかへさないば。」

大崎は言葉をぷつつり切つた。

枯草の山が全部火になつて來ると、さすがにお捨も辛棒しきれず、いつの間にか少しづつ後退せずにはゐられなかつたばかりか、大崎もやや離れて、立ち昇る火焔と白い煙とを仰いだ。彼はふと、この焔と煙に祈りとりすがりたい心持ちにつつまれた。その時、強い震の音が、ばたばたと響くかと思ふと、二羽の大きな鶴が前後して、枯葭の叢の上をすれすれに飛んで、向ふの枯葭の中へ姿を沈めて行つた。

「あつ、鶴だ。」

と大崎は思はず叫んだ。恰もこの光り輝く鳥が、お常の生命を救ひに現はれて來てくれたとでも思はれる心地であつた。

「今、鶴が二羽も飛び出したぞ。」

そう言ひながら、大崎は枯草を火の中へ投げ入れた。火焔の反映と赤々と受けた顏に、ぽろぽろと涙をこぼして拭はうともせぬお捨には、この燃えつくやうな火焔もお常を甦らせてはくれぬことを烈々に悟り、諦めねばならなかつた。お常はかうして、大崎の、鶴の棲むといふ新しい土地で最初の死者となつた。もう駄目だと思ふと大崎は、がつくり氣拔けして、枯木を集めて投げ入れる元氣が失せて了つた。焚火は急に衰ひ、消えて行つた。早春の黃昏が冷めたく地上に漂ひ始めたのにやうやく氣がついた。お捨は、急に冷めたさの增したやうに思はれるお常の骸を抱いたまま、獸のやうな太い聲を張りあげて、

「おう、おう。」

とあたり構はず泣き喚いた。秀造は、いつの間にか、母のお捨の背後に來てしよんぼりと佇み、しきりに鼻を啜つてゐた。

「秀の馬鹿。兄貴のくせして。」

と大崎は怒鳴りつけた。悲しさを、恐ろしさの氣持ちでやつと耐えてゐた秀造は、一度にどつと堰を切つたやうに、悲痛に押し流されて泣き出した。

「泣くんでないぞ、お前のせいでないから。この土地にはお醫者も、隣り近所の人もゐないんだから、どうにも、しかたがないでよう。」

お捨は夫を憚るやうに、併し夫にそれが聞えてほしいやうな氣持ちで、わが子の秀造にそつとつぶやいた。秀造はただ何がなし悲しみと寂しさに耐ぬやうに泣きしやくつてゐた。

大崎は、自分の着物で包んだお常をシャツの上から背負つた。お常から脫がせた、ぬれた着物は、そのまま、まるめてお捨が持つた。

「お常のゴム靴は、なかつたべか。ゴム靴はいて出たと思つたけど。」

そうお捨に言はれて初めて氣がついてみると、大崎は小沼の中からお常を抱き上げた時には、靴は履いてゐなかつたやうに思はれた。

「ゴム靴は、はいてゐなかつたけど。」

と大崎はお捨の身體を、自分の背中に、細帶でがつちりとくくり緊めながら言つた。

「でも、確かに、はいて出たと思ふけどな。」
とお捨は言つた。
「だば、沼の中さ、とられてゐるか知れない。」
大崎はそう言ひながら、お常の溺れた處へ入つて行つて見ると、半分以上も泥の中へはまり込んだ、小さい澱粉靴が、片方づつ、少し離れて水の中に沈んでゐるのが見つかつた。
「あつた、あつた。」
と大崎は叫んで、それを泥水の中から拾ひ出して、水を吐かせた。子供の小さい、すりきれた、古澱粉靴を夫から受けとると、お捨はこの悲しい惨ましい形見に、わつと聲を擧げて泣いた。大崎が先頭に立ち、お捨と秀造とは互に寄り添ふように、くつついて泥濘の濕原を小屋へと急いだ。小屋までの長い時間と遠い路を、だまりこんで、泥濘に冷めたく鳴る自分たちの足音を聞くだけで、啜り泣きながら歩いた。早春の冷めたい靄が曠野に逼ひはびこる頃、彼等は小屋へ戻つて來た。彼等のうち凋れた、默々とした歩みを見ると、小屋の入口で待ちわびた人々はその眼と胸とを打ちのめされて、息もつけなかつた。皆は、大崎の周圍に駈け寄つて、背負はれてゐるものを覗かうとした。だが、覗かうとするまでもない、大崎の背中の蒼白い、むくみ上つた顏が彼等に一切をあからさまに物語つてゐるのであつた。祖母と母とは大崎の手にとりすがつて泣き崩れて了つた。
「みんな、家さはいれ。」

大崎にそう言はれても、一團となつて泣きじやくる人たちは動かうともしなかつた。大崎が、亡き娘を背負つたまま小屋へ入つて行つたので、皆はやうやく彼について行つた。お捨は、小屋の中程に、垢にまみれた布團を一枚敷き、大崎の背からお常の死體を抱き下ろして仰臥させた。
「着更えは、湯灌させてからにしてやればいい。今、すぐ湯がわくから。」
といつの間にか、お種は湯をわかし始めてゐた。
皆は榾火のために少しは明るい爐邊へ、人戀しそうに淋しく寄り集つた。大崎は默り込んでゐた。祖母と、お種とは、ぼそぼそと語りきかせるお捨の言葉に耳を傾けてゐた。その話の切れ目切れ目に、祖母は御念佛を唱えた。
「ああ、おらが身代りに死んでやりたかつた。長生きすると、悲しい目にばかし逢ふものだのう。可哀いそうに。お常、許してけれやのう。」
と祖母はくりかへし呟いた。
大崎は、ただ獨り、葬ひをどうするかと言ふことを考へつづけてゐた。坊様に來て貰はれる上地なら、何も心配はなかつたが、迎ふべき坊様のあてもなかつた。塘路まで行けばお經を上げてくれる人はあらうが、見ず知らずの他人をこの土地へ連れて來るのは、どう考へても、いやであつた。
「可哀いさうだが、おら達だけで、葬ひ出すことにするべ。お骨にして置いて、そのうちに郡

合よくなつたら釧路のお寺さ預かつて貰つてお經あげて貰ふことにするべ。」

と大崎は言つた。誰が、どう考へても。そうでもするより他に致し方がなかつた。

「爺さんのお骨納めない内に、また新しいお骨が一人前、殖えたのう。」

と祖母が呟いた。大崎はじめ、みんなは默つて相手にならなかつた。

「この次は、おらが厄介になる番だべなあ。早く行つた方が增しだ。この世はもう澤山なほど苦勞したでのう。こんな小さい曾孫まで見送らんけれあ、ならんなんて、おらは、何んといふ深い罪つくりに生れついたもんかのう。」

と繰りかへし、低い聲で愚痴をつづけた。

「お祖母、もう、ええつて。やめてけれ。いくら、愚痴言つたつて、お常はもう生きかへつて來んのだから。それよか、お湯がわいたら、湯灌してやるべえ、おら、棺桶を工面してくるから。」

大崎はそう云つてかなり暗くなつた外へ出た。外には勿論、棺桶の材料になるやうな板はありやうがなかつた。彼は何か間に合ふやうな箱でもと考へながら、納屋に入つて見たが、箱らしいものもなかつた。ただ納屋の一隅に、荒莚で包まれ、端の方から破れかかつた古新聞紙がはみ出してゐる。あの所有地標の太い標木が、周圍とは全く不釣合ひにどつしりと立て掛けられてゐるのが目についただけであつた。彼は、これでは、お常の遺骸を全く、むき出しのままで火葬しなければならぬと思つた。彼は急に冷水を浴せかけられたやうに、何とも言ひやうのない、嫌な氣

持がして、激しく胴震ひをした。彼は全く手ぶらで小屋の中へ戻つて來た。小屋の中では、湯灌が始められようとしてゐた。併しそれも、バケツへくみ取られたお湯で、身體を拭いてやる程度のものであつた。バケツの中から白い湯氣が、それだけが溫かそうに、低い天井まで立ち昇つてゐた。

「棺桶は間に合はないから、何か單衣ものを着せてやれ。燒き場では、新しい莚に寢かせてやるから。」

「可哀そうに。單衣一枚では寒からうになあ。いくら、子供だつて、一人前の葬ひを出してやれん、おらたちを恨まないでけれやなう。」

とお種が言つた。

「湯灌はみんなでしてけれ。おらは、新しい莚で寢棺ば拵へるから。」

と大崎が言つた。

お常にとつては、曾祖母、祖母、母親にあたる三人の女たちが、おうおうと泣きながら、どろどろした汚い着物に、髪も亂れ、垢じみた顏をして、青ぶくれの小さい遺骸を、湯氣の立つ古手拭で拭ふ樣子は妖氣立つた眺めであつた。秀造とお松とは恐ろしさと物珍らしさとに目を見張つて、互に倚り添ふて小屋の一隅から眺めてゐた。三人の女は、默のやうに泣いたり、鼻をすすつたり、お念佛を唱えたりして、やたらに同じ處を懸命にこするので、遺骸の肌から青黑い垢が、ぼろぼろとよれて落ちて來た。

大崎はその間に納屋から、この長い冬の間に拵へた曠野の枯蘆の新しい莚を二枚持つて來て、それに繩を通し、遺骸をその中に包むやうに拵へた。湯灌は、いつ終るとも見えないので、大崎はその傍へ立つて行つて言つた。

「もう澤山だ。そんなにこすつたら、皮むけて了ふ。」

大崎の聲で三人はやうやく手をひいたが、お種は、ふと氣づいて、伸び放第の、汚れた髪を拭き、櫛を入れてやつた。それから、お種とお捨とで、一番上等の、併しかなりつぎの當つた白地の肌繻絆を着せた。それでお常の樣子は俄かに死人くさく、佛樣らしくなつた。三人の女たちは、一とし きり、おんおんと聲を立てて泣いた。一方の壁に寄せて、薄い、汚い布團を敷き、その上に莚を敷き、更に莚作りの寢棺を置いて、その中へ遺骸を納めた。その枕許に、線香が立てられ、水が置かれると、小屋の中は、一切が、重々しく、悲しく、痛ましく、改まつて見えた。併し見ようによつては、莚の寢棺は、中身の少い馬鈴薯の俵でも置いたやうであり、それに線香や水を捧げて、一家の者が拜んでゐる樣子は、何處か、狐狸につかれた者のやうにも見えて憐れであつた。そうだ。彼等の顏は、全く生ける人のやうではなく、茫然とし、又おどおどとして、狐狸なぞよりは、更に更に怖ろしい妖魔にとり憑かれてゐるもののやうであつた。

かうして大崎一家の內で一番幼くて、最も生命に豐かに惠まれてゐる筈のお常が、彼等の新しい土地で、土に歸へる最初の者として横たはつてゐるのであつた。朝に元氣よく兄と姉につれられて遊びに出て行つた、この小娘が夕暮には、遊びつかれてではなしに、生命を失つたものとし

て、運び戻されたのであつた。殘つたものは、老ひたるも、幼きも、皆一樣に茫然自失するばかりであつた。長い冬の生活の後に春がようやく訪れて來ながら、その春が、そうつと持つて來てくれたのは、彼等の生命ではなくて、彼等の最も可愛い、幼いものの死であつたのである。大崎は何かしら、容易ならぬ、慘酷なものが春の面紗の蔭にひそみ隱れて、彼にぢりぢりと近づいて來つてあるやうな、恐怖の氣持ちを覺えるのであつた。何かが來そうだ。漠然とした不安が湧き上るのを抑へることが出來なかつた。

祖母と子供たちを寢かせて了つて、母親、大崎、お捨の大人三人は焚火を圍んでつくねんと默り座りこんでゐた。彼等のいとしい末娘が、平常は特にそれほどにも愛着らしいものを持つてゐるとは感じなかつた小娘ではあるが、急に彼等の間から消え去つてみると、その缺けた場席に恐ろしく大きな暗い穴が口を開いてゐる事が、まざまざと感じられるのであつた。いや、心の空虛だけではなく、彼等の一家が、この小屋もろともに底知れぬ奈落につき落されたやうに感じられるのであつた。三人はめいめいに、虹別原野で勉造爺さんを突然、彼等の間から奪ひ去られた時のことを思ひ浮べてゐた。それはひどい悲しみと驚きではあつたが、集り弔つてくれる多くの隣人同志の無言の慰めが彼等の心を溫めてくれた。併し今は、生命を失つた小さい遺骸が寒む寒むとそこに、俵に入れられて置かれてゐるだけである。彼等の小屋、彼等の身邊、彼等の心を押しつつむ深い夜氣と寂寥とは、彼等を小さい石のように、こちんとちぢこまらせずにはおかなかつた。誰も寢床に入らうともしない長い寒い夜がやうやく白みかけた。

「夜が明けて來た。」

大崎がそう呟いた。餌を漁りに釧路の町の方へでも飛んでゆくのであらう、鳥の鳴き聲が幾つか聞こえて來た。

まだ薄暗い小屋で、いつものやうに、僅かの雜炊を啜るだけの朝餉が終ると、葬ひが始められた。女たちは、

「おうん、おうん。」

と泣き、やたらに手をすり合はせて拜んだ。子供たちは、ぽかんとして、突つ立つてゐるだけであつた。大崎はお捨と一緒に身拵へして、二人だけで火葬に出かけることにした。大崎は俵を背負ふやうに、荒莚包みのお常の遺骸を背負ひ、古い蜜柑函と風呂敷とを持つた。お捨は鍬を持つて後に從つた。大崎は自分の土地では火葬したくなかつたので、裏山を登つて、なるべく離れた場所を選びたいと思つた。夫婦は、祖母と母親との合掌とお念佛と啼泣の聲に見送られて小屋を出で、處々にまだらに殘雪のある裏山の斜面を登つて行つた。峰を越えて反對の斜面へ出ると、雪のない處で遺骸を下ろし、そこの地面へ穴を掘り、枯枝を伐りとつて薪を積み入れた。

「火の勢を強くしなければ、燒き上らんから、うんと薪をとつて來い。」

と大崎は、林の間をくぐつてせつせと薪を拵へてゐるお捨に言ひながら、自分も薪を集めた。薪の床の上に遺骸の依包が移され、その上に厚く薪が積みかさねられた。

「さあ、火をつけるぞ。」

と大崎は遺骸を覆ふた薪の山の前にしやがみ、燐寸をすつた。そうして、薪の間へ手をさし込んで、莚へ火をつけた。

「お常、許してけれや、可哀想なことしたなあ。」

お捨は夫の傍にしやがみ、手を合はせたまま、ぽろぽろと涙をこぼし、おうんおうんと叫えるやうな大聲で泣きつづけた。白い煙が薪木の間を流れるやうに立ち上り、やがて、莚に、ぽつと火焔が上ると、しゆうと云ふ音にまじつて、薪の燃えはじける音勢がづいて來た。大崎は火勢を衰へさせぬやうにと、枯枝を後から後からと投げ入れた。次第に、死體の燒ける臭ひが、土と木と落葉の臭ひを押しのけて、濃く強く周圍に立ちこめた。

お捨は、ひきつけるやうに、いつまでも泣きじやくつてゐた。

「もう、泣くなつてば。それよか、枯枝を集めて來いや。」

と大崎は言つた。お捨は無言のまま、しばらく動かなかつたが、暫らくすると、立ち上つて、鼻をすすりながら、枯枝を集め始めた。

早春の樹木は枯枝までも、春の水氣を吸ふてゐるのであらうか、みづみづして燃えにくいので、僅か六、七歳の子供の遺骸を野燒きするのに殆んど夕暮れ近くまでかかつた。その間、お捨にとつて、最もたまらなく辛かつたのは、死體を燒く臭ひを嗅ぎつけて集つた、おびたゞしい烏の群れであつた。太い嘴を持つた眞黑い烏が彼等を取り圍んで、あたりの梢にずらりととまつた樣子は、枯木に眞黑な大きい異樣の果實がなつた樣で、見るからに不氣味極まるものであつた。

餌に餓えた烏の群は、夫婦のすきを見たは、人に恐れる氣配もなく、さつと飛び下りて來て火煙の中から、燒けた一片の肉切れをでも掠めとらうとした。そうして烏の群れはお互に、夫婦の警戒を嘲罵し、嚇喝し、冷笑し、謀喋し合ふやうに、があがあと鳴き立てるのであつた。

惡臭がやうやく淡くなり、木や土や落葉の匂ひがそれに代つて來て、自然は、再びすがすがしさを取り戻して來た。火葬は、最後の薪の消え落ちると共に終り、穴の中の燃え殘りの薪の間に、白い、黄ろい或は黑い灰が殘つた。

「お骨が上つた。」

と大崎は呟いた。お捨は狂氣のやうにわつと泣き出した。まだ餘熱のこもつた骨を暫らく、冷さなければならなかつた。夫婦は、烏の群の鳴きさわぐ下で、枯枝で拵へた箸を持つてお骨を拾ひ上げ、古い蜜柑箱へ、がさごそと詰め入れた。頭蓋骨を最後に、一番上へ置いたが、お骨は箱の半分にも滿たなかつた。

「なんと、お骨の少ない佛樣だことや。食ふものも食はれなかつたので、骨も太れなかつたんだべや。」

とお捨は人を恨むやうに泣き聲で呟いた。お捨の痛ましい言葉に返事をしようとはせずに大崎は箱の緣を、平手でぱたぱたと叩いて、お骨を落ちつかせ、古板で蓋を當てがい、風呂敷に包んだ。

「烏の奴、まだ行きやがらん。」

大崎は鍬を握つてふり上げると、

「ぼう。」

と怒鳴つた。その大聲も林の中に、すうつと吸ひとられて行き、彼の間近かの枝の烏が數羽、とまり枝を換えたに過ぎなかつた。大崎は鍬で、火葬の跡の穴へ土を入れて埋めた。暖みの通つた骨箱を大崎がぶら下げ、鍬をお捨がかついで、斜面を上つて行つた。そうして、峰の上まで上つた時、二人は始めて、心の勞れと空腹を覺えた。二人は殘雪を掻き分けて、口の中へ入れた。そうして上つて來た斜面の方をふりかへつた。その時、大崎は全身も一時に凝結しそうな驚きを以つて、山の麓の方に或るものを見た。それはかなり遠くではあるが、林の中から一條の白い煙が黄昏の内に立ち上がつてゐるのであつた。大崎は自分の顏色がさつと變り、胸の動悸するのを感じた。

「あそこに、誰れか開墾してゐる。」

大崎には、あらゆる不安と恐怖とが、一時に襲來したのであつた。

「おらとこでも、早く火入れして開墾始めなければ。」

とお捨は、夫の氣持ちとは全く異つた言葉を言つた。

「さあ、早く戻るべ。」

と大崎は其處を一刻も早く逃げ隱れたい氣持でお捨をうながして、小屋の上にあたる裏山の斜面を辷り下りた。お捨も熊笹に足をとられながら後から續いた。

大崎とお捨が小屋の暗い入口を入つた時、留守の老婆二人と子供二人とは全世界の寂寥と孤獨の中にただ獨り取り殘されたもののやうにぽつねんと爐端に寄りすくんでゐた。

「お骨が上つた。」

と大崎はただひと言いつた。老婆たちは、お念佛を唱えて啼り泣いた。虹別原野から運んで來た蜜柑箱ほどの佛壇の前に、同じ位の蜜柑箱のお骨が置かれた。お常の使ひふるした茶碗に南瓜雜炊を盛り、一杯の水と一緒に上げられた。そして皆も南瓜雜炊に空腹を僅かに醫やした。春とは云つても、濕原の早春は、夜は寒く、長かつた。皆が、思ひがけない驚きと悲みとに打ちのめされて茫然としてゐる間に大崎は、更にもう一つ別に新しい不安と恐怖とに包まれてゐるのであつた。

それは、今日、不意に彼の目に入つた開墾の煙であつた。彼の驚きは、自分の裡山の反對側に既に開墾者が入つてゐるといふことであつた。この原野こそは自分の他に誰一人として、人は入り棲んでゐないといふ確信がぐらついたことである。彼の不安と恐怖は、自分のこの地への入地が誰かに、あばき出されはしまいかと云ふことであつた。彼はもつと深く隱れなければならぬと本能的に恐怖を感じた。彼の肉身の子を不慮の死に掠めとられた悲しみよりも、露見に對する恐怖の方が彼の心を暗く重苦しくさせた。

生き拔ける爲めには悲しみを忘れて働かなければならぬことを大崎も、すべての農夫のやうに、生れ落ちる時から、生活の中で知り盡してゐた。いや、知り盡してゐたといふよりは、そう

いふ體驗が本能から生れて來たもののやうに、自分のものとして身についてゐるのである。だから、悲しみに蹴落されてゐるやうなことはなかつた。その上に、誰か他の入地者が餘り遠くない處にゐると氣づいたことが、彼を非常に緊張させた。油斷してはならぬと彼は獨り心の中で警戒し、決意した。

裏山の林も殆んど雪が融けたので、傾斜のゆるい處に、畑地を拓くことにした。そこは冬期間に、日ぼしい木を殆んど伐り倒して薪にして了つたので、すぐ藪に火入れをすればよかつた。そうして彼は次から次へと藪に火入れして三反歩ほどを燒き拂つた。笹や草藪が眞黑に燒け、新しい地は最上の壤僑を確實に約束するやうに黑々と、その懷を展げて見せてゐると思はれた。強く、香ばしい黑灰の匂ひのする新土に、木の根株や笹の根張りをそのままに、鍬で荒い筋をつけ、その低い溝の中へ蕎麥の種子を蒔きつけた。その仕事が終ると誰の顏にも強い安堵の樣子が溢れた。それは、これで先づ先づ我々の生命の根が新しい土地に下ろされた。我々の生命だけはこれで生き繼がれると言ふ氣持ちであつた。彼等は又、やうやく手をつけずに貯へることの出來た馬鈴薯を、幾つもに切つて、それを灰にまぶして、土の中へ伏せた。それから又、南瓜、黍、粟、大豆、小豆を蒔いた。

「もう大丈夫だ。これだけ蒔けたら、もうどんなことがあつても餓え死にすることはない。」

と大崎は元氣よく言つた。お種もお捨も、本當にそうだと思つた。併し女たちは愚痴と取越苦勞から全く離れることは出來ないので、胸の底では、時々、そつと不安が頭を擡げるのであつ

た。

「虹別さ初めて移住した時だつて、これよりも、もつと色々のものを澤山蒔いたのだけど、いつも餓え死にしそうだつたけ。」

そういふ氣持ちは彼女等の顏を暗くし、口を重くつぐませるのであつた。女たちの暗い顏は、

「まだまだ、安心なんか出來ないさ。地面のものは、この手で獲り上げてからでないば、安心出來るもんでないから。」

と呟くやうであつた。

大崎とても、よく落ちついて考へれば、全くそれと同じことを考へるに相違なかつた。だから、女たちの考へに別に不賛成ではないのであつた。だが、彼には一層嬉しい事が、絶えず胸の中に躍り上がつてゐるのであつた。それは、今では全く彼の懐具合を覗ふ債鬼が、悪い憑きものの落ちてしまつたやうに彼等から退散したといふことであつた。

「この新しい土地に出來るものは、すつかり自分のものになるのだ。」

この考へが彼には何よりも力づよく喜びを齎らすのであつた。

「この土地と、ここに出來るものは、何もかにもみんな自分のものだ。」

そのことを自分の胸の中で幾度となく強く繰りかへして言つてみても、彼の良心に逆らふやうなものは毛ほどもなかつた。

彼はそこで、納屋の片隅に立てかけて置いた所有地標を思ひ出したのであつた。彼の土地代と

れから曠野へかけて、足と鍬との向ふ限り、幾らでも廣がつてゆくのであるが、併しもう、彼の土地所有は既に開始されたのだと思つた。

「そうだ、見ろ。おらは自分の手で新しい土地を拓いて種子を蒔いたではないか。これは他の誰の土地でもあるものか、おらの土地ではないか。おらは自作で、地主なのだ。」

彼はそう思ふと、急に氣が大きく脹れ上がるやうな氣持がした。そうして何んだか少し、こそばいやうな氣持ちがして、思はず腮の下を撫でた。彼は納屋から、所有地標を持ち出して來た。荒莚と新聞紙を解いて、小屋の眞中へ横たへて見た。木の香が、ぷんと臭ひ、墨が黑々と木肌に染み込んでゐた。

「何處さ、これを建てるかなあ。」

と大崎は得意滿面に言つた。女たちは默つて返事をしなかつた。女たちには、この所有地標の意味も有難さもわからぬので、返事のしようもなかつたのであつた。彼は何んだか、張り合ひ抜けのやうであつた。彼は、その夜、寢床の中で標木を建てる個所を考へてみた。彼は何と云つても、それをあの廣々とした曠野の眞中に、然も、やがて彼の鍬の及ぶ筈の最も遠い境界にそれを、ずつしりと地中へ打ちこみたかつた。併しその考へには少し邪魔が入つた。第一に、曠野はまだ、かなり春の出水で、じくじくしてゐるので、開墾は無論、火入れもしてゐなかつたので、何處に境界を定めてよいか、見當がつかなかつた。次に、もつと大きい邪魔が彼の考の中に根を張つた。それはその新しい大きい標杙が、あの曠野の上では、すぐ誰かに見つかりはしまいかと

いふことであつた。この不安は、疾風に乘つた黑雲のやうに彼の心を一瞬のうちに覆ふてしまつた。併し今では標杙は白らじらと彼の眼底に映つて、彼の頭を離れず、こびりついて、どうしても建てずにはゐられなくなつた。それで彼はさしあたり、裏の傾斜地の新墾の畑にそれを建てることにした。

翌朝、彼はその日の仕事始めに、開墾した畑と裏山の林との境界線に、つまり、斜の將來の所有地となるべき土地の最も高い地點にそれを建てた。標杙は裸の林を背景にして、火入れの後の黑灰の地上に、どつしりと建てられた。彼がそれを建て終り、少し離れた處へ退つて、標杙に見惚れてゐるとき、母親お種と妻お捨とが、その日の野良仕事に小屋を出て來た。

「棒杙ば、あんな處さ建てたよ。」

「何んだか、氣味が惡い。おら、墓杙のやうに見えて。」

とお種が寂しく呟いた。

「馬鹿いふもんでない。」

と母親のお種ゐ強くたしなめた。

「でも、あんなもの建てると、畑が何んだか氣味惡く寂しくなるもの。」

「そんなことあるもんか。だんだん賑かになるさ。小屋立てたり土地ば耕したり、棒杙立てたりして、土地が開けていくんだもの。」

とお種に言つた。お種は、呆けたやうな顏をして默つてしまつた。

曠野をひたしてゐた融雪期の水は、やうやく目に立たぬほどづつ減退してゆき、幾筋もの泥川の流れが次第に細くなつて來た。日ざしはまだ弱く、風もかなり冷いが、春の陽光は、泥芥や枯草や朽木を蒸し暖めるので、強い土の臭ひの他に咽るやうな惡臭を曠野に漂はせた。併しその强い惡臭と共に、土がやうやく乾き始めた。

大崎は裏山の新墾に次いで播種を終ると、曠野の方に仕事を移した。小屋のある丘の傾斜から曠野の方へ下りた處は、粗林ながら、まだかなり立木があるので、そこへ先づ火を入れることにした。火は、蘆原にぶすぶす煙つたり、ぱつと燃え上つたりして、五反歩ばかりの土地を燒きひろげた。大崎は根もとの燒け焦げた立木を伐り倒し、太いのは薪に、細いのは焚付けに拵へて燒畑の一方に積んだ。それがかたづくと、彼は文字通り開墾の鍬を握つた。

虹別の開墾の時には、團體移住のこととて共同にプラウを以て馬耕することも出來たし、金錢さえ出せば、あとは種子を蒔くばかりに整地まで請負ふものがゐたが、此處では北星はゐても、プラウがないので、否應なしに自分の手と、鍬とで荒土を掘りかへさねばならなかつた。土はひどく重粘の土に、濕地の雜草が根づよく思ひのままにはびこつてゐるので、ひどく力のいる仕事であつた。彼は全く自分一人の力に賴つて土を相手に力闘しなければならなかつた。併し仕事はこのやうに苦しいが、彼は元氣で樂しかつた。彼は力をこめて鍬を打ち込み、おこし返へす毎に眞黑い土が、もつくりと足もとに盛りあがるのを見ると、ただそれだけで元氣が湧いて來た。そうして時々ふりかへつて、きちんと耕されて周圍の蘆原とくつきり區劃された黑い土の部分が次

第に廣くなつて行くのを滿足を以つて眺めた。彼は大體の整地をして、先づ今年の冬から來春まで餓えぬだけの用意に、手つ取り早く小麥と裸麥とを蒔いた。木鍬を入れて落ちついて耕耘するのは、數回の收穫の後でなければ、豫想する暇がないのであつた。種子用の貯へは、これで、ぎりぎりであつた。食糧の缺乏で、いつの間にか、種子用の貯へに手がついてゐたが、既に背に火のついたやうな飢餓を抑へつけることは出來ないので、種子物の不足も困るには相違ないが、そうならざるを得なかつた。

大崎が、この上にも食べ料を減らしても、作付けを多くしたいと云ふのに對して、お種とお捨とは、これ以上食を減らすことはとても出來ないことだし、その上、もし今年の作が惡かつたら、それこそ一家餓え死しなければならぬことになると言つて反對した。女たちの方が、大崎よりも、ずつと、がつちり現實を握つてゐるのであつた。大崎は、もし食糧の缺乏がこれ以上ひどくなつたら、在り金で食糧を買ひ入れるのも止むを得ないと言ふ最後の切り札を出したが、女たちは、今年はこの新土の性分を見定めるためにも蒔き付けは、この位でやめて置いて、安くとも、いつでも金錢になる木炭と薪を出す仕事や、火入れや、荒耘をして、來年の仕度の程度にして置く方が、暮し向きに心配がなくて安心だと、驚くほど熱心に、執拗に、がんばるのであつた。大崎も、とうとう女達の意見を容れなければならなかつた。併し女達とて、そうは言つても、新しい畑を耘し種子を蒔くことは本能的に、やめられぬものと見えて、いつの間にか、小屋の立つてゐる丘の傾斜のそこここに貧しい物を拵へ、豆類や、唐黍や、早出來の野菜ものを蒔いた。お種

は、新地を耘すたびに山蕗や蕨や片栗や芹の根をぬき集めて、小屋近くに、まとめて植えた。

かうして入地第一年の春には、かれこれ一町歩餘りの土地が拓かれて、とも角もそこに大崎一家の生活の根が下ろされたのであつた。大崎たちはほつと、ひと安心した。あとは天候の順調と作物の生長とを待つばかりであつた。絶えず空腹で、ひだるい思ひの離れない勞働の身體にも、元氣と力が湧いて來たやうであつた。祖母も、ひと通り蒔きつけの終つたことを聞いて、心から安堵した樣子であつた。併しそれと同時に、年寄りらしく、油斷と安心の禁物なことを、繰りかへし注意したり、土地の生產を支配する見えぬ神の力に豐饒をひそかに祈る樣子であつた。

「虹別の時だつて、初めは何もかにも、よかつたが、それが見てゐるまに、めちやくちやになつてしまつたのだから、まだまだ安心は出來んのう。油斷してゐると、自分の足もとから、さらわれてしまふことになる。土の神さまは、默つて、じつと構えてゐなさるが、いつも、そうたやすく豐作をさづけて下さるとも限らんからのう。ここはまた新しい土の神樣だて、よくお願ひ申さんとならんのう。」

と祖母は言つた。そう言はれてみると、大崎は祖母の言ふことを尤もだと思ひ、この新しい土地の上にも豐作、凶作を意のままに支配し得る、目に見えぬ大きな力が覆ひかぶさつてゐるやうにも思はれた。それは頭上に擴がつてゐる天空そのもののやうに思はれた。彼はいふにいはれぬ胴震ひを感じながら、天空を仰ぎ見るのであつた。

併し祖母はじめ大崎も女達も天空の惠みを願つてゐる間に、不幸が又、いつの間にか家の中か

ら湧いて出た。曉から黄昏まで新鮮な空氣を吸ひ、萬物を生育する大地に足を着けてゐる生活にも拘らず、農民の間には實に病人が多いと言はねばならぬ。病氣の中でも、特に多いやうに思はれるのは、胃腸病、肺病、眼病、皮膚病であり、殊に驚かされるのは子供の發育障害と、年齢性別を問はぬ精神病のやうである。

大崎一家も、この例外ではあり得かつた。恐ろしい病魔の手が徐々に、併し非常に執念深く彼等に迫り來つつあつた。お捨には發狂が、又その子の秀造とお松との兄妹には發育障害が徐々に現はれて來つつあつた。併し明け暮れ生活のための死闘に喘いでゐる大崎一家の者には、極めて徐々に來る健康上の障害の、目に見えぬ禍の進行に氣がつく筈がなかつた。やうやく、「變だな」と誰かの目についた時は、既に絶望の時なのである。

お捨は末娘のお常が溺死してから、その物腰が非常に寂しく、心の中に埋めることの出來ぬ大きい空隙が出來たやうであつた。それは勿論、尤もなことであつた。併しお捨のみでなく、他のみんなも互に寂しそうに見えるのであつたから、誰もお捨の様子をあやしむものはなかつた。そのうちに、お捨は獨り言を言ふやうになり、そのつぶやく言葉の中には、死んだお常の名や、お常にものを云ふ様子が多くなつて來た。彼の眼は勞れたやうに呆けながら、どうかすると、目ばたきもせず遠くの物を見つめる様子に見えた。それればかりか、彼女の眼は、遠くの空間にお常の姿を見とめるもののやうに思はれた。その様子に、お仲が先づ氣づいて、大崎に打ちあけた。

「お捨はイムに憑かれたんでぱないべか。」

そう言つて不審に思はれる、節々を語り、それを「イム」に結びつけた。

「イム」といふのは、中年から老年へかけてアイヌ婦人に屢々見られる一種の精神病で、比較的に新しく移住して來た大崎一家のものが「イム」といふ病氣のことを思ひ出すのは變のやうであるが、彼等は虹別原野に住んでゐた時に、その病人を見た事があり、彼等の舊い郷里で言ふ狐憑きなぞと同じやうなものと思つてゐた。だから、虹別原野で彼等の部落の中にそういふ病人が出た時に、人々は女イムだ、男イムだと言つて恐れたり、嘲つたり、戯れたりしたのであつた。その忌な「イム」が一家の中に起つたと知つたとき、まして大崎にしてみれば、開墾に最も頼り甲斐のある妻がそれにとりつかれたと知つたとき、目の前が一時に真暗になつたと思つた。

「イムつて言ふ病氣は蛇に嚙まれると起る病氣だつて、虹別で聞いたけど、いつかお捨は蛇に嚙まれたべか。」

とお種は低い聲で不安氣に大崎に言つた。

「おら、ここではまだ蛇なんか見ないけどなあ。原野でば、去年の秋にここさ來るとき、二、三度脱け殼ば見たけど、あの濕地では、越年しないべもの。土が冷めたいからなあ。裏の日向の傾斜には少しはゐるか知れんが、まだ土の中さむぐつて越年してゐるべさ。それに、お捨は一度も蛇に嚙まれたことなんか言つてゐなかつた。」

と大崎は、色々と考へ込みながら、陰鬱な顔で言つた。大崎は、やがて、確かめるやうな、はつきりした言葉で、傍の爐端で、つくねんとしてゐるお捨に尋ねた。

「お捨、お前、この頃に、蛇に嚙まれたことがあるか。」

併しお捨は空の耳で、返事もしなかつた。

「お捨、お前、この邊で蛇を見たことがあるか。」

と大崎は大きい聲で繰りかへした。併しそれでも、お捨は默りこんでゐた。そうして暫らくたつてから、細い聲で、

「お常」

と呟いた。その聲は、か細くはあるが、あきれ顏に心配を湛えて見守つてゐるお種と大崎との耳にも聞えた。

「イムでばなくて、やつぱり、お常のこと思ひ込んで氣がふれたんだね。」

とお種はどうにも救ひやうのない不幸の悲しみに自分も引きずり込まれる思ひで言つた。

死んだお常の面影をさつぱりと忘れ切るか、或ひはお常が生き返へつて來てくれるか。この二つより他にお捨を救ふ途は在り得なかつた。併しお常は死んで行つたのだ。否でも應でも、お捨にとつては、お常の面影を忘れ切るよりほかはないのであるが、その忘却も諦めも出來なかつたのだ。日一日、お常の面影は現身の生ける姿となつて、あざやかにお捨の眼に映るのであつた。これを振りきつて、忘れることが、どうしても出來ぬとすれば、最後は、お捨自身の命の滅亡があるばかりであつた。お捨は遂に、ありとあらゆる事物のうちにお常の現身を凝視し出した樣子であつた。それが、やがて更に昂じて、お常が自分の頭や、胸や腹の中へ、遂にはお捨自身

の中へ、すつぽりはまり込んで自分と一體になつてゐるのだと言ひ出した。次いで、自分はお常と全く一體にはなつたが、そのお常を追ひかけ、おびやかすものがあり、子供を奪ひ掠ふものが襲ふて來るとわめき出すに至つて、どうにも手のつけやうがなくなつた。大崎が開墾に出かける留守には、見張りのためにお種も居殘つてゐなければならず、そればかりか、遂にはお捨を小屋の柱に縛りつけて置かねばならなくなつた。お捨は自分と一體となつた可愛いお常を人攫から護るために、小屋から飛び出して逃げやうと暴れるのであつた。お捨が暴れ出すと、縛られた柱ごと、小屋を搖り倒さんばかりであつた。大崎は心配のあまり、或る時には、野良仕事の畑へつれて行つて、傍の大木へ、犬を繫ぐやうに繫いで見張りしながら働くこともあつた。お捨は髮をふり亂し、着物をはだけて泣きさわぎ、ひいひい喘ぎながら遂には地上や、叢の中に眠つて終ふのであつた。そういふ時、大崎は幾度となく狂つた妻の野獸のやうな寢姿を脚下に見据えて、暗い心で自分の兩手をそつと見くらべ、その、やり場に困つたことであつたらう。彼は土と垢とにまみれた妻が、どうかして、このまま目をさまさずに死んで行つてくれぬものかと、熱い、ぬれた目で、横たはつたお捨の身體を見守るのであつた。

晝のうちはまだどうにか見張りが出來たが、夜中は本當に手こまつた。お種一人では心もとないので結局は、大崎が晝間の仕事に勞れた身體で見張らねばならなかつた。それで思案した暮旬、大崎は自分の足とお捨の足とを男帶の兩端で結びつけて寢ることにした。併しそうまでしたにも拘らず、仕事と心配と看護とに勞れ切つて深く眠り込んだ或る夜明けに、大崎がはつと氣づ

いてみると、お捨の足を結んでゐた方の帶の端が解き放たれて、お捨の床は藻抜けの殼であつた。驚いてはね起きてただ一つの入口を見ると、隙間から黎明の白い鈍い明りがさし込んでゐた。

「おつ母あ、起きてけれ、お捨がゐない、脱け出したやうだ。」

と大崎は低いが、張りつめた、ぞつとする聲でお種を搖つた。お種はよろけるやうにして起き上つた。驚きと不安で身體の胴震ひが止まらなかつた。全身の血が一度に、さあつと流れ下つてしまつたやうに惡寒が襲ひ、膝も腰も力が拔けて歩けそうもなかつた。それでも夢中にあがく思ひで、大崎の後について小屋を出た。戸外は一面に春の霧が立ちこめてゐた。その白い厚い霧の幕を前にして大崎と、その後について來たお種とは茫然とそこに立ちすくんでしまつた。暫らく二人とも默つてゐた。默つてゐたといふよりは、恐怖と不安とで聲が出なかつたのである。

「どつちさ行つたのだべか、この霧に。」

とお種はおろおろして震へ聲で言つた。

「おうい。お捨。」

と大崎は思ひきつて聲を張り上げて呼んでみた。彼にはただそうしてみるより他にしようもない氣持ちなのであつた。二人は耳を澄ましした。併しその聲は低くこだまして、すぐ霧の中に吸ひこまれるやうに消え去つた。二人は猶ほも耳を澄ましてゐた。裏山の林の奥の方で風にきしむ木の音がおすかに聞えて來るばかりであつた。

「この霧では深すにも探されんなあ。」

と大崎は深く吐息をついた。

「でも、かうしてゐられん。早く探し出さんと、どんな間違ひば起してゐるかも知れんで。おらも一緒に行くから、先づ裏山の方から探してみるべよ。」

とお種は、胴震ひしながらせき立てた。二人は重い霧に包まれた裏山の林の中を、あちら、こちら、木の間をすかし、覗ひながら探し廻つた。全身は雨にうたれたやうに、ずぶぬれにぬれてしまひ、手足は凍るやうに冷めたかつた。明方まで探し廻つたが林の中にはつひに見つからなかつた。二人は最早や、この方面は思ひあきらめて、曠野の方を探し廻ることにした。そうして林の中を猶ほも、見落しはないかと目を配つて少しばかり下りて來ると、ふと大崎の頭に浮んだ事があつた。それはあの、お常の遺骸を火葬した場所であつた。

「もしかすると、あそこかも知れん。お常を火葬した處だ。あそこへ行つてみるべえ。こつちだ、こつちだ。」

とせき込んで大崎は引つ返へして山を登つて行つた。そうして山の頂を越えて向ふ側へ出で、斜に林の中を縫ふて下りて行つた。

「おつ母、見つかつた。やつぱり、やりやがつた。」

と絶鳴ると大崎は野猪のやうに林の中を飛んで行つた。そうして大崎はかつての娘の火葬の場所間近かの樹の枝に自ら縊死して、ずつしりと、小ゆるぎもせず、ぶら下つてゐる重さうな黑い

ものの前に立ちすくんでしまつた。駆けつけたお種はお捨の足下に泣きくずれて終つた。

やうやくして大崎は、妻の縊死體を枝から解き下ろした。お捨は寢間着のしごきで縊れてゐたのであつた。

「どうして、こんな處まで來て死ぬ氣になつたもんかなあ。」

と泣きわめきながら、お種が言つた。

「お常の後を追つて來る氣になつたのだべもの。お常を火葬したのは、すぐそこだつたから。」

と大崎はすぐ傍の、土のほりかへされた跡のある場所を指した。

「やつぱし、親子の情にひかれたんだなあ。なんて因果なことだか。」

とお種はつぶやいた。お種は林の下草の上に寢かされてゐるお捨の寢間着のはだかつてゐるのをなほし、髪の亂れを指で撫で上げてやつた。

「まだ少し身體の溫みが殘つてゐるようではないべか。」

とお種は云つた。

「そうけえ。」

と大崎はお捨の額や頰に手を當て、それから壞をあけて、胸へ手をやつてみた。疣のやうに固くこちんとした乳首に手が觸れた。霧にすつかりぬれた部分は冷めたくなつてゐたが、胸には少しの溫みが殘つてゐるやうでもあり、或ひはそれは、着物の內側の霧にぬれぬ木綿の手ざわりのやうでもあつた。

「でも、この顏を見なさえ、もう此の世の苦勞の拔けた顏になつて。」

大崎は自分で何んと云つていいかわからぬうちに、ひとりでに、ずばりと、かういふ言葉が飛び出した。彼にとつては全く自然な、當り前の正直一方の言葉であつた。實に靜肅で平和な人間の顏が、土や垢や霧や鼻汁や唾液で穢れた皮膚の底に映つてゐるのであつた。

「どうして死ぬ氣になつたもんかなう。」

と恨みごとを繰りかへしながら、お種は、お捨の着物で死人の顏を拭ふてやつた。大崎は、腕を組み、吐息をしながら、これからの處置のことを考へてゐた。お捨の死體を背負つて裏山を越え林をくぐつて小屋へ運ぶことは難儀とはいへ、出來ないことではなかつた。併しこの死體を小屋へつれ戻つたとて、それからどうなるのだ。祖母や子供たちの驚きと悲しみと、彼等の故人への愛慕の情なぞは最早や、大崎の心にはどうでもよいことであつた。死體を小屋へ運んでも、今更どれだけの世話や供養がしてやれるものでもなかつた。お常へしてやつた程度の葬ひの上、荒莚に包んで又、この裏山を越え、林をくぐつてここまで火葬に運んで來なければならぬのだ。小屋の近くで火葬するのは忌であるし、そうかと云つて何處ででもといふ氣にもなれなかつた。出來るなら、お捨が求め選んだ死の場所で、お常の亡魂に誘はれて、霧の中を辿つて來た相違ない因緣の場所で火葬してやるのが一番よい供養のやうに思はれた。彼はこの考へを母親のお種に、ぽつりぽつり語つた。お種はただ聞くだけで返事もせずに、泣きつづけるのであつた。暫くたつてお種はやうやう泣きかすれた聲で自分の考へを言つた。

「なんぼなんでも、そんなむごたらしい、可哀いそうなことは出來ないべさ。野良犬や野良猫の死んだのかたづけるみたいなことは。火葬するのが面倒なら、何處か裏の畑の隅さでも、埋めて墓立ててやればいい。まねごとでも、湯灌して、着物を取り換へて、線香の一本も立てて拜んでやりたいなあ。そうせんことには、この嫁の親御衆に申しわけないもの。何處でどうして死んで、どんな葬ひ出してくれたかと聞かれたら、おら何と返事したらいいか。面倒でもあるべし、忌でもあるかも知れないが、そうしてやつてけれよ。お前の女房だし、生れろとから百姓仕事で苦勞のしどうしで、とうとうこんな山の中で、自分で自分ば殺ろしていつた可哀そうな女だものなあ。重いか知れんが、二人で小屋さつれて戻るべよ。」

物語るうちに落ちついて來るお種の溫い言葉は、大崎の思ひつめた考へを次第に解きほぐして行つた。大崎は永い間の發狂のお捨の世話から、急に解放された反動で恐ろしく利己的に勝手に考へたことに、少しく氣がついた。

「そうするか。そうして、火葬にせんと、畑の隅さ埋めて墓を立ててやるべ。」

と大崎は言つた。そうしてその瞬間に、彼は畑の境界に建てた、所有地標をまざまざと思ひ浮べた、彼は心の中で、あの木標の傍に埋葬してやらうと考へた。

大崎は霧でぐつしよりぬれたお捨の死體を背負つた。それは力自慢の彼にも、仲々に重かつた。彼は背負つた時、ふと、こんなに重い女だつたらうかと思つた。ずり落ちそうになるのを幾度となくつき上げて、裏山の背に登り、林の事をくぐりぬけて小屋へ戻つた。小屋の前へ來た頃

には、曠野の霧の上に、黄金色の朝日の光りが幾筋もの濃い線模様をなして映え輝いてゐた。

「お母ぁは見つかつた。……けど、死んでゐた。」

とお種は先きに小屋へ入いて行つて、爐端におどおどと起き集つてゐる祖母と子供たちに、ときれとぎれに言つた。彼等は驚きと恐怖の餘り聲も出ない樣子であつた。

「布團ば上げれよ。おつ母あのだけ、そうして置けさ。」

とお種は子供たちに言ひつけながら、自分で片つぱしから薄い布團を上げて行つた。子供たちも、ばたばたと手傳つた。そこへ大崎は、ずしりずしりと上つて來て、ぐつたりとした黑い重そうな荷を小屋の眞中へ下ろした。

祖母と子供たちは、めいめいその場に釘づけにされたやうに動かず、見守つてゐたが、突然、大聲を上げて泣き出した。

不運で不幸な一生を二十八歳で終つたお捨の葬ひも數日前に先立たせた末娘のお常のそれと全く同樣であつた。霧のために雨のやうにぬれた寒間着を脫がせ、冷めたい肌を湯で拭ひ、洗ひざらしの單衣物を着せた。寒棺は大崎が、去年刈り集めて置いた曠野の枯蘆で作つた莚莚で拵へた。黴臭ひの線香が灯され、小豆の粥が煮られた。午後は大崎一人で妻の新墾畑へ行つて、所有地標に、向つて右へ約一間ばかり離れた處へ墓穴を掘つた。それから、開墾の折りに取りのけて集めて置いた石の中から、小さい塚石になりそうなのを一つ選び出して、幾がしながら穴の處まで運んで來た。黄昏の靄が曠野の上に下りて靜寂にひたされる頃、彼は小屋へ戻つた。暗い、人の氣配の

沈み澱んだ小屋の中の通夜は、何とも言ひやうのない物淋しさであつた。厩の中の北星が、鼻をしきりに、ひいひい鳴らし、土を蹴るのであつた。

「おら家も、北海道さ來て幾らもたたんうちに、佛様が三人も出來てしまつたなあ。今度、お捨の墓が出來るで、爺さんとお常のお骨も一緒に墓さ納めることにするか。」

とお種は言つた。

「お骨になつた佛様は、その内に釧路のお寺さでも預かつて貰ふかと思つてゐたけど。」

と大崎は言つた。

「それもいいけど、でもお捨だけここでは今度の佛様は淋しがるべものなあ。」

とお種が言つた。

「爺つあんには戒名がついたけど、お常とお捨には戒名がつけられんことになつたのう。」

と祖母が言つた。これには、お種も大崎も、はつと胸をつかれた。返事のしようがなかつた。

「可哀そうに、そんな葬ひだば、佛様は死にきれんで。成佛されんべのう。」

と祖母が言つた。

「おら、その中に釧路さ行つて、坊様に頼んで戒名つけて貰つて來るから。」

と大崎はおどおどしながら、やうやくその場を誤魔化した。その夜はお通夜といつても、お通夜らしいお通夜の形をとることは出來る筈がなかつた。ただ言ひやうのない悲しみと淋しさのうちに床にもぐつた。悲しさが極まり、涙れが極まつたものに、つひに自然は深い惠を贈つてくれ

たのであらうか。大崎は夢一つ見ずに、お捨の夢すら見ずによく眠つた。

翌朝は文字通りに野邊の送りであつた。新しい墓穴までお捨の遺骸は荒莚に包まれ、大きい俵のやうに背負はれた。お種は勉造爺さんとお常とのお骨箱を重ねて兩手で持つた。祖母、鍬をかついだ秀造、藥鑵に水を入れて持つたお松が後からとぼとぼとついて行つた。土莚はみんなの啼泣のうちに簡單に行はれた。二つの骨箱が荒莚の傍に副葬品のやうに置かれた。土と青草と小石とが混じつたまま、荒莚包みを埋めて行つた。新しい土饅頭が築かれ、その上に、やや大きい野ざれ石が一切の不幸と不運とをその下に呪い封じ込んでしまふやうに据えられた。「土の下のものよ、重からうが動かず鎮まつてくれ」といふが如くであつた。藥鑵の水が塚石の上にそそがれた。お種は叢の中から春の野花を摘みとつて土饅頭の上へ挿した。そうして泣きからした、涙で汚れた顔を拭ふともせず、遺された肉親のものたちは小屋へ戻つた。

「みんなのお墓が一つ所で近いから、これから毎日詣つてやれよ。」

と、小屋の中の後かたづけをしながら、思ひ出したやうにお種が言つた。簡單に後がかたづくと、みんなの顔には、何かしら、ほつとした安堵の色があらはれてゐた。それは、併し手數のかかる面倒な病人の看護と心配から解放されたといふ安堵ばかりでなく、自分たちの住む、自分たちの土の上に、肉親の死者を通して太い根がおろされたといふやうな、腰のすわつた心地から來る安堵の方が強かつた。殊に、大崎にしてみれば、それは單に自分の所有地といふやうな感じだけではなく、今度こそは自分の生活の根を下ろし、生命のきづなをつなぎ結んだ土地だと云ふ氣

持ちにまでつき進んでゐるのであつた。彼はその上に、言ひ知れぬ生き甲斐を感じるのであつた。お捨の死は一層強く彼をこの土地に結びつけたやうに感じられるのであつた。

大崎の心はまた新しい土地の方へ動いて行つた。既に曠野の方の火入れから蒔付けが濟んでゐるので、もつと原野を見歩いて來たいと思つた。彼は幾らかでも、よい土地をもつと見つけたいといふ慾を強く感じ出したからであつた。瑞々しい春の青空が原野にいつぱいに擴がり、まだ眞白い雪を頂の鋭い峰に殘してゐる雌雄兩阿寒が遠くに眺められた。彼は南の方角へ向つて次第に高臺地から離れ、曠野の中へ進んで行つた。土地は次第に濕地らしい原野になつてきて、濕地まなこが方々にあり、散在してゐる沼には、葦や菅なぞのこんもりと繁茂した小さい浮島が幾つもあつた。そう云ふ處を迂回して、そちら、こちら歩いてゐるうちに、一面に擴がつた沼澤地に行く手を妨げられて終つた。そこは幾つもの泥沼や濕地まつこが細い溝のやうな泥川によつて連がり、水面には大小幾つもの浮島や流が散在してゐた。大崎は、先へ行くことをあきらめて、そこから引きかへそうと思ひ、暫らく佇んでゐると、ヒユン、ヒユンといふ鳥の鳥き聲と翼を鳴らす音が聞えた。彼は何鳥だらうと思つて、聲のする方を眺めると、右手にあたる浮島の上で、二羽の丹頂鶴が互に舞ひ踊つてゐる樣子が眺められた。一羽の丹頂鶴が突然、大きい、白い翼をばつと擴げ、頭と肢とを前へぐつと突き出し、胴體をひどく前かがみにつんのめりそうにして、足も地につく間もないやうに相手の方へ眞直に突進する。かと思ふと、急にぐるりと廻つたり、翼をばたばたとうつて、四、五尺ほど跳び上つたりして有頂天な跳躍を繰りかへすのであつた。大崎

はかなり暫らく眺めてゐたが、丹頂鶴のそういふ習性をわかる筈もなく、ただ間近かに鶴の戯れ遊ぶ樣子を眺めて、物珍しく思ひ、その邊に巣があるのだなあと考へた。

彼は小屋へ戻ると、祖母に早速その話をして聞かせた。

「巣のあるとこがわかつたで、そのうちに鶴の卵でもとつて來て食はせるど。」

と大崎は元氣よくいひたした。

「いや、いや、そんな無慈悲なことするもんでない。鶴つていふ鳥は人間よりも、自分の子を思ふ鳥だつて言ふからのう。鶴の卵なんか、欲しくはない。でも鶴の飛んでゐる處は一度見たいもんだのう。」

と祖母は言つた。

「春になつたから、そのうちに、この邊さも飛んで來るか知れんから見せてやるよ。」

と大崎は慰め顔に機嫌よく言つた。

それから暫くたつた或る晴れた日の朝、小屋の前で、これから仕事に出かけようとしてゐる大崎の頭上高く、強い翼の音がして、一羽の鶴が飛んで來るのを見つけた。

「お祖母、鶴だ、出て見れよう。」

と大崎は叫びながら小屋へ祖母をつれ出しに行つた。このひと冬で、又、めつきり足腰の弱くなつた祖母の手を引つ張るやうにして、再び外へ出て空を仰ぐと、彼の眼にはまだ、飛び去りゆく小さい鳥影が見えたけれど、視力の衰へた祖母はただ、うろうろと、大崎の指す方を仰ぐだけ

で、何も目にとまらぬ様子であつた。

「おらには、何も見えんがのう。」

と言ふ祖母の呟く聲を聞いて、大崎は、はつと胸をつかれた。

「こんど、鶴の棲んでゐるとこさ連れて行つてみせてやるから。」

と大崎は言ひまぎらした。祖母の視力の衰弱が他所目に見る以上に進んでゐるらしいのに大崎は今更、祖母の老衰ぶりを驚くのであつたが、併しもつと悪ひ眼病が祖母のみでなく、お種をも執拗に襲ふてゐるのに氣がつかないでゐた。然も、本人の祖母もお種もが、それは老齢のさせる、避け難い宿命としか考へてゐなかつたのであるが、眞實は、極度の榮養缺乏から白内障にかかつてゐたのであつた。

「目がめつきり薄くなつて困つた。」

「目が遠くなつたせいか、物がよく見えんようになつて不自由だこと」

と同じ愚痴を二人はこぼし合ひながら、それはすべて迫りつつある老齢のせいで、やむを得ないこととばかり思ひあきらめてゐた。從つて、大崎自らも、老齢には寧ろ當然のこととして格別、氣にもかけずに過ごしてゐたのであつた。併し祖母や母親にしてみれば、何かしら、世の中のものが日毎にぼやけて眼底から影形を消してゆくやうに思はれて、弱くなつた心は痛いほどの寂寥にとお込められるのであるが、彼女たちの、生れて以來身に泌みこんだ無智の厚い垢がこの寂寥をどうにもすることお出來ないのであつた。

大崎は殆ど終日しよんぼりしてゐる祖母を慰めてやりたいと思つて、或る日、みんなを連れて濕地へ丹頂鶴を見せにつれてゆくことにした。曠野の上には定まつた路はないが、濕地まなこや流れや木立を迂廻しながらも、生れ落ちるとから山野で育つた農夫の勘でこの前に鶴のゐるのを見た浮島のある沼澤地へみんなを連れて來た。

「丹頂鶴つて鳥はこんな濕地にゐるんでなくて、高い松の木の上に巣をくんでゐる鳥だつていふことだがのう。」

と祖母は沼のほとりの草原に立つて、やうやく背のびして空を仰いだ。

「でも、おらの見たのは、あそこの浮島だよ。あそこに二羽もゐたよ。あれは、雌と雄とだべもの。だから、あそこの島にきつと巣を拵へてゐるんだよ。暫らく、ここに待つてゐるべえ。」

と大崎が言つた。みんなは、そこの草原に腰をおろして鶴の飛ぶのを待つた。その内に子供だちは待ち遠うしくて退屈し、騒ぎ始めた。

「だめだつてば騒いでは、鶴は賢い鳥だから、すぐ逃げて行つてしまうぞ。」

と大崎は低い聲で子供たちを叱つた。叱られた當座は、子供たちは少し靜まるが、やがて間もなく騒ぎ出すのであつた。大崎自身も待ちかねて來た。

「たしかに、あの浮島に巣を作つてゐるに違ひないんだ、おら、ちよつと行つて見てくる。ねれば、あそこから飛び立つから、よく氣をつけて見てゐれよ。」

大崎はそう言つて着物を拔ぎ、褌一つになつて沼へ足を踏み入れた、彼の足を踏み入れる泥の

中から、ぶくぶくと泡が飛び出で、進むに從つて泥が深くなつて行つた。併し落葉の沈積や蘆の古い腐蝕が厚く底を埋めてゐるので、水にひたるのは腰の邊りまでであつた。彼は泥沼の中を拔き足、さし足して浮島へ近づいた。さうしてもう少しで浮島へ達しようとする時ふと浮島を覆ふ叢の中から、自分をぢつと凝視しつつ、今にも襲ひかからんとする、鋭い光る目と鋭利な劍のやうな黑い長い嘴を見た。

「あつ。」

と大崎は思はず叫んで泥沼の中に立ちすくんでしまつた。彼は白刄を胸元に突きつけられた氣持がした。彼は進むことも退くことも出來ず、また、目を傍へそらすほどの餘猶もなく、ぢつと相手方を見つめるより他にしようもなかつた。彼の目に、やうやく相手方の樣子がわかつて來た。叢の中のその場所には、丁度塵溜のやうに木片や小枝や雜多のものが集められ、それを敷藁のやうに敷いて、その上に一羽の丹頂鶴がどつしりと居座はつてゐた。長い首から、背や胴へかけて、白い羽根はうす黑く汚れ、身體は痩せ衰へてゐるやうに見えた。ただ、目だけは爛々として、燃え上るやうに鋭く、黑い長い嘴か、今にも彼に向つて突きかからんとして、隙をねらつてゐるやうであつた。大崎は息が詰る氣持だつた。突然、けたたましい、ケエーン、ケエーンと聞える。叫ぶやうな、張りのある鳴き聲が叢の中から開えた。その鳴き聲は春の大空に隅から隅まで響き渡る澄みきつた聲であつた。大崎は思はず、はつと、空を仰いだ。その聲の木霊がしたやうに思はれた。大崎は叢の中の眼と嘴しが恐ろしくて、又すぐ叢の方を見つめた。その時、急

に、何處からか、空氣を切り裂く強い翼の音が頭上間近かに響いて、その瞬間に自分の頭を襲の一擊で打ちのめされたと思つて、はつと沼の中で前へのめつた。遠くで人の聲が幾つもした。彼は立ち直つて、頭上を仰ぐと、一羽の逞しい大鶴が狂氣のやうに低く舞ひ降り、けたたましく鳴き叫んで彼の上にさつと襲ひかからんばかりの氣配であつた。彼は兩手をやたらに振り、腰で沼の水を押し分けるやうに岸へと逃げ出した。

「早く逃げれ。危いぞ、頭やられるな。」

と叫びながら、大崎は幾度となく、大鶴の襲擊を頭上近くに感じ、そのつど、水に濕れてゐるもののやうに沼の中にのめり込んだり、手足をばたばたさせたりして、もがき苦んで、やうやく元の岸へ辿りついた。大崎を襲ふた大鶴は、最早やその岸まで追ふては來なかつたが、浮島の上を低く飛び廻りながら、巢ごもり中の雌と生れ來るべき生命とを護りながら不思議な外敵を絶えず警戒して鳴きつづけてゐた。が、大崎は裸體のまま着物を抱え、みんなを連れてかたり逃げて來てから一と息ついた頃には、雄鶴も浮き島の巢に下りたと見えて、空にはその飛ぶ姿が見えなくなつた。大崎はとある流れに來て、泥だらけの身體を洗つて着物を着た。

「お祖母、鶴はよく見たべ。生れて始めて見たべさ。」

と大崎は照れ臭さそうに言つた。

「何んだか、白いもんが見えたけど、あれが丹頂鶴つて鳥かのう。お前さかかつて來たでないか。惡い者が來たと思つたべか。めつたに人間の來ない所だべからのう。だが、丹頂鶴が棲んで

ゐる土地だと云つても百姓にはいい土地でばないな。まるで、濕地ばつかしでないか。おらは、丹頂鶴の棲んでゐるほどの土地なら、百姓にだつて、どんなにいい土地だべかと思つてゐたに。何せ、鶴は千年も生きると云ふことだからのう。それが、こんな濕地だらけの土地だば、鶴にはよくても、百姓の生きられん土地でばないかのう。おら、まるで、いい夢ば見せられてゐたやうなものだ。」

と祖母は、終りは全く獨り恨み泣くやうに言つた。大崎は默つてゐた。みんなは又、小屋へと歩き出した。

「鶴は、一體、どうしてあんなに怒つて、むかつて來たのだべ。何んにも、しなかつたのに。」

とお種が言つた。

「おら、始め、氣がつかなかつたけど、向ふの島の岸の草原に巣があつて、丁度、雌鳥が卵を抱いてゐたんだよ。だから、氣が荒くなつてゐる。そこさ、餌をとりに行つてゐた雄鳥の奴が巣さ戻つて來て、おらを見つけたで、まるで氣狂ひになつて飛びかかつて來たのさ。」

「そんなら、氣が立つのも、當り前だなあ。」

とお種は、全く鶴に味方するやうに言つた。

その夜、爐端で、祖母の口から愚痴つぽい鶴の話が出た。元來、祖母は愚痴つぽい話の嫌ひな性分であつたが、その日の鶴見物の出來事は彼女の考へに餘程の打撃を與へたもののやうであつた。それは、彼女が、永い間、慢れてゐた丹頂鶴を實際にはつきりと自分の眼で見ることが出來

たかどうかといふことではなかつた。眞實の處、彼女の眼は、丹頂鶴の姿をただ白いものとしか視ることの出來なかつたほど衰へてゐたのであつた。彼女がいい夢を見せられてゐたのではないかと自ら疑ひ、且つそう考へ、信じなければならなくなつたのは、この鶴の棲む土地といふのがただ一面の濕地に過ぎないといふことを、しつかと踏む自分の足の裏にぢかぢかに知られたことであつた。彼女は始めて、自分の肉親の孫によつて、騙されてゐたことを情なく感じたのであつた。

「鶴、鶴つていつて、おらとこだまして、こんな土地さつれて來たけど、ここの土地だば、百姓ば喰ひ殺す濕地まなこばつかしの土地でばないか。おらたちは、みんなこの土地に喰ひ殺される運にきまつたのだのう。」

と祖母は息をはづませて言つた。

「それは廣い原野だもの、處によつては濕地まなこもあるさ。でも、そうばかしでもない。裏の土地みたいに立派に畑になる處も、木炭や薪のいくらでもとれる林もあるんだもの、そんなに今からがつかりして愚痴いふことないさ。まあ、安心してゐなさい。」

と大崎は高びしやに出るより他に言ひやうかなかつた。

「どんなに惡い土地だつて、借金取りよりいいにきまつてゐる。うんと、がんばつて開墾せば、土地はおらたちを見殺しにするわけはない。そこが土地の有難いとこさ。」

と大崎はさも自信ありげに言つた。併し彼は債鬼の惡意以上に、自然の假借なき吝嗇といふも

のが嚴存することを知らなかつた。百姓として生れ、百姓として育ち、百姓として働き、その生涯を土について勞苦しながら、自然の眞實のこの一半面を知らなかつたのである。

祖母とお種とを襲ふた榮養欠乏に原因する白内障は老衰の祖母よりも、お種の方に、ぐんぐんと惡化の歩度を進めて行つた。お種は次第に深くなる苦にがしい皺を眉間に刻みこみ、常に口癖のやうに、「暗い、暗い、氣が滅入りそうだ」と言つて、耐えらねぬほど長い一日一日を暮した。そうして祖母が老衰の裡にも、細々ながら生き繼ぐ生命の力を持續してゐるに對し、お種は自分で自分の命を嚙みさいなむやうな憂鬱症に陷入りつつも、自分でそれがわからず、また大崎もそれに氣がつかなかつた。

お種は何もかにもが非常に氣になり、心の重荷となつて、何かが自分にのしかかり、自分を壓しつけるやうに思はれた。とりわけ、虹別で死に別れた夫勉造のこと、濕地の沼で溺死した孫娘お常のこと、氣が狂つて山の林の中で首を吊つて死んで行つた嫁のお捨のことが一つ宛、たつた今目の前でそれが起つたやうにまざまざと思ひ出されるばかりか、それらの惡夢のやうな幻想の中の心配や悲しみが、實際の重石を背中にくくりつけられたやうな、實體感となつて感じられて來るのであつた。一つの悲しみ、一つの不安、一つの恐怖が、それぞれ一つ一つの重石となつて背中や肩の上に、永久に取り除けられる望みなく、かへつて次から次へと積み重ねられてゆくやうに感じた。その上に、絶えず不安と恐怖とが、新たに襲ふて來た。それは開墾畑の蒔付後から夏への天候の極端な不穩不順がそれであつた。

虹別原野で大崎たちの苦しめられたのは、霜害と霧害で、霜害のことは郷里にゐた折りにも、かなりひどい經驗を嘗めて知つてはゐたが、霧害については初めての經驗なので全く途方に暮れる思ひで、入地以來、來る年も、來る年もそれに苦しみ惱まされてゐた。それが此の新しい土地では、更に一層ひどいとは夢にも思はなかつたので、その驚きは底知れぬものであつた。虹別原野では東方の野付水道から上陸して斜里岳、武佐岳、サマケヌプリ、標津岳かけての連山から南麓裾野の高原へと濃霧の堆積が怖るべき低濕の長い期間をもたらし、冷害を地上に殘すのであるが、大崎のこの新しい土地では、その土地が高原でなく、泥炭地であり、四、五萬町歩以上と云はれる大濕地なので、太平洋から北上して、この釧路原野に一つぱいに覆ひかぶさつて來る濃霧の堆積は、虹別原野の比ではなく、怖るべき冷害をもたらすのであつた。

冬の嚴寒の甚だしいだけに、積雪の量は割合に少く、過ぎ去つてみれば、寧ろ積雪も割合に早く消えたと思はれた。濕地の出水は仲々引かなかつたが、四月、五月は割に天氣がよく、水ミしい地面が乾き、草木の芽だつ勢も仲々に强かつた。大崎一家は最早や自分たちの手には殘されてはゐないと思ひ込んでゐた希望と元氣とを本當に久しぶりで取り戻すことが出來たやうな心地がした。冬の間に伐り拂つた林に、火を入れて燒き、粗い畑の畝にその年の食糧になるべきものを蒔き終つたとき、この希望と元氣は一層烈しく燃え上つた。新しい土地の開墾は九分通り成功したやうな氣持ちであつた。曠野の方へも、餘力を驅つて火を入れ、耘じ、種子を下ろした。生活は日度が立ち、生命は大丈夫生きのびられる確信がついた。

と思つた瞬間に、一切は逆轉を始めたのであつた。末娘のお常の上に先づその先き觸れが突然現はれたのであつた。この一家の中で一番可愛がられてゐた小娘が喜々として遊び戯れてゐる間に、水に溺れて死んでしまつた。その悲しみの消えぬうちに、深い霜が曠野に下りたり、時ならぬ雹が眞白に降り溜つたりして、丁度、地上に顔を出した作物の芽を、冷氣を以つて燒いてしまつた。多少蒔付と發芽の遲れてゐる作物にも、恰も時期を親つてゐたかのやうに、やうやくそれらの伸びかかつた時を正確に見定めて霙と霰と霜とがやつて來た。畑は散々である。その後に、急に暖い天氣があらわれて、冷氣で燒いたものを、今度は腐敗の手に渡した。蒔き直さうにも、大崎には貯ひの種子はもはやなかつた。彼は一切の春蒔の種子といふ種子は大地に下ろしてその確實な報酬を期待し信頼してゐたのであつた。女達の不安が九分九厘まで實現したのであつた。併しかうなれば、更に次の冒險をしなければならなかつた。食べるものをもつともつときり詰めて、一粒の種子でも地に下ろさねばならぬと思つた。齒を喰ひしばつてでも、一粒の種子を數十、數百の結實に導かねばならぬと考へた。種子袋を拂ひ、空俵をはたいて種子となるべきものを再び蒔き付けた。併しそれは氣休めにもならぬ程のほんの少量で、かへつて一層氣をあせらせるのであつた。天氣がやや暫らく續いて、畑からも、曠野からも、むつとする程の腐敗の臭ひが草や土の香りと一緒に漂ふた。

「今年も作は駄目だなあ。」

「お前が心配氣に呟いた時、大崎は胸中、最も恐れてゐたことを、ずばりと言ひ當てられて、

思はず、はつとした。それは自分の知らない、然も自分よりも遙かに強い力を持つた、天とか、或ひは、神とか言ふやうなものの手で、自分の獨り祕かに怖れてゐたものを、これ見ろとばかりに掴み出して見せられたやうであり、或ひは、自然の稔と收穫を司る農作の偉大な神があつて、その思ひのままに支配する、年々の豐凶を的確に豫言するもののやうでもあつた。そう言ふ不安に閉ぢ込められてゐるときに、お捨の發狂とそれに續く縊死騒ぎが起つたのであつた。

「氣をつけれや。悪いことは重なるもんだと云ふから。」

とお種が言つた。その言葉は大崎には、たまらなく忌な感じを與へた。それは、かう云ふ凶事の重なつたことを首肯し、正當化するやうにも聞こえ、又他方では、更に他の凶事が重ねて起こるぞと言はんばかりの豫言のやうにも聞えるのであつた。

「そんな、縁起の悪いことば言ふもんでない。」

と大崎は、あわてて怒るやうに打消した。

併し自然は眞實に、その無遠慮な、用捨のない運行によつて、自身の意志を表はすもののやうに、六、七月の二た月の間、曠野を深い、厚い、冷い濃霧で埋め盡したと言つても過言でなかつた。恨めしそうに、又おびえ切つた目を仰ぐ大崎の頭上には、大空の代りに、濃霧があるばかりであつた。黴臭い濕氣と腐敗と共に、一切の草木作物の生育が停止したやうに思はれた。生育の停止どころか、それは萎縮し、立枯れ、地に伏して形もなく消えてゆく有様であつた。

「駄目だ、もう駄目だ。」、

大崎は毎日、毎時間、胸の中で獨り言を繰りかへしてゐた。そう繰りかへすうちには、今日にも濃霧が晴れ上つて作物がぐんぐん生育を取り戻してくれはしまいかと言ふ空頼みにすがりついてゐるのであつた。併し午後に僅かの時間、切れ目を見せることがあつても、夕暮から朝へ、朝から日中へ、霧は霧を生み、冷えわたつた土までが自ら濃霧を吐き出すやうに、曠野一面に深く霧立つのであつた。七月終りから八月には、遅ればせの天氣と暑氣があわただしく訪れて來たが、十三日のお盆の聲を聞かぬうちに、早くも涼しさが冷氣と共にやつて來た。此の年のお盆は大崎一家にとつて、たまらなく寂しいお盆であつた。虹利で死んだ父勉造の新盆だけではなく、お常とお捨の新盆でもあつた。一年の内に三人もの肉親を亡くしたことは、何んと言ふ不幸に見込まれた家だらう、と祖母の嘆くことは、餘りに當然すぎて、無理のないこととは思ふが、その愚痴を餘り繰りかへされると、大崎にはその一切の責任を自分に負はされるやうに思はれて、つひ焦らつくのであつた。

「もう、そんなこと、言はないでけれ、おらだつて、喜んでゐるわけではないから。」

と大崎は、つひ、突慳貪に言ひ放つた。

「でも、これから先きどうする氣か、おら、それが心配だでのう。おらたちの家のものは、この新しい土地で、一人づつかうして死に絶えてゆくのかと思ふと、お先祖様に濟まんと思ふでのう。おらは、もうどこで死んでも、あきらめてゐるが、これでは大崎のお先祖様に何んとおわびしていいか。せめて、秀とお松とも一人前にしてやり度いもんだけどのう。」

と祖母は、ひたすらに賴むやうにしみじみ言ふのであつた。祖母にしてみれば、大崎一家の運不運や、可哀想な子供たちの運命の綱が、神佛の手の中に在ると云ふよりは、最早や自分の骨肉の孫でありながら、正體のわからぬ、不氣味な男で、甲斐性のない人間の掌中に、握られてゐるやうで恐ろしかつたのであつた。

さうしたところへ、凶悪な出來事が更にまた起きた。それは、彼等にとつては思ひもよらない、不意の不幸な出來事のやうに思はれたが、併し本當は彼等が事物の眞實の推移に氣づかなかつたと云ふに過ぎない出來事であつた。見方を變ひれば、それは偶然ではなくて眞に必然であつた。起こるべきことが起こつたのであつた。それは母親お種の不幸な死である。お種のかねて侵されてゐた憂鬱症は、氣候の異常な不順による大冷害で作物の成育、牧穫が全く見込のたたぬまでに被害した心配に加へて、白内障が急激に進行して來たのを苦にして、夜中にこつそり小屋を抜けだし、裏山の林に入つて縊死したのであつた。翌朝になつて大崎が氣付いた時に、大崎は驚き、嘆き、悲しむよりは、やり場に苦しむ程の激しい怒りを不身に感じ、言葉も出ず、わなわなと震ゐてゐるばかりであつた。彼は、狂暴に近い、ひどい怒りに包まれて、母親の死體の頭を、ぐわんと一つなぐりつけてやりたいほどであつた。彼は固く拳を握つたまま思はず。

「馬鹿！」

と怒鳴りつけた。彼は不幸な母を悲しんでやる氣持ちも、悔んでやる氣持も起らず、ただ遣り場のない怒りだけに包まれた心地で野邊の送りを濟ませ、遺骸を所有地標の傍に埋めて、塚石をそ

の上に置いた。その葬ひの終つた後で、やうやく彼には、自分の氣持ちが全部、怒りの塊りとなつて表はれたわけがわかつて來た。彼は母親のお種に、生活と生命との最も深い奥底で誰よりも強く頼つてゐたのであつた。自分の新しい土地の開墾が、どのやうに悪い結果に陷入つても、母は、あくまでも自分を慰め、助けてくれるものと深く、固く信じ切つてゐたのであつた。一介の農夫であり、荒くれた男ではあつても、母は自分を最後までも、見捨てずに救けてくれるものと、本能的に信じ切つてゐたのであつた。まして、父親と妻は死に、祖母は老衰し、二人の子供はまだ幼い今の場合、母以外に自分は誰を頼りにすることが出來よう。それは母自身だつてよくわかつてゐることではないか。それだのに、おらを置き去りにして、勝手に死んで行つたのだ。そう云ふ氣持が大崎の怒りであつた。嬢端で八月末の冷えて來る夜氣を背に感じながら、かう考へて來ると、大崎は始めて、ぽろぽろと大粒の涙を膝の上や灰の中へこぼした。寂寥はこの大崎の氣持の折れ崩れたのを覗ふやうに、急にひしひしと彼に迫つて來た。彼は思はず、周圍を見廻した。小屋はまた一層廣くなつたやうに思はれた。彼の傍では老衰の祖母と身體の細い二人の子供が、つくねんと座つて、碌に實の入らぬ唐黍を焼いてぼそぼそと食べてゐるのであつた。大崎は思ひ出したやうに、つくづくこの三人の姿や顔を見た。そうして思はず心の中で「ああ」と咳いた。

「せめて、秀造とお松が二十歳近くになつてゐてくれれば、畑仕事だつて、どうにか出來ように。今では、三人とも、食ふだけだ。ああ、よくも食ふものだ。」

とあきれ顔に三人の食べるのを見守つてゐた。祖母は長壽の性か、老衰して眼が不自由になり、耳も遠く、足腰も弱くはなつたが、食べるものは、實によく食べるのであつた。その夜も、唐黍の後でよく實の入らぬ南瓜を煮て、それをなめるやうにして食べてゐるのであつた。

「おらも、もう永いことはないと思ふから、その時になつたら子供たちをどうしたらいいか、閑の時に、よく考へて置いてけれのう。それさえ、きまれば、おらはもう安心することにするよか、しかたがない。でも、お前はまだ若くて、女手ないと不自由だから、何んなら虹別の津田の爺さんさわけ言つて、後添を貰ふやうにしたらどうだべか。そうせば、稼ぎ手が一人殖えるから、お前も仕事するに都合よかべさのう。」

と祖母は思ひついたやうに言つた。この祖母の言葉は大崎にも思ひがけない啓示のやうに思はれたが、祖母自身にとつては一層すばらしい思ひつきだと考へられた。

「そうだ、常造に後添を貰へば、子供たちや、自分や、常造の世話をして貰ふことが出來るばかりか、野良の仕事で家の助けになるのだ。こんなよい考へはない。なぜ、もつと早くお捨のゐなくなつた時にすぐ考へつかなかつたのだらう。それに限る。それで大崎の家も救はれるのだ。」

と祖母は有頂天に思ひつづけた。併し大崎には、成るほどそれは非常に實際的で、便宜で、一番自分の爲めになることには違ひないが、すぐ二つの點で彼の氣持ちを抑へ、妨げるものがあつた。その一つは、何んと言つても、お捨の死であつた。これが、通常の病死でもして、大崎自身の手で充分の野邊の送りをしてやつたのなら、場合によつては、間もなく後添を貰ふ氣にもなつ

たらうが、あの死にやうでは未だにお捨の魂が曠野の上に彷徨うてゐるやうに思はれるのであつた。併しもう一つの理由は、それよりも根強いものであつた。それは今更、虹別の津田爺さんの處へなんか顔を出されはしないと言ふ意地であつた。これが大崎には挺子でも動かすことの出來ぬ意地であつた。

「虹別さなんか、今、どうして行かれるもんか。成功して一人前の人間になつてからさ。」

「そふ云ふ意地もあるかもしれんが、もしこの土地が本當に見込がないと思つたら、今の内に釧路さでも出たらどうだかのう。今のうちなら、北星もゐるので馬車追したつて食べられるし、町でなら後添貰うにも便利だべもの。かうなつたもんなら、いつまでも出來ない土地さ嚙りついてゐたつて、身が立たんことになるばかしだと思ふがのう。」

と祖母は言つた。この言葉には大崎自身が非常に驚かされた。

「おばば、どうしてそんな考へに變つたのけえ。百姓やめるなんて、おばばは大反對でなかつたか。折角、新しい土地來て、まだ一年もたたぬうちに、こんどは町さ出るなんて。」

と大崎は驚きと不審とに包まれて言つた。

「百姓が出來るもんなら、いつまでも、お先祖樣のなさつた百姓して行きたいもんだけど、今ぢあ、その百姓も出來んようになつたでばないかのう。土地はあるけど、この土地は何んにも出來ん土地でばないか。この南瓜や唐黍食べてみれば、よくわかるでのう。百姓するには、お天陽樣が一番大事なのに、そのお太陽樣は、この土地では夏でもお隱れだもの。お天陽樣のあらつしやらぬ土地では百姓は出來んことは、昔からわかりきつたことだもののう。それから、おら家では、もう稼ぎ手が足らなくなつたもの。食べる口は四人分あるのに、稼ぎ手は一人だもの。いくら稼いだつて追ひ付きはせんもののう。お前さんが獨りで苦勞するばかりだべさ。家のよくなるときにはみんなの手が揃ふて、みんなが合せて力になるもんだけれど、惡くなると、てんでばらばらに死んだり弱つたりして、力がもがれていくもんだからのう。そこのところをよく考へてみるがいいべさ。お天陽樣に賴らんでも出來る仕事が町なら何か、かにか見つかるべさ。元手がなかつたら、北星ば賣つて拵へるといいべもの。可哀想だけど、しかたがないからのう。おらたちだつて、こんなに苦勞しに、北海道さ渡つて來たわけでばないけど、おら達に運がなかつたんだべもの。虹別では、みんな、どうしてゐるべかさ。あそこも今年もこんな凶作だべかのう。」

長々と祖母は言つた。

「虹別だつて同じさ。いつになつたら、作らしい作がとれるのか。北海道、北海道つて言ふけど、碌な土地はない所だなあ。」

と大崎は言つた。

「いい所はもうとうに、ほかの人が作つてゐるのださ。今頃出かけて來て、いい土地が殘つてゐるわけがないべさ。」

と大崎が自ら嘲り、自ら諦め切つたやうに言つた。祖母のこれらの言葉と考への變化は大崎の心に何かしら大きい、ゆとりを與へたやうに思はれた。この新しい土地そのもの、その土地の不

毛、一家の不運、困窮なぞにのみ固く縛りつけられて、考へ方を一寸でも轉換してみると言ふ心の餘裕を少しも持たぬ行き詰りが、少しくゆとりを見せて來たやうに感じた。そうして祖母の咳くやうに言つた言葉は、次第に彼の心に大きい意味を持つて見られるやうになつて來た。祖母は永い歳月の經驗と苦勞とのせいで、人間が生き拔けるといふことを身を以つて知り得てゐるのだと思はれた。彼は祖母から始めて生活の根底らしいものを知り得たと同時に、祖母の遺言をきかされてゐるやうな氣がした。そうして、不幸にもそれがやがて實際に祖母の遺言となるように、祖母の壽命に最後の幕が下りつつあつたのであつた。

祖母お若の肉體の老衰と精神の老碌とが、急に目立つて來た。心身の一切の箍が急に緩んだ樣子で、全くだらしなく老ひ呆けて來た。座つたきりで日を過ごし、始終居眠りをしてゐた。一番厄介なのは、夜も晝も、小便をたれ流して、一向、平氣でゐることであつた。その上、大便をすら、しくじることがあつた。

この大、小便の後始末には、男手の大崎は最も困却した。やうやく、九歳になつたお松では、その世話は出來るわけがなく、大崎はつくづく女手の必要なことを、骨身にこたへて知つたが、今更どうすることも出來なかつた。その樣な老呆けても不思議なことに、何か食べものを口へ入れて居たがるので、生命の力がまだ生きつづけやうと努めてゐる不可思議さに、大崎はぞつとするやうな畏れを感じた。彼は祖母の生命のしぶとさに全く驚くほかはなかつた。そうして、かうも息の續くのは、つまり心臟がよほど强く出來てゐるのだらうと考へて、今はただその頑强な心

臟の働きが自然に鈍り、そのまま自然にいつの間にか消えて行くのを見送るより手の施しやうがないと思つた。やがて、食べ物をなめたり、しやぶつたりする力が次第に衰へて、水ばかりを欲しがる日夜が少し續いた。口に入れた水を靜かに味つてゐるやうに、口の中にためておいて、やがて、ごくりと飲み込む樣子は、さもさも水の味を味ひ樂んでゐるやうに見え、又その水ならば、いくらでも與へ得るので、大崎はうれしかつた。併し祖母の水の飲み方は、水の味を樂むのではなくて、實はそうしてでなければ、今は最早や一口の水も咽喉に通すことの出來ぬほど、氣力が衰へて行きつつあるのであつた。

やがて、その水をも欲しがらぬやうになり、呼吸が粗く、次第に吸ふ息よりも、吐く息が强くなり、乾いた、かさかさの口がだんだん開いて來た。顏色がめつきり蠟めいて來た上に、頰が、がつくりと落ちこけ、目は半眼にあいて動かず、目やにが固くこびりついた。時たま、口をもぐもぐさせたが、何んのことか全くわからなかつた。涙がいつの間にか溜つて流れたのか、一筋の跡を各々の頰に殘してゐた。大崎の目にも、いよいよ最後が近づいたと思はれた。今ではただ、最後の息を靜かに引きとらせるほかには、何一つとして彼の爲し得べきこともなく、願ひ得べきこともなかつた。彼は、そつと寢床の裾へ手を入れて、ぐつと、突きのばされた、堅い骨だけの足に觸つて見た。足は棒のやうで、冷めたかつた。彼は、はつとして手を引き、顏を凝視した。老樹が根元の方から黃葉し、落葉するやうに彼女の老ひたる足と手とが冷え、次第に、併し誤ることなしに、死が彼女の全身を領して行つた。今になつては、冷めたく醒めきつた大崎の目には

涙らしいものも光らなかつた。何にもかにも濟んでしまつた。起り得べき不幸と不運との一切は、起り盡してしまつた。人間の一生の中の、こんなに短い月日の間に、かうも不幸が重なつて起ることが出來るものなのであらうか。だが、併し見るがいい。それが本當に起つたのだ。然も、このおれに起つたのだ。

彼は全く、あきれかへつて自分といふ人間一人の短い月日の中に起つた物事を考へるともなく、ふりかへつてみて、そう思つた。そうしてその馬鹿馬鹿しいほどの無慘さに、おどろくばかりであつた。生といふものは、こんなにも恐ろしいものなのであらうか。これが眞實に人間一人の享くべき生であるならば、それは生き甲斐のある、樂しいものなのであらうか。全身の努力と辛苦とを以つてそれにすがり付く程の値うちのあるものなのだらうか。そんなことを彼は漠然と考へずにはゐられなかつた。併し彼は自分で解答を引き出すことは出來なかつた。彼が思ひつき得たことは兎に角、生きねばならぬと言ふ心配だけであつた。それから、もう一つは、もしこの土地が、この土地の天候が、もう少し惠み深いならば、自分はこれほどまでに不幸に襲はれずに普通の百姓並に生きて行けるだらうにといふ恨みであつた。併し自然にしてみれば、嚴格な規律を以て正確に四季の繰りかへしと氣候の循環とを運行させてゐるのだつたらう。四、五月に好天氣を與へて、六、七月に濃霧を送ると言ふことも、自然の高所から見れば、それほどの不順不穩ではなくて、正常であり、當然のことかも知れない。

從つて罪は、それに適應した生活と生命とを持たぬものの側にあるのかも知れない。見るがい

い。丹頂鶴は自然な生育に非常に適當した棲息地をその不毛の泥炭地に見出してゐるではないか。併し大崎一家にとつては、苛酷で冷膽な自然の處置であつたと言はなくてはならぬ。彼は死の曠野に投げ出されてゐる自分を、今やうやくにして見出したのであつた。そうして、今はただ、鬱ひかかつて來る死の手から逃れることだけが殘されてゐるのに氣がついた。自然に對する恐怖感と死の恐怖とが、盲目的な力を彼の胸中で振ひ始めたのであつた。

大崎はそういふ氣持で、祖母の痩せこけた遺骸を、裏の開墾畑の所有地標の傍に運び新しい土饅頭の中へ埋めた。所有地標は今では全く一家の墓標になつてしまつた。收穫のない秋が大崎と子供二人の前に立ちはだかり、否應なしに、生か死かを選擇させずにはおかぬといふやうな脅威の齒牙をむき出してゐた。二百十日も二百二十日も恐ろしく荒れ、天候はぐんぐん冬へ向つて馳けてゆく氣配であつた。大崎は、しきりに、遺言になつてしまつた祖母の言葉を思ひ浮べて、二人の子供の暗い顏を見守つて思ひ惱むのであつた。

この曠野では八月は既に夏でなかつた。季節のあわただしい歩みは早くも草木の生命を凋落へと馳り立てた。曠野は綠の色が褪せて黄ばみ、赤らみ、褐色に錆びを帶び、やがて赤黑く枯れて行く。その眺めの間に明黄色に枯れあがつた蘆の密生地帶と、冷い秋雨や霜を浴びるにつれて、あざやかに色の冴えて來る眞青な草地が僅かに明るい模樣を染め、秋の冷徹澄明さを一層ひき立たせた。そういふ九月は、更に秋の盛りを以つて一年中の天候の不順、寒冷さを償ふやうに秋晴れの陽光を曠野の上に送つてよこすことがあつた。併しその秋晴れの日和とても長續きはせず、

一日二日で忽ち崩れて、秋の暴れや、厚い霜や、激しい霧や、深い秋霧が續けさまに見舞ふのであつた。

十月には、太陽の明りもうすれ弱はり、冷いもの影を曠野の上に落して、ぢつと動かず、日は急に短かく、暗く、冷めたくなつた。曠野の草木がひたすらに凋落へと急ぐと同樣に、大崎の畑のものも、貧しく乏しい收穫で慘めにも朽ち枯れて行つた。曠野の冷い氣候と土壤との中に自ら生れて育つた野性の草木は、それでもまだ何處かに逞しく勁い生命の抵抗力と適應性とを多年の間に自ら育成してゐたが、虹別開墾地で採種されて始めて此處の氣候と土壤とに培はれた種子は充分の生長力と適應力とを持つてゐなかつたと考へるより他はない程、みすぼらしい、脆弱な發育ぶりで、その實や種子は來るべき年のために充分な發芽力を約束し得るか否か、あやぶまれるほどであつたばかりか、この長い冬を通して大崎と二人の子供の口さえも養ひ支えるに足るか否かが、心配な位に乏しいものであつた。馬鈴薯も大豆も小豆も蕎麥も唐黍も南瓜も秋大根も樣なものは何一つとして出來なかつた。

この新しい土地がかうも作物を受けつけぬ土地だらうかと、大崎は胸中の不安と恐怖とをそのまま面上に浮べながら考へつめて來ると、この土地は作物の種子のみならず、大崎一家の生命をさえ受け入れようとしない土地なのかも知れないことを、言ひやうのない不安の念で感せずにはゐられないのであつた。そうに違ひない。この土地に來て、僅か一年たつかたたぬ内に一家七人のうち四人までがつぎつぎに死んで行つたのだ。そんなことが世の中にあり得るだらうか。極端

に不幸の家には稀れにそう云ふこともあり得るかもしれない。だが、その極端の不幸不運な出來事が今、自分の一家に起つてゐるのだ。そうして世の中には實際に、かくもひどく慘めな不幸不運があるものだと云ふことを自分で身を以て悟らせられたのであつた。大崎は世の中を恐れ、自分を取りまく、不氣味な存在に恐怖の目を向けざるを得なかつた。彼を恐怖させるその不氣味な存在といふのは、我々の言葉で言つてみれば「自然」といふべきものであらうが、大崎には、そういふ言葉の眞の意味はわかる筈がないので、彼はただ、自分を圍繞する曠野の一切のもの、自分の肉體の勞働の相手となる土地、どうしても自分の思ふようにならぬ季節と天候、それから、どうしても自分にはわからぬが、併し必ず確かに土地の中に潜んでゐるに違ひない或る力、なぞの複雜で不可思議な混合物として、彼の肉體にぢかに觸れるやうに感じられるのであつた。然もそういふ彼の不可思議な圍繞物から彼は何を與へられたらう。それは、「この新しい土地も、おそろしく何も出來ない土地だ」といふことに盡きるのであつた。もし彼が「自然」といふものの考へ方を知つてゐたなら、彼は自然の吝嗇の甚だしい一面を知つただらうし、また人間勞力の貧しさをも知り得たであらう。併し彼は不毛の處女地を通じて、漠然とした自然に對する恐怖感を身に感じ覺えたに過ぎないとはいへ、それは重大なことであつた。土地を相手に生涯を働き通す運命を負ふ百姓の一人である彼が自然に對して恐怖感を抱き始めたといふことは眞に致命的な打擊であつた。

彼に非常な決意をさせるに至つた不幸は、徐々に起つてゐたのであるが、この頃になつて遽か

に急を告げて來た。それは、殘つた二人の子、秀造とお松とが發育盛りの年齢に榮養缺乏が續いたので、お松は次第に背丈になり、秀造は智力の發達が障害を受けて停止したのか、白痴のやうに鈍間くさくなつて來たのであつた。一度それらの樣子に氣がつくと大崎の目は、始終、子供たちの樣子に引きつけられ、周圍が急に眞つ暗になり、全身の氣力が拔け落ちる思ひがした。

「ああ、おら、もう駄目だ。」

と彼は胸の中で絶叫した。自分の頭がどうかなつてしまつたやうに感じられた。そうしてこの絶望の悲嘆は、子供に對する恐ろしい盲目的な情愛だけを極度に強くさせた。この狂ほしい父親の愛情のために、彼の心は恐ろしく曲りくねつてしまつたが、併し彼としては、それが最上の愛情であり、最良の方法であると信じて疑はなかつた。

彼は或る晩、秀造とお松とに、今年の作が非常に惡くて、このまま此處にゐれば、冬には三人とも餓え死しなければならぬことを言つて聞かせた。このことは、畑の收穫の有樣を知り、日夜、餓えに曝されてゐる子供たちにはすぐわかることであつた。二人は背いた。大崎はそれから、小樽へ行けば、毎日、白い暖い御飯の食べられることを話し、それを食べたくないかと尋ねた。これは子供らにとつて、言ひやうのない大きい誘惑であつた。大崎は、それから、自分は釧路で少し稼いで、お金をとつて、迎ひに行くから、二人だけでさきに小樽へ行つてゐるようにと言つた。子供たちは疑つてみるだけの頭の働きがなかつた。餓え死しないためには、そうすればいいのだ。お父の言ふ通りにすればいいのだと考へた。二人は無邊作に、安心しきつて、背い

た。その樣子を見て、大崎は安心すると共に、胸が痛み、大きい涙がぽろぽろと流れ落ちるのを止めることが出來なかつた。

自然があわただしく秋の凋落、冬の枯死へと急ぐやうに、大崎も、それからあわただしく、この死の曠野から遁れ出ることに心を使つた。二度目の逃亡が、今度は人目や世間から逃げ隱れるのではなくて、無人境の自然の懷の中から人々の中へと彷徨し出るのであつた。前途の希望そのもののやうな新しい土地は今度は求められなかつた。老人や女たちを誘ふやうな鶴の話もなかつた。行手は眞暗で、何んのあてもなく、足の向くままに漂浪しなければならぬのであつた。さし當りの目あては釧路の町であつても、そこは、かつての新しい土地、百姓として心の親しみを抱くことの出來る野良ではなくて、うるさい、恐ろしい、とまどひする世の中なのである。そう思ふと大崎の心は、云ひやうのない重苦しさを感じるのであつた。併し今となつては、食べるものを拒み、與へない野良を去つて、その雜沓の中へ食を求めてさまよひ出なければならぬのである。餓えは大崎の重苦しい心に痛い拍車を與へて、巷へと驅り立てずにはおかぬただ一つのものであつた。

大崎は新しい土地を捨てて、再び曠野の上を、釧路の町を目ざして行く用意にとりかかつた。少しでも金錢になりそうな道具や品物は、一切合財持つて行つて、金錢に換えたかつたが、この

一年の間に運動と鹽との缺乏のため骨軟症にかかつて痩せ衰へた北星は荷物をつけて車を牽く力が覺束なかつた。貧しい家財道具の中、郷里から持つて來た幾つかの位牌と夜具布團と着類と、僅かばかりの收穫物のほかは、すつかり小屋へ殘し捨て、また木炭や薪は彼にとつては、一番、金錢になる物ではあるが、その全部を置いて行かねばならなかつた。殘り少い不出來の收穫物を俵に入れてみると、これが自分たち三人に殘された命の糧であるかと思はれて、この冬の賴りなさ、生甲斐なさをつくづく感じるのであつた。そうして早くこの土地を見限つて、去つてゆく氣になつたことを今では結局よかつたなあと思はずにはゐられなかつた。

併し愈々用意が出來たと思ふと、周圍に誰一人として氣兼ねし、はばかる人目のないこん度の出立が、虹別の時よりも、張合ひがなく且つ氣持に勇みがなかつた。その氣持のゆとりのために、彼は何かにつけて、虹別の時のことを思ひ出さずにはゐられなかつた。夜道をかけて、闇夜の曠野にも拘らず、おぢおぢと人目を避けて、見えもせぬ何ものかに絶えず追ひかけられてゐるやうに思つて道を急いだ、文字通りの夜逃げの不安と緊張との氣持ちを思ひ浮べた。併し今は、その時よりも、もつともつと惡い、望みのない出立であり、更にもつと大きい不運の軛へ、引きずりかけられるやうなもので、何んの慰めもなかつた。此處にゐれば、ただ餓え死するのを待つばかりだといふ怖れが、彼を彷徨へと狩り立ててゐる、ただ一つの、且つ一切の動機なのであつた。彼は今や、ただ何んとかして餓死の手から逃れ出ようとする一疋の生物にほかならぬのであつた。

曠野の上では、すべての草木や作物が陽光と暖氣とを最早や必要としなくなつてから、空は眞青に澄み渡り、夜中には急に寒冷に降下はするが、日中は暖い陽光と空氣が漂ふてゐた。何んといふ自然の皮肉な振舞だらう。だが、この晩秋の好天氣つづきは、自然が自分の懷の中から逃げ去らうとする敗殘の農夫親子の彷徨への路に最後の惠みを投げ與へてゐるのであつたかも知れない。それはひどい霜の、冷たい朝であつた。まだやうやくほの白い曉の闇の中で、大崎親子は、榾火を圍んで、南瓜の雜炊を食べて身體を溫めた。そうしてその殘りを晝食に當てることにした。しよんぼりとした北星が厩から引き出されて、馬車につけられたが、全く元氣がなく、霜の朝の冷い空氣に吐き出す、鼻息の濃く白いのが痛々しく、憐れに見えた。一切の用意が出來、秀造とお松とを馬車の上へ乘せると、大崎は、もう一度、暗い小屋へ入つて行つて、ただ何んとなく面恥かしいやうな戸迷ひしたやうな顏付で周圍を見まわした。小屋の中は、夜具布團なぞが見えなくなつただけで、格別にこれと變つた處もないのだが、氷の室のやうに、骨にしみ入る冷さが感じられた。榾火のまだ燃え殘つてゐるのが、暗い中に目に入つた。彼は、燃えさしの薪で、灰をかけて、小屋を出た。彼はそれから、裏の畑へまわり、傾斜を上つて行つて、まだそれほどにも古くなつてゐない、所有地標の前に佇立した。その傍には、彼の手によつて築かれた三つの土塚が、樣々の落葉に覆はれてゐた。野菊の淡紫色の花や、野生の萩の花が、咲きみだれてゐた。彼は茫然として、知らぬ間にうるほひ、熟くなつて來る目でぢつと標杙を見つめた。

「大崎常造所有地」

といふ標杙の文字は小學校だけしか出てゐない彼にも、よく讀むことが出來、その意味もわかつてゐる筈であつた。併し今や、にじみ出て來る熱い涙で、次第に目がぼやけ、胸もとが息詰まるやうに苦しく悶えて來ると、その文字は、「大崎常造之墓」といふやうに見え、眞實はこの自分がその標杙の下に死んで横たはつてゐるのではないかと思はれるのであつた。彼は、ふと、この標杙を造つた時に、木挽の爺さんや、生方牧場監理人の赤井さんや、うちの死んだ爺さんにまでも、墓杙のやうだと云はれた、あの縁起の悪い言葉を思ひ出した。彼は思はず、ぞつと身震ひした。みんなの云つたやうに、やつぱり縁起の悪いことだつたのかと彼は思つた。自分こそは、かうして生きてはゐるが、この標杙の下に、爺つあんも、おばばも、お種も、お捨も、お常も、入つてしまつたとせば、この所有標は、結局は墓杙に違ひないのだ。そう思ふと、彼は、今は自分は此の土地を去らうとはしてゐるが、どんなめぐり合はせで、この墓の下へ入いらぬものでもないと云ふ變な氣持ちがした。彼は思ひ出したやうに合掌し、身震ひしながら、そそくさと立ち去つて小屋の前の馬車へ戻つた。

「さあ、出かけるぞ。」

と彼は北星の手綱をとつて、彼のかつての新しい土地へ別れの言葉を投げかけた。彼としては元氣で怒鳴つたつもりであつたが、周圍には、空々しく、虚ろに反響した。北星は、ことりことりと、霜の深い山路を曠野の方へ車をひいて下りて行つた。

豪雄の一つの溜の傾斜地にある大崎の開墾畑から彼の拓いた坂路を下りると、曠野に出るのであつた。その曠野のとつつきには、柏の粗林を焼畑にした彼の土地が五反歩餘りあるが固作の跡地が見るも惨めな地面を露はしてゐた。彼は、すつかり見放してしまつたこの開墾畑を、さげすむやうな氣持で見た。收穫を與へないやうな土地は百姓にとつて、實際輕蔑のほかはないので、彼は憎々しげに畑跡を眺めやつた。馬車の通り得る程度の路は、この畑までしかなかつた。この畑を横切ると、それからは、南の方へ見當をつけで曠野の上を濕地をよけたり、枯蘆の原をこいだり、泥炭地をぐねぐね流れる泥川を渡つたりして、彷徨して行くよりほかに路といふ路はないのであつた。彼は、この一年の内に、めつきり脚腰の弱くなつた北星を怒鳴りつけながら、この土地へ移つて來た時よりも、もつと苦しい目に遇はねばならなかつた。南へ進むにつれて、濕地はひどくなり、晩秋の冷い水が曠野の泥炭に吸ひこまれてゐて、骨までしみ徹る冷さが、やがて痛みになつて感じられた。停つてばかりゐる北星を歩せるために、また路のない枯蘆の深い草原を渉つて方角を間違はぬために、彼はどうしても先頭に立つて北星の手綱を引かねばならなかつた。淺い、溝のやうな流れに來ると、北星は流れの中に立ち止まつて、いつまでも水を飲んで、動かうとしなかつた。この冬に小屋へ迷ひ込んで來た學生から、眞直に行つて四里ほどと聞いてゐたので、途中どんなに時間をとつても畫少しすぎまでには鉄路の町に着けるものと思つて、始めは、さほど心配はしてゐなかつたが、併し濕地や沼や深い蘆原で北星の歩みが難渋して來ると、この廣い枯れ盡した曠野で行末がどうなるのかと案じられて來るのであつた。

朝の陽光が晩秋の弱々しい力ではあるが朝露を次第に散じさせると、淡い澄みきつた青空が曠

野の上は展がつた。北星と自分との足にはね飛ばされる濕地の溜水の音や、泥濘の音や枯草のさらさら鳴る音が、冷たい感じながら爽かであつたが、暫らくすると、いつの間にか淡い青空に白い雲が幾つも浮び、更にその下方に低く灰黑色や紫黑色の雲の固い塊が厚い壁をなして次第にはびこつて來た。寒い風が、思ひ出したやうに、ざわざわと曠野の上を方角も定めず吹きまわり、周圍が遽にうす暗くなつて來た。この廣い濕地の上で雨に逢つたら大變だつと思つてゐるうちに、大粒の冷い雨が、枯草の上に、如露で水を注ぐやうに、さあつと降りそそいで來た。それと同時に、恐ろしい疾風が渦を卷いて曠野の上を、のたうちに逼ひ廻り、枯草を四方八方に靡き倒し、濕地の上には雨水がじくじくに溜つた。大崎は、あわてて馬車の上へあがり、蓆を出してそれをかぶり、三人の子供を左右から抱き寄せた。北星も蘆原の中にぢつと停つて、うな垂れたまま冷い雨を浴びてゐた。水のどよみが響を鳴らして襲來する毎に、枯葉や折蘆が空に吹き上げられ、大粒の雨と思つたのが、大きい霰に變つた。その霰の厚い白い幕が風の荒れまわるままに、左から吹きつけられたり、右から叩きつけられたり、下からあふられたりした。この阿寒岳の方から稻妻と雷鳴とが聞えて來た。曠野はいつの間にか黃昏の迫つたやうに暗くなつた。大崎は一時間ほどで過ぎつて行つた。だが車上の彼等は、ずぶぬれになつてしまつた。大崎は一分でも早くこの曠野を逃れ去らうと思つて再び馬車から下り、北星を怒鳴りつけながら歩みを急いだ。彼はそのうちに、自分の進む方向が、どうも左へ左へと曲るやうであり、その上、濕地もひどくなるやうなので、思ひきつて、やや右へ方角を換えてみた。そうすると、粗林も隙々にあり、濕地

もやや淺くなり、枯蘆の他に雜草の茂つてゐる草地もあつて、餘程、歩みやすくなつた。併しそれから間もなく、一時に肝の冷えるほど驚き怖れることにぶつかつた。彼は原野を進んで行くうちに、あるかないかのやうな細い路ではあるが、兎に角、一筋の野路に突き當つたのであつた。彼はまるで、一人の人間か或ひは恐ろしい熊が突然行く手に立ち現はれたやうな驚きと怖れとで胴震ひして立ちすくんだ。併し次の瞬間に、彼は全く救はれ助かつたと思つた。この路を左へさへ行けば、きつと釧路の町へ出られると感じとつたのであつた。彼はやうやくほつとした。と同時に彼はまた意外のことに驚いた。それはいつの間にか、丘つづきのやうな低い山の一つの崎が間近かに横たはつてゐるのであつた。そうして小徑はその崎に沿ふて南の方へのび、崎を過ぎると亦、曠野の中へと通つてゐる樣子であつた。大崎は餘りに右へ方向を換えて、ひどく廻り道をしてしまつたのだと思つたが、併しとに角、小徑に出ることの出來たのが彼に安心を與へた。この路は廻り廻つてでも、必ず釧路の町へ行かれるものと思はれた。釧路へすぐ行かれなくても、何處か釧路の近くの部落へ出られることは疑ふことが出來なかつた。

「さあ、路さ出たどう。もう少しで釧路の町さ着くからな、もう少し、辛棒してけれや。」

と彼は身内にしみ込む冷さをも忘れて子供たちに言つた。路と言つても、車は左右の雜草にすれからまり、又泥濘なので樂な路ではないが、北星の弱い脚には、歩む力が出たやうに見えた。大崎はやはり先きに立ちながら消えたり、絶えたりする小徑を辿つて歩みながら、この小徑を逆に辿つて行つたら、どんな曠野や山々の奥に開墾の人たちが入つてゐるのだらうと考へた。そう

して、かつて土地を見つけに虹別からこの曠野へ入りこんだ時に見つけた小徑と、その小徑で思ひがけなく出會つた年寄のことを思ひ出した。あのときにはお互に作の出來のひどく悪いことを話合つて別れたが、今年もあの爺さんは、きつと凶作に逢つたことだらうが、どうしてゐるかと思つた。それから、引きつづいて、虹別開墾地の津田爺さんや、その他の人たちや、作の樣子なぞを想像してみた。彼には、どうしても虹別開墾地の人たちも今年も亦、大凶作に逢つて難儀してゐるとしか考へられなかつた。そうして澤山の借金取りが、あの開墾地にうようよと入り込んでゐるに相違ないと考へた。そう考へると、彼の氣持ちが輕く、苦しみも薄くなるやうに思はれた。

「おらばかりが貧乏して、苦しんでゐるんでない。」

といふ考へは、彼がただ一つのよりすがる慰籍であつた。そのために、自分の貧乏が消えて無くなるのではないが、少しは貧乏が誰かに肩替りされたやうな安易な氣持ちがするのであつた。謂はば自分で自分を欺いて安堵してゐるのであつた。

彼の辿る小徑は今にもこれで絶えるかと思はれながら、細々と續き、その方角は大體に彼の目ざす方角に向つてゐると思はれた。彼はこの路さへ踏み外らさなければ、そのうちに釧路へ出られる、もし間違がつたとしても、何處かの部落の市街地へきつと出られると、かなり安堵の氣持ちになつて來た。渦巻く風雨は通過してしまつたが、次第に灰黒色の雲が空を覆ひ、曠野の末の方に、狹く僅かに雲の切れ目が淡白く見えるばかりで、うす暗く寒かつた。

「爺父、腹へつたぞ。」

と秀造が、背に覆ふてゐる莚の蔭からおじおじとした聲をかけた。大崎も、その聲で自分の空腹に氣がついた。晝時にはまだ早いが、朝立ちが早かつたのと、道が難儀であつたので、氣がついてみると、空腹がかなりひどく感じられた。

「ようし、飯くうか。」

と大崎は、むしろ機嫌よく返事した。大崎が止まると北星もすぐ停り、傍の草叢へ首を伸して、草を食べ始めた。大崎は車の上へあがつて、道具の中から、朝食の殘りの南瓜の雜炊と、馬鈴薯のむし燒いたのを取り出し、親子三人が軍の上で倚りそうてそれを食べた。大崎は食べる間にも、路を急ぎたく思ひ、中途で食べるのをやめ、北星の先きに立つて歩き出した。やがて、小徑は丘の崎を過ぎて、左右に廣い曠野の上へ出た。子供たちは、馬車の上で、おとなしく、むし燒きの馬鈴薯を食べてゐた。冬枯の雜草や、蘆原に挾まれた單調な小徑を歩いてゐるうちに、それがいつの間にかや廣くなつて來てゐるのがわかり、大崎の氣持ちは明るくなつた。暫らくしてまた泥川を渉つて、眞直な小徑を進んだ。それから又怖れるほどに驚いたのは、その小徑が線路を横切つたことであつた。驚きと悦びで胸がどきんどきんと強くうつのを感じた。彼は線路の上に暫らく佇立し、山奥から突然、世の中へ投げ出されたやうに不安な眼で線路を右に左に眺めた。小徑は線路際で廣い道路に合し、線路を越え、その向ふに、ぐねぐねと曲つた大きい河に沿ふて通じてゐた。その道路には、一筋二筋、馬車の轍の跡が殘つてゐて、馬糞もあつた。彼は躊

躇なく、そのやや廣い路へと左へ折れた。北星の歩度も樂そうに見えたので、彼は車に乘つた。すると、彼は思はず、あつと叫ばずにはゐられないものを遙か遠くにではあるが、行手に眺めることが出來た。それは、工場らしい建物と、高い煙筒とであつた。彼は胸が動悸し、眼頭が熱くなるやうな氣がした。彼は馬車の上に突立つたまま北星を進ませた。動搖する車の上から、際涯のない曠野の左方の末に目をやり、また通つて來た曠野の上をふりかへつてみると、彼は今、かうしてそこに自分のゐることが不思議でたまらなかつた、過ぎ去つた北の方の遠い遠い末の方に低く、丘のやうに、山々が連なつて眺められ、自分がそこから逃れて來た自分の希望の土地がそこにあつたのか、あの土地は今、どうなつてゐるだらうかと思ひ出されるのであつた。そこと、こことは、この朝出發したばかりで半日餘りの道程しか距たつてゐないにもかかわらず、時間も空間も全く考へられぬ永遠の過去の世界となつて終つたやうにも思はれた。併しまた、もし今このままあそこへ戻つて行つたら、彼はこれまでの道程も、逃亡の決心も、何もかにもうち忘れて、昨日と全く變るところのない生活がそのまま何んの變化もなく、再びうち立てられ、そのまま引きつがれてゆくのだとも思はれるのであつた。そうかと思ふと、また、そこは一切の緣故も、つながりも全く絶ち消えた遠い遠かな過去としか思はれず、曠野の末の工場と煙筒煙とが、彼に新しい望みと元氣とを與へ、こちらへこちらへと彼を誘ひ導くのであつた。彼は何かしら身體の內に溢れようとして盛り上つて來る力を感じるのであつた。

「町には仕事があるに違ひない。仕事さえあれば生きてゆかれるにきまつてゐる。町には凶作

なんかないに相違ない。あんなに澤山の人が働ゐて食つてゐるんだから。」

彼はもう胸の中で考へてゐた。彼は最早や車の上に腰をおろす氣がしなかつた。それ處か、彼は北星の歩度が間鈍くて、いらいらした。彼は車から飛び下り、先きになつてぐんぐん手綱を引いて歩いた。併し道は、ぐねぐね曲つて流れる河に沿ふて單調で長く、遠かつた。やうやく、ぽつりぽつり、開墾農家の小屋が、河向ふの岸や、路傍に散在して見えるやうになつた。彼は嬉しいばかりか、何かしら、誇りたいやうな氣持がしたり、くすぐつたい悅びのやうなものを感じた。彼の目は忽ち、それらの農家の畑が、ひどい凶作に襲はれたに相違ないと見てとつて、ここにも仲間の多いと言ふ安堵を感じた。凶作はどこも普通なことで、この邊の農家は、あり來りの凶作に何にもひけめを感ずる必要もなく、凶作は凶作と、太つぴらに言ひふらしてもかまわぬのだなと言ふ氣持がした。そうすると、氣持が急に樂になつて、胸許につかへてゐた凝りが一時に消え、溜飲が下つたやうであつた。何んのために、これまで、凶作、凶作つて、それにばかり頭を突つ込み、氣を腐らせてゐたのか、わけがわからぬやうな氣がした。

彼は心の中で言つた。

「凶作は何處にでもあるんだ。凶作だからつて、逃げ隱れしなくてもいいんだ。それに、世の中には凶作のない、いつでも働く仕事のある處があるんだ。それは、あの町だ。工場がある。煙筒がある。煙が昇つてゐる。あそこに仕事が山ほどあるんだ。」

長い橋を渡ると彼のかういふ悅びと確信を證據立てるやうに、家々が軒を並べてゐた。荒物屋